THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿三年 第八號

第二百三十三號

姉

朝御飯をいたゞくまへに寶丹を一匙づゝ服用ておくと、終日氣分が良くッて、それでまたどんな不陽氣でも決して時候に中らないから、千代ちゃんも毎朝忘れないてお服用なさいよ、そして先頃から三十錢以上の寶丹には斯樣に美麗しくッて可愛らしい匙が添へてあるから眞個に便利だワ……

有僞造物

乞御注意

大日本 登録 商標 起死回生 寶丹 守田氏製

寶丹主治

氣鬱	船車醉	日射病
胸腹痛	下痢吐瀉	肺病豫防
頭痛	宿醉	齒痛
食滯食傷	息切	聲嗄喘息
精神疲勞	疝癪痞疾	水傷
消化不良	痰咳嗽	四季感冒

寶丹定價

家庭用	壹圓	貳圓	參圓
懷中用	廿錢	卅錢	五十錢
御試用	十錢		

夏季旅行には護身藥として必ず寶丹を携帯せられん事を望む、殊に海濱または山地への避暑客は救急藥として常備あれ。

妹

それに妾は夜分になると、頭痛のする性分ですから、夕飯後にも一匙づゝ服用ませうよ、併し世の中には隨分惡い人があると見えて、寶丹のにせものをこしらへて賣るさうですから、東京下谷池之端仲町貳拾七號所有地守田治兵衞といふ所名と、アルミニユームてこしらへた容器の蓋にある商標とに注意しないといけないことョ……



此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



市内は御一報次第直に御一覧に供し可申、地方の御注文は直ちに發送する手筈整ひ居候

内地小包料は代金引替手數料共金貳拾錢臺灣樺太滿韓送料は金卅五錢

弊店主任高橋彌四郎儀は舊トモエヤ支店長として廿有餘年間勤務せし處曩に同店を辭し右の場所に合資會社アヲキ商店を組織し多年練磨研究の功を實地に應用し各位をして後顧の憂なく且流行に遲れざる品物を確實廉價に販賣仕候間何卒御引立之程奉希上候敬具

市内ハ電話又ハ御一報次第早速店員御用伺ニ參堂可仕候

安心の出來る
クツとカバンは

アヲキ商店

京橋區南傳馬町一丁目東側
電話本局　一七四三番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一金七圓五拾錢也　同 徑三寸丸　同目方正味二十九匁付

一金拾圓九拾錢也　同 徑三寸五分丸　同 目方正味四十匁付

一金拾參圓貳拾錢也　同 徑四寸丸　同目方正味五十匁付

一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味五十五匁付

一金貳拾壹圓八拾錢也　同 徑五寸丸　同 目方九十匁付

三ツ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸臺三ツ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付

一金拾七圓貳拾錢也　同 徑三寸丸 同　同 目方正味五十五匁付

一金貳拾壹圓八拾錢也　同 徑三寸五分丸 同　同 目方正味八十匁付

一金參拾壹圓也　同 徑四寸丸 同　目方正味百卅匁付

一金四拾圓八拾錢也　同四寸五分丸 同　同 目方正味百八十匁付

一金五拾壹圓九拾錢也　同 徑五寸丸 同　同 目方正味二百卅匁付

（定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢）

（文字彫刻　一字　金拾錢）

（大字彫刻　一字　金七拾錢）

其他御好に依り彫刻類返速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品

貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品

金銀時計類同附屬品類

商 玉寶堂

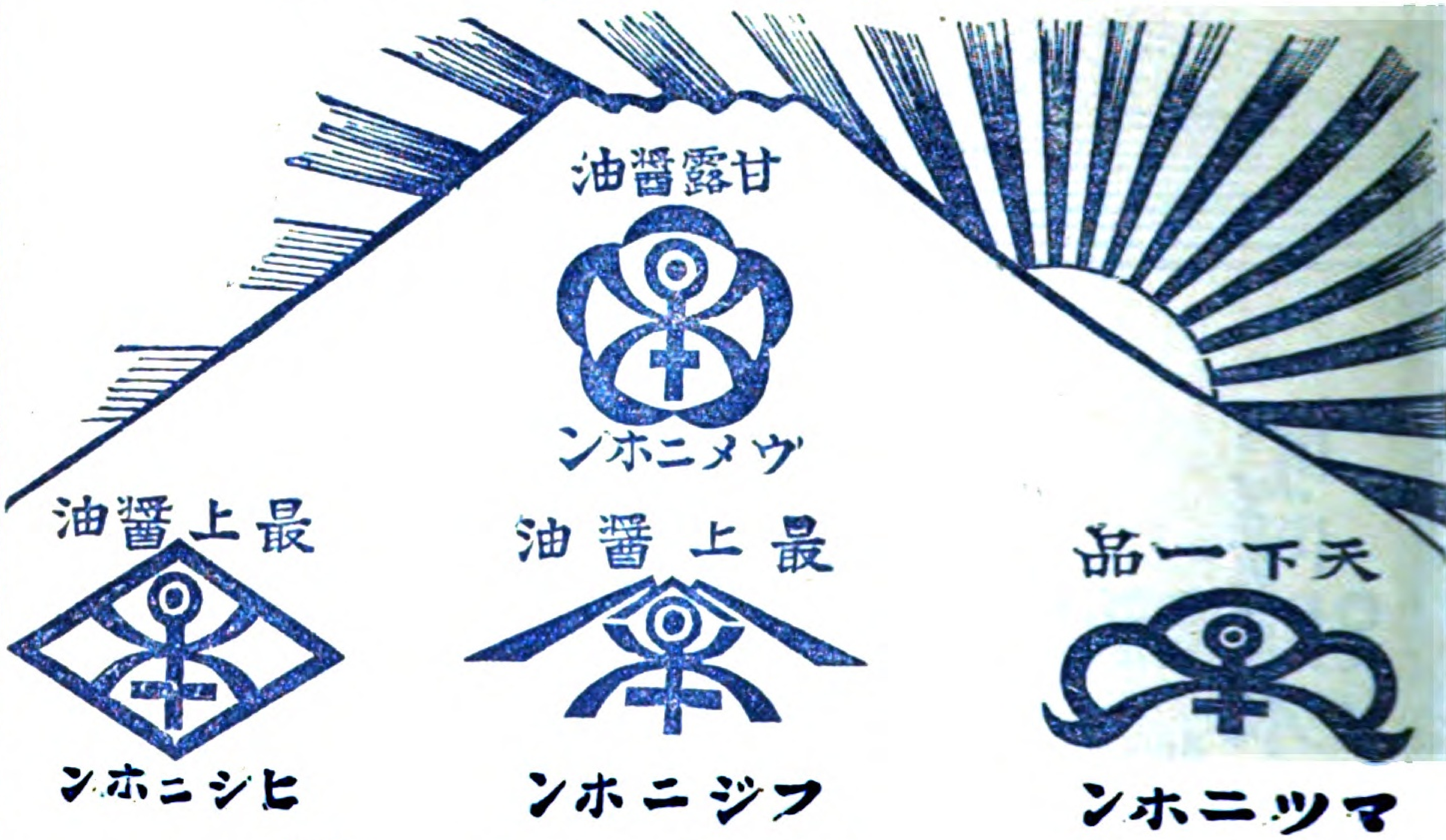
東京市下谷區池之端仲町二十九番地

（電話下谷特九六五 一二四四）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

醬油釀造界の一大革新

最良醬酒



資本金壹千萬圓

釀造元

東京深川區小名木川通 電話浪花「長」三七七三番 一五九五番

日本醬油釀造株式會社

特色

製造清潔
品質佳良
黴を生ぜず
價格低廉

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醬油を釀造販賣す

特色

特約販賣所

東京日本橋區北新堀町 電話浪花「長」一四六番

合資會社 日本醬油東京販賣所

其他東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

信用ナキ店舗及卑猥なる賣品の廣告は掲載[illegible]



中央公論第二十三年第八號目次



THE WATERFALL



BY RUYSDAEL



第二十三年
第八號
第二百卅三號

内閣更迭の眞相

（一）

西園寺内閣の辭職を以て意外とするもの之を嘲けりて頓死と稱す、然れども少く醫術の心得あるものは　其の病根の所在を認知して、其の運命の定まるの甚だ遠からざるを豫知したりし筈也。

吾人の曾て論じたりしが如く、今春一月中旬に於ける大藏遞信兩大臣の確執に由て、西園寺侯及び閣臣一統の奉呈したりし辭表は、幸ひに御聽許なかりしがために、唯だ兩大臣を辭職せしめて局を結べりと雖も、首相及び閣臣の責任は之を以て全然解除したりしとは做す可からざりき、當時山縣、松方、井上三元老の意向は詳かに之を知るを得ずと雖も、元老の筆頭にして且つ信倚の最も厚き伊藤侯が、此の際内閣の更迭を不可なりとして、西園寺侯等留職の已む可らざるを伏奏したりしがために、西園寺侯等

覺に其の地位を動くに至らざりしと雖も、然かも理義に明敏なる侯其の人は、早晩其の職を退くを以て責任の大義を明かにする所以なるとを信じて、密かに其の機會を俟ちたりしが如し。

惟ふに西園寺侯は、議會閉會を以て其の機會と爲したりしに似たり、吾人は伊藤公が京城に於て、西園寺侯の既に三月中に辭任の意を漏らしたりしとを語り、其の期限の總選擧終る後にして、且つ諸元老皆之を默認したりしと言へるの、頗ぶる根據あるを信ぜんと欲す。

然れども西園寺侯の周圍には、常に其の袖を控へて熱烈に留職を要望するものあるとを忘る可らず、彼等は如何なる場合に於ても不人望なるべき增稅案を提出したりし時、徒らに他人のため栗を火中に拾ふの愚を做す可らずといひ、此の時よりして既に全力を擧げて自個の內閣(彼等自からは斯く信ぜしなり)を維持して、以て一方には衆議院に多數を占むると同時に、一方には勢力を貴族院に扶殖して以て大に雄飛を試みんとを決心したりき、隨つて如何なる事情ありとも、自個の內閣の下に於て總選擧を行はんと覺悟したりしものなるべし、伯爵同志會なるもの丶起りたる時、彼等が貴族院に一丸を投ぜんと欲して、如何に苦心したりしかを知るものは、彼等の志の甚だ小ならざるを看取すると共に、其の意氣の甚だ壯なるを感嘆せざる能はざるべし。

彼等が其の與黨をして、柔順に、一切を犧牲にして盲從せしめたりし苦衷を諒とせば、冷靜なる西園寺侯と雖も多少心を動かさゞるを得ざりしなるべし、吾人は當時西園寺侯が或は初心を一擲したりしとなきや否やを疑問とす、侯が三月下旬に於て貴族院より千家男堀田子を起して、司法遞信の兩大臣を補

缺したりしを視て、即ち其の一證ならざるやを思はざる能はざるのみ。

若し策士的口吻を以ていはゞ、西園寺侯が堀田子千家男を拔擢せるは、假令忽ちにして辭職すとも、此の拔擢に由て貴族院の同情を吸集して、他日の地を爲すに便宜なるを圖れりともすべし、侯或は辭職の決心を飜へさずとせば、或は斯く期圖せるや實に測る可らざる也。

(二)

當時政府側の意氣は、實に全力を盡して邁往するにありしが如し、而して一般政界を視るもの亦皆斯く信じたりしが如し。

旣にして總選擧を終るや、西園寺侯の所謂政友會は、豫期の如く絕對的過半數を制するに至らざりしと雖も、尙ほ數名を拉し來らば、優に衆議院を自由にすべき望みありき、玆に於てか六月中旬其の大會なるものを東京に開きて以て其の儀容を盛ならしめたり、解するもの多くは曰く、是れ政友會が衆議院に絕對の多數を占むるを確かめ、又貴族院操縱に成算あるを以て、元老の容喙を一蹴し、前內閣派及び反對黨の反感を踏破して、獨力事に當るの決心を堅めて、先づ一種の示威運動を爲したりしに外ならずと。

解する者の說の當否は姑らく措く、政友會の多數者も亦實に然か信じたりしが如し、また何ぞ自個の內閣が倏ちにして崩壞し去るを豫期せんや、然り、彼等は肩を張り目を揚げて今日以後をと踴躍せる也、其の地位の一變するが如きは、全く夢想だもせざりし也。

故に西園寺侯が七月三日を以て掛冠の意あることを發表するや、彼等は爆彈の天より降れるが如く喫驚せざるを得ざりき。

彼等は西園寺侯の辭職を以て、單に病氣の故なりとは信ずる能はざりき、侯が東山に妓を携たる謝安を學びて、新橋の美妓數輩を提げて箱根塔の澤に盤桓し、矢を飛ばし、ダイアポロを弄し、球を突きて、怡々談笑したりしに視れば、掛冠の單に病の故のみに非ざるや知るべきのみ。政友會の或るものは、其の公會に於て、首相辭職の眞相を調査すべしと絶叫し、竟に委員をも設けたりしが、彼等は多く山縣公が社會主義者の猖獗ならんとするを以て内閣を彈劾し、西園寺侯以下實に佛國の共和主義を奉ずるものなりと闕下に伏奏したりしゆゑ、侯憤慨して急に辭せりと稱して、深く公等に啣むの態度を暗示し、而して比較的に信用ありと稱せらるゝ某新聞すら、此の事實らしきことを報導するに至れり。

吾人の聞く所によれば、米國に在留して曾て大統領ルウズヴエルト氏を暗殺すべしと飛檄せる日本人の社會主義者（寧ろ無政府主義者）は、列國の主權者を暗殺すると共に、我が至尊にも凶惡手段を施すべしといへる、不敬不忠を極めたる文書を宮廷に郵寄したりしといへり、古來忠誠なる日人にして斯る擧動に出づるは、之を聞く官民の共に驚異し痛嘆する所なるべく、隨つて宮中の一部にも多少の議論ありしなるべく、山縣公の如きも坐談の序を以て、例の眉を寄せて嘆息したることもあるべし、然かも之を以て政府を非難して闕下に伏奏したりといふが如きは、實に嗤ふべき飛説のみ、或は此の飛説を以て政

友會の或る有力者之を放ち、以て後繼內閣を組織せんとする者を威嚇する目的に出づと做すあり、始め信憑するに足る人々の口より其の說の出でたりしに徵するに、或るもの〻想像また多少推測の根據なきにしも非ず。

或は松方井上兩元老の財政に對する諸種の容喙こそ正さしく西園寺侯をして厭はしめたる主因なれといふ者あり、然れども西園寺侯の家格と人品とに對しては、松方侯の如き無下に干涉する能はず、井上侯も侯の內閣には寧ろ善意を有したりしを以て、其の容喙必ずしも掛冠の唯一原因とは視る可らず。

西園寺侯は實業家と稱するもの〻招宴等には一切出席せざりき、是れ歷代の首相と頗ぶる撰を異にしたる所とす、侯は文士又は俳優の如き徒と屢々飲宴して所謂方外の遊びを爲すの餘裕を有したりしも、實業家なるものとは曾て會飲したるとあらざりき、政友會の幹部、殊に松田、原の諸氏は侯が寧ろ節を折つて實業家輩の歡心を收攬せんとを希へるならんも、然かも侯は儼乎として玆に出でざりき、所謂紳縉の風末を矜持したりしもの、俗を拔くと一等なりしも、竟に實業家の歡心を得ると能はざりき。

實業家は大藏大臣たりし松田氏の餘りに禪僧めきたるに阿然たらざるを得ざりき、氏は多年黨界に奔馳して黨情に通ずると深く、苟くも大黨を提げて臨まば、實業家の如き一喝して斥け得べしと做したりしが如し、故に彼等諸種の言動を爲すや、常に洒然として禪僧然たる語言を爲すのみ、心裏冷笑を禁ぜざりしに似たり、首相は獨り高くして酬ゆる所なく、大藏大臣亦超然として禪僧たる以上、實業家の愁訴が勢ひ松方井上の兩元老に集中せざるを得ず、而して此の愁訴を受くる兩元老が各自から日本第一の

財政通を以て任じ、且つ異常の世話好きなるに於て、絶へず西園寺侯及び松田氏の四邊に容喙を浴せ來ると必然のみ、松田氏は素より之に對して依然禪僧の態度を變ぜざる可く、時宜に由ては之を一蹴するの勇氣も亦之を抑ゆる能はざりしならん、西園寺侯に至ては、假令松田氏の如きに至らざるも、亦時としては超然たる姿態を持し得ざりしにあらず、即ち兩元老の容喙の如き、假令五月蠅と雖も、また之がため掛冠せざるを得ざる程にも非ざりしならん。

（三）

然らば則ち西園寺侯掛冠の主因は何ぞや、吾人の推測を以てすれば、侯は外交と財政とに於て中外の非難漸く高くして、政府益々民望を喪はんとするを視て、再び最初の決心を呼び起したりしのみ、侯の爲めに計るに、政友會を提げ、貴族院を操縦して、强ひて其の地位を固守せんとせば、素より必勝の算あるにあらざるも、亦必敗の理勢あるにも非ず、唯だ斯の如くにして益々民望を失はゞ、啻だ元老、前内閣派、反對黨、實業家の憎惡を受くるの外、汎く國民の反對を蒙むりて、容易に再起す可らざる窮地に陷るの虞あり、苦鬪惡戰の結果、假令一二回勝利を得るも、詮ずる所は竟に然らざるを得ざるのみ、侯の聰明なる、此の成行を看取し、早く病に托して掛冠し、他日再起の餘裕を剩し置くと共に、又今春以來の問題たりし責任を解除し、以て宿昔の志を成したりしのみ。

吾人は斯く推測して、侯の聰明の超群なるを思はざる能はず、其の僚友及び政友會の熱望、計圖、愁訴の上に超脱して、寸毫も煩累されず、霄漢の皓鶴の如く、往かんと欲する所に往きて九皐に翺翔す、

風格の高きと實に數等なるを認めざる能はざる也。

西園寺侯が掛冠に當つて、其の閣僚及び政友會の幹部に示すに、四十一年度豫算の遂行及び四十二年度豫算編成の方針共に定まり、鐵道特立の案亦略々成りて、前途何の阻碍あらず、單に病のための故に現職を辭すといへるが如きは、また故らに辭色を示さゞらんと欲する用意のみ、政友會員の之を信ぜざりしが如く、天下何人も之を信せず、但し心あるものは政友會の多數及び一般新聞の想像するが如く想像せざるのみ。

（四）

西園寺侯は六月下旬一書を京城なる伊藤公に贈りて辭職の決心を告ぐると共に、密かに原、松田の兩氏を大磯の別墅に招きて同じ意思を示したりき、兩氏は切に諫止したるらしく、然かも竟に侯の心を飜へすと能はざりしが如し、斯くて侯は其の月廿九日兩氏と歸京し、七月三日桂侯を駿河臺の自邸に招きて辭職の決意を示し、且つ侯を後繼内閣の首班に奏薦するとを告げたりき。

明治三十八年十二月下旬、桂侯が其の内閣を去るや、西園寺候を奏薦すべしといひ、侯と共に多く協議する所ありき、當時西園寺侯は辭職の場合また桂侯を推薦すべきを約言したりしを以て、今や心私かに桂侯を奏薦するを欲せざるも、曩昔の言に對して然かせざるを得ざりしといへり。

西園寺侯より後任推薦を内示せられたりし桂侯は、各元老とも協議すべきを答へて退き、山縣井上の兩元老を訪ひ、即夜平田、清浦、大浦其の他の人を招きて、西園寺侯辭職の次第を告げたりき、

西園寺侯は閣僚にも告ぐるに辭職の意を以てし、總て侯に倣ふと答ふるや乃ち悉く其の辭表を集め、翌四日參內して伏奏し、以て骸骨を乞へり、斯くて內閣組織の大命の桂侯に下りしは十二日にして、其の間、內大臣の秘書官京城に抵りて伊藤公の意見を徵し、十一日歸京復命するや、直ちに山縣公、井上侯、松方侯の意見を徵せられ、然る後大命の桂侯に降りしと旣に新聞紙の報ずる所の如し。

桂侯は大命の下るを豫期して、私かに商量する所ありしと雖も、然かも之を他人に計らず、單に平田男とのみ凝議したりき、故に清浦、大浦の諸氏多少意見を進めたりしも、侯は多く耳を傾けざりき、蓋し平田男は山縣公に隨つて多年政務の樞機に參して、典故に熟練したりしのみならず、最も穩厚平正にして私情なきを以て、桂侯が初度の內閣を組織したりし時、專ら男にのみ諮詢して學習する所多かりき今また專ら男とのみ凝議せるも此のためなりといふ。

清浦子は少しく自から高く標置する所あり、且つ今の場合後進を薦むるの賢なるを慮かりて、小松原都築の諸氏を推薦したりき、一說に後藤男も亦實に清浦子の熱心に推薦したりし所なりとも傳ふ。

吾人の聞く所によれば、大藏大臣には別に專任の人ありき、然れども實業家の財政上に對する要望が井上侯を透して桂侯に通ぜられ、且つ井上侯大に其の要望を支持したりしがために、大藏大臣は竟に桂侯之を兼任するに定まれる也。

都築馨六氏も亦推薦せられたる一人なりき、氏は十三日朝鎌倉より歸京して曰く『余が最適任と自信するは外務也、然らずんば內務也、然らずんば遞信也、之を除きては余に自信あるとなし』と、玆に於て

が議會に纏まらず、氏は一夜を東京に寢して翌朝再び飄然として鎌倉に去れり。

桂侯は大命を拜したる後、始めて公然閣僚の撰拔に着手し、山縣公を煩はして寺內子の留任を求め、且つ寺內子と會見して之を決し、同時に自家の財政外交に對する方針の大要を明示して入閣を勸めたりしは大浦、小松原、後藤の人々なりき、又都築氏との評議調はざりしより、更に岡部子を起して司法に推薦するに決し。十四日之を闕下に伏奏して、其の午後親任式を視るに至れる也。

（五）

吾人は順序として玆に桂侯の主義と、其の起つに至れる經路とを叙せざる可らず。

日露講和の已む可らずして、而してポーツマス條約の兎にも角にも當時の狀態に於て餘儀なきものたりしとは、苟くも識慮ある士人の齊しく認取する所なるも、俗論は却つて熱烈に之を非難し、激論詭說、竟に人心を極度まで煽動して、帝都の中央に燒打の醜體を演出するに至つて、民心は幾んど桂內閣を去れり、桂侯の心より之を視ば、俗論の玆に至ると實に心外に堪へざる可く、假令一度其の地位を去るも、他日必らず之を洗雪するの情切なりしならん、故に後任に西園寺侯を推薦するに方つても、侯に托するに所謂戰後經營の難局を以てし、力めて之を援助して以て交情を温め置きて、他日再起の地步を占むるを期せしなるべし。

西園寺侯の部下に原、松田、長谷場の諸傑ありて、鬪志甚だ壯なるが如く、桂侯の帷幕中にも亦大浦、清浦、關の諸俊あり、各々事あるを好みて常に髀肉の嘆に耐へず、互ひに其の勢ひを張り力を伸べて相

競ふ志あり、原氏等が貴族院に於ける桂黨の勢力を衝動して、粉碎の機會を作らんと欲して、試みに郡制廢止案を提出するや、兩侯の部下は玆に激しき一場の爭鬪を生じたりき、爾來地方官の更迭によつて政友會の勢力を扶殖し、且つ府縣會議員の選擧によつて、政友會が露骨に其の勢力を伸張するや、桂侯の部下は之を嫉視して益々反感を挑發せられたりし形迹なきにあらず、桂侯と西園寺侯との交情は、此がため多少冷却さるゝ傾向を免かれざりしと勿論なるも、然かも尙ほ部下を戒飭して公然相爭はしむるには至らざりき。

彼の鐵道國有の如き、將た增税の如き大問題は、衆議院に多數黨を有する西園寺侯に非ざれば之を解決し得べからずと雖も、侯また全く桂侯の援助を借らざれば完成し能はず、桂侯の援助あるに非ざれば、貴族院を通過すると難ければ也、此の事實は鐵道國有案に於て、桂黨が貴族院の懷柔に苦心したりしを視ても明白也、單に貴族院に多くの同情者を有する桂侯と雖も、西園寺侯の如く衆議院に多數黨を擁するに非ずんば、到底斯る大問題を通過せしむ可らず、然れども桂侯より之を視れば、衆議院を操縱するは貴族院を御する程に難からず、政友會の內眞に權勢に付隨するもの少からず、況んや進步黨の如き多年政權に渴するものあるをや、侯一呼せば、彼等咸來り投じて、衆議院に過半數を制するも決して不可能にはあらじ、故に侯は其の政權を把握するに於て必らずしも其の部下の如く性急ならずと雖も、然かもまた機會を覗ふとを怠る人にはあらず、今春一月阪谷山縣の兩相が辭表を出すや、侯實に一蹶して起たんと欲せし也。

然れども伊藤公の伏奏に由て、而して寺内子が泰然として動かざりしに由て、侯は竟に其の志を果さゞりき、但し此の破綻以來の成行は、侯の寸時も眼を外さゞりし所なるべく、西園寺侯が三月に於て既に總選擧後に辭職すべきとも、聰明なる侯は之を知ると熟せしなるべし。

大藏大臣松田氏が群謗衆譏の焦點となりて、而して實業家すら齊しく起つて鉾を玆に向くるや、桂侯は正さに『時は今天が下知る』の感なき能はざりしなるべし。

世或は桂侯が諸元老を指嗾して西園寺内閣を窘めたりと做すものあり、是れ侯と元老との關係を知らざる昧者のみ、諸元老假令毫せりと雖も、未だ桂侯に指嗾さるゝ程には至らず、桂侯の智惠假令巧みに諸元老の間に處するとは雖も、未だ之を指嗾して堂々たる金門の出たる西園寺侯に向はしむる能ざる也唯だ西園寺内閣は、不幸にして其の外交と財政とにて人望を失ひ、諸元老に悦ばれざると共にまた國民にも厭倦せらるゝに至れり、是れ桂侯に取ては果實正に熟せるの秋也、手を下さずと雖も墜ち來らん。

桂侯が諸種の陰謀を企てたりとは、吾人の未だ見聞し得ざる所也、然れども侯が部下の踴躍して起たんとするを抑へながら、密かに自から虎視眈々の態を執れるとは蔽ふ可らず、今春以來正さしく然り、殊に三月五月以來は最も然り、而して是れ政事家の常態のみ。

（六）

桂侯の新内閣は、果して如何なる方針を以て進むべき乎、孔子曰く『視二其所一レ以、觀二其所一レ由、察二其所一レ安、人焉廋哉、人焉廋哉』吾人は侯の閣僚の人撰を視て以て之を察す、蓋し中らずと雖も必らず遠から

ざる也。

侯が遠く倫敦より小村伯を招きて之を外務大臣たらしむるより視れば、其の外交に於て大に力を致さんとするを思ふべし、侯及び侯の部下は、常に對淸外交の不振を慷慨しつゝありき、小村伯は曾て北京外交團より『廿日鼠』の綽名を受けて、其の凡骨ならざるを知られしと共に、一種の淸國通としても有名なりき、乃ち侯の爲め外交方面を擔當して殊功を成すもの伯に優さるあらざる可く、適任者殊にポーツマス條約より來れる俗論の汚辱を雪ぎて、伯の名を成さしむるも亦今日を好機會と自信せしなるべし、伯がウイッテと折衝して歸來旅裝を解くに遑非ず、更らに北京に往きて慶親王袁世凱と樽俎の間に談判し、病軀疲困を意とせざりし一事は、侯及び幕僚の深く推重する所にして、轉た伯のために期圖する所の多きや察するに足る、露骨にいへば、小村伯が桂内閣の最も大なる立者なるが如く、其の外交に最も意を致す所なるべし。

財政の攝理、殊に軍事費を削減（繰延又は其の他の名稱を用ゆるにせよ）するとも、亦桂内閣の最大抱負なるべし、世或は寺内子齋藤男の留任を以て、陸海軍費の据置かるべき反證と爲すものあり、吾人を以て視れば、侯は寧ろ軍事費を削減するに於て、多く子と男とを煩はすがため、殊に留任を強ひしのみ、寺内子曾て西園寺侯の内閣に於て、軍費繰延の餘地なしといへり、然れども桂侯よりいへば、無き袖は如何にしても振る可らず、軍費を節するに非ずんば一國の經濟立たずといはゞ、子の如き之をしも拒むが如き武邊一遍の人には非ず、況んや子は桂侯と提携して、他日山縣公桂侯の後繼たらんと欲する

アンビションを有するをや、井上侯を透して來れる實業家の要望に由て、桂侯が俄かに自から大藏大臣を兼ぬるに至りしは、其の威望と寺内子の力とを合せて軍費に大削減を加へ、且つ財政の鹽梅を巧みにして以て大に民望に適はんと欲するのみ、

侯曾て客に語て曰く『日本公債の海外に於ける價格は、兎にも角にも戰に勝つて而して平和の時季たる今日に在て、却つて戰時中より低きは不自然の極也、之を自然の趨勢に反らしめんには、列國をして日本の平和主義に信倚せしめて以て其の信用を恢復せざる可らず、是れ單に外交上の施設のみに由らず、又財政上にも根本的攝理を加へて、以て列國を安んぜしめざる可らず』日本の信用を回復する、是れ侯の最大目的にして、而して小村伯と將さに大に努めんと欲する點ならざらんや。

侯また『閣僚の撰拔に人氣を取るが如きは政事家の欲せざる所也、政治は國家の實務、最も眞面目ならざる可らずして、素より興行物ならざれば也、然れども後進を拔擢して新人を用ひ、其の材能を發揮せしむるは、政治の進歩を期するに於て等閑に附すべからず』といへり、其の參謀長と謚りて、殊に後藤男を用ゐたるは乃ち其の事を行へるならん、男また一個の材物にして、國有鐵道の善後の如き、其の果敢勇斷に俟つものあらんとす。

桂内閣が主力を盡す所の外交と財政とに在るは、吾人小村伯の召還と桂侯の兼任とに於て之を推測す、世また多く然かいふ、之を妨ぐるもの閣臣の中素より之あらず、元老素より之あらず、民間素より之あらず、強ひて之を求めば政友會のみ、蓋し彼等は桂侯をして名を成さしむるを欲せざれば也、西園寺内

閣の名譽のために、桂侯をしてより以上を成さしむるを欲せざればなり、今の黨情實に斯の如し。

（七）

吾人は敍して玆に至つて、私かに自から冗言漫語の甚だしきに驚かざる能はず。思ふに此の内閣更迭によつて、西園寺侯と桂侯の比較論の如き、政界の分野をトするが如き、重要にして趣味ある問題少からず、但だ冗說漫說して、已に餘白を剩さゞるが故に將さに燈火親むべき好機に入りて、徐ろに江湖諸賢と共に之を語らんと欲す、其の間事實の推移を注視する亦甚だ興あり。



時論二則

福本日南

（一）

能く言ひて鬼權を護する者は鬼權の徒也

鬼權斬られて、天下に喧傳せられ、人々好氣味といはざる莫し。其の好氣味といふものは、奴が平生の强慾、貪殘、酷海、暴戾を惡めばなり。我之を見聞して、人々の天良は國の四海に亘り、尙滿地に敷かれたるを歎べり。其天良たる未だ結晶して社會に登極せずと雖も人々の腦裏に在りては、嚴然主公の地位を占めつゝあるを喜べり。何物の學究ぞ、谷本博士といふ者あり。何れの邊の馬骨なる歟。獨り異說を立てゝいふ「海內の新聞が皆筆を揃へ、鬼權の兇變を天罰の如く觀察し、口々に快哉を絕叫しつゝあるは、間違も大間違、不當の最も甚しきものなり。人々の筆に口に痛斥熱罵すべき標的は、尸位素餐の徒なるのみ。鬼權は高利貸なるも、社會の半面に對しては、慥かに融通を利かせ來りたる功績あり。尸位素餐の徒に至りては、毫も人と世とに裨益する所なく、徒らに人の生血を吸りて、生活を爲す者のみ。是れ眞に排斥す可し。之を要するに、彼が兇變に對し快哉を叫ぶ者は、貧乏人の仲間なり。氣品ある紳士の口にす可き所に非ず」と。言ひ來りて得意滿面、天下の紳士は吾曹の事といはぬばかりなり。此奴抑々鬼權の徒歟。

彼が謂ふ所の尸位素餐の徒とは、縉紳、貴族、元老、大臣等にして、徒らに榮位に居り、顯職に坐し、高俸

を受け、威福を專らにして、而も毫も人と世とに裨益する所なき者を指す歟。是れだけは人を以て其言を棄てじ。其の權を辯護して『高利貸なるも社會の半面に對しては、慥かに融通を利かせ來りたる功績あり』といふに至り、彼の紳士となりの如何を想ふ可し。抑々社會の金融を利かすが爲に、資本家の必要は一般にこれあり。社會の半面に對して、銀行等の大資本家を要するが如く、他の半面に對しても亦所謂金貸類の小資本家を要するも、亦論を待たず。扨其資本が大資本に廉にして、小資本に不廉に安全の投資に安くして、不確保の投資に昂きも、亦經濟原則の司配する所なれば、異とするに足らざるも、畢竟是れ程度の問題なり。例へば銀行の利子が七乃至八パーセントなるに際し、金貸のそれが十乃至十一二パーセントならば、其金貸は一個正經の業たるを失はず。彼等は『社會の半面に對し慥かに融通を利かせ來りたる功績あり』と認むるを得ん。如今鬼權の徒は之に異なり。彼等は幾十パーセントより一倍以上を剝ぎ取らざれば則ち已まず。是れ果して人類として同一社會に生活する人間の擧たるを得る歟。

此頃も在京一武辨の高利貸に破られて歸り來れる者あり。其人壹千圓を某アイスに借りたるに、毎月壹割貳分の高利を制せられ、一年に壹千四百四拾圓の利子を拂ひて、元金壹千圓は依然たれば、終に自ら支持する能はず、可惜有爲の一干城を泥塗に委するの外なきに至れり。顧ふに今の日本社會に僅々壹千圓の資本を投じ、垂壹千五百圓の暴利を收め得べきの事業、他に果して何物かあるや。即ち此暴利其物は、他人終歳汗額の勞力、若くは家世傳來の財產の生々しき略奪を現示せる物には非ずや。是れ亦慥に『人をも世をも裨益する所なくして、人の生血を啜りて生活を爲す者』なるなり。博士は知らざる歟。或は知れるも、殊更に知らぬ顏の半兵衛を學べる歟。國家は夙に此害毒を認め、利息制限法を設けて、其暴利を抑制せんことを試めり。然も權の徒は是等の法律に檢束せらるゝ者に非ず。彼等は所謂テン利を先占し、手數を豫奪し、而る後ち

證書面には法定の利息を明記せしむるが故に、法律は空文の徒法となりて、鬼畜の輩を如何ともする能はず。斯くの如くして社會は依然畏る可き是等惡魔の爪牙に懸けられつゝあり。斯かる慘澹たる社會に於て惡魔の一匹が何者かに斬り附けらる。快と呼ばざらんと欲するも得んや。

顧ふに絶大の權力を有する國家すら、制法の乘を約する能はざる場合には、クーデタを用ゆ。然れば制裁力の微弱なる社會に在りては、時に箇中の一員が飛出して權輩に向ひ、クー・ド・ソシエテーを加ふるも、亦一方便ならざらんや。生恉權を傷けたる者は、夜盗の類なりしが故に、之に同情を寄せ難きのみ。然れども獸を以て獸を制せしめ、亦從ひて其獸を制し、二獸を制して千萬人畏るれば、是れ亦一種制裁上の經濟ならずとせず。

昔は孟軻子我利主義及汎愛主義と奮鬪し「能く言ひて楊墨を距ぐ者は、聖人の徒なり」といひき。今は『能く言ひて鬼權を護する者あり』。是れ必らず『鬼權の徒なり』。其人は恐らく高利貸を內職ぐらゐにする徒輩ならん。斯る徒輩を引捕へ劒ピカまでは餘り酷なれど、其頭上の腦天に向ひ、拳骨の霰のクー・ド・ソシエテーぐらゐは、吾人大目に看過す可きのみ。

(二)

後藤男の露西亞土産

今日の遞信大臣昨日の滿鐵總裁後藤男が過般滿鐵總裁としての露國行は、西伯利鐵道視察の外に、何等かの要務を帶び往きたる事は、知る者の夙に知れる所なるが、彼は此旅行より如何なる土産を齎らしけん歟。彼が露京滯在中、アンデパンダンス・ベルジュの通信員との會話を聞けば、一分の消息の端倪せらるゝもの無きに非ず。彼は通信員の問に對し、其行が專ら鐵道及製鐵工場の視察に在る旨を答へたるも、別に更に附言して曰く。『日露兩國の接近は、是れ余が多年の希望にして、今回の此行に於ても、亦此希望を齎せ來れり。日露の間に鞏固にして且つ親善なる關係を實現せん

乎、是れ啻だ兩國の利益のみならず、併せて世界の利益なればなり。と。彼は又曰く『余は外務大臣イズボルスキー君と會見し、兩國將來の關係に對し、余の希望と君の保證との一致したる點に於て、無上の滿足を贏ち得たり。イズボルスキー君は地位が地位なれば、其談話は固より外交家の立場以外に出づるを許さず、隨ひて多く其寡言主義（ミュチズム）を破るを得ざりしも、余は彼我の肝膽相照らしたるを深く信じて疑はず』と。願ふに彼は半官的旅行の政客なれば、設ひ然らざるも然か公言せざるを得ざりしや、論を待たず。故に此言あるを以て、直ちに彼の旅行の多大の効果を想像せんは、固より早計たるを免かれざるも、彼が往遊を嘉して、皇帝より引見せられ、又其廷の大藏、外務、商務、工務、遞信の諸大臣より盛宴を張りて招待せられたるに觀れば、此行の必ずしも無意義ならざりしを察するに足れり。彼が今回の新內閣に遞信の一椅子を分與せられたるも、安んぞ露西亞土產の利きたるに由らざるを知らんや。

吾人は將に要めんと欲せんとす。後藤男が齎來したりが。それ其處なり。其鹽を脫す可からず。由來日本傳來の外交は餘りに外交的外交なり。如何なる敵國にも、其國の君相と相對すれば、老妓の嫖客を弄するが如く、有らん限りの愛嬌と世辭とを振り掛け、決して衷心の眞意を示さず。勿論是れ亦外交の一術、強ち一切を否定するには非ず。日露戰前の場合の如きは、慥かに是に由りて成功したりしを知れど、過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとしとかや。餘り慣用に過ぎたる結果は『巧言令色鮮し仁。否な鮮し誠。日本政府はデリエール・パンセー即ち後ろ思按を挾有せり。油斷す可からず』といふもの歐洲一般の輿論となれり。彼日露の際會の如き、戰後喜ぶ可き協約の成立せしにも關はらず、東京及彼得堡の間に一路の春風未だ渡らざるの憾あるを免かれざるは、彼未だ我の眞心を測りかねたるを以ての故のみ。故に此時に際しては、思ひ切て眞率（ナイヴァー）に我至誠を示すに在り。此至誠を他が心腹中に置くに在り。八隅知し（やすみし）我大君（おほきみ）の大御心は列強と倶に世界の平和を樂ま

せらるゝの外なきを、他の君相の眞骨頭に刻印するに在り。是にして徹底せん乎、是にして信孚せん乎、凡百の外交問題は萬機の内政問題と、順風に布帆を張るが如く、坦路に驪車を馳するが如く、只意の欲するまゝならんのみ。桂侯も之を知らざるに非ざる可し。小村伯も之を思はざるに非ざる可し。知れる者思へる者に之を勸懇するは、知らざる者思はざる者に進説するよりも、勞半ばにして、功は倍蓰せん」ネー後藤男！君が家由來得意の大風呂敷を敝すと聞く。其包を新内閣上に開き、是も露西亞土産なり、是も露西亞土産なりと、把りて諸僚に示しなば、新内閣上の新裝飾、是に出りて燦然たらん。其れ即ち内外に耀かば、上は君王笑を帶びて之を覽はし、下は、五千萬喜を湛へて之を仰がなん。啖くは言はぬ。豪傑ならば遣つて見給へ。

清國に對する日本國民の覺悟

青柳篤恒

世人咸謂ふ日清兩國は同文同種なりと、事古びぬ、言餘りに平凡なり、言はずもがな、惟だ夫れ日清兩國は密接なる利害關係を有す、彼の世の所謂清國の興敗は直ちに日本の存亡に關すなどの說は餘りに日本自身を卑下したる妄論にして固より取るに足らずといへども、清國の治亂が少なくも日本國の發展に多大の影響を及ぼすべきは事實なり、日清兩國の利害は此意味に於て重大なる關係を有す、日本が清國の爲めに計る、固より清國保全の爲め東洋平和の爲めなりといへども畢竟其の日本自身の爲めなること亦勿論なり。

清國の保全は日英同盟、日佛日露協約等の保障する所たり、而かも是れ外部の壓迫より支那を救濟し支持せんとするもの、若し夫れ清國自から釀成せる内部の

壞裂に至りては、日英佛露等列强の力を戮するも復た之を奈何ともするなかるべし、慈禧皇太后萬歲萬々歲、御惱重らせられ、御大漸の突差は實に畏くも當今光緒皇帝の聖壽に關し奉り御一代の危機、此れより後支那の天地は雲となる乎、雨となる乎、將た霰となる乎、神ならぬ身の逆じめ料り知るべからざるなり、清國の天地は暗憺たり、近時新舊思想の衝突最も甚だしく、一方には國民的覺醒日に月に進運に向て、他の一方には政府の壓制愈々峻嚴なるを加へて底止する所なく、兩者の衝突する所、何時如何なることが動機となりて全支那の大亂となり、鼎の沸くが如き大修羅場を東洋の天地に發現することなしとは斷言し難し。

吾人は敢て日本政府に對清政策なるものありや否やを問はんとする者なり、對清政策他なし、唯だ二あるのみ、曰く保全、曰く分割、而して保全可なる乎、分割不可なる乎は自づから別個の問題に屬す(日本の清國保全を以て國是となさゞるべからざるは勿論として)要は一國の對清政策が二者孰れとも一定不動の方針を有せざるに在り、要は一國の對清政策が二者孰れとか確固不易の方針を有するに在り、借問す日本政府の對清政策は保全乎、將た分割乎。

若し夫れ日本にして未雨に綢繆するを曉らず、清國天下分け目の大節に臨んで此時に處すべき一定不動の國是方針なく、躊躇逡巡、周章狼狽、清國の運命を擧げて西洋各國の處置に一任し指を咬へて唯だ列國の爲す所を觀望するに終らしめば、日本帝國は永遠に三島の裏に跼蹐し手も足も出でざる境遇に沈淪すべきは蓋し自然の數なりと謂はざるべからず、日本の一躍して世界の一等國に列せる所以のものは歐米の諸國が東亞に對し措置せんとする所は日本の同意を得るに非ざれば行はれ難きを意味す、吾人は之を以て主として支那問題に關して然るものなるを信ぜんと欲す、然らば則ち日本をして永く一等國の地位を持續するを得せしめん爲め、早く清國に對する國是方針を確定し置かざる可らざるの要亦自づから明なりとす。

日佛日露の協約は淸國の保全を目的とせり、而かも

二協約の成立一度清國に傳へらるゝや、清國は案外にも電氣に打たれたらんが如く朝野震駭せり、北京政府は二協約表面の明文以外に何等かの密約あらざるかを疑へり、清國國民は清國保全の四字を以て日本を中心とせる列強間の平和的支那分割を意味すと解釋して曰く

列國保全を約すれば則ち保全、分割を約すれば則ち分割、清國の獨立安くにか在る、今日の能く清國保全を說く者、焉くんぞ能く明日清國不保全を說かざるなきを得んや

と、時適々韓國保護條約の成立、韓國皇帝の讓位あり、清國國民は筆を新たにして、再び二協約を評論して曰く

由來保全宣言の頼むべからざる概ね此の如し、殷鑒遠からず朝鮮に在り、日本は韓國の保全を宣言せし嘗て幾回ぞ、而して今何の狀ぞ

と、又適々西園寺首相尻ッ端折りにての滿洲微行視察あり、寺内陸相の同じく滿洲視察あり、清國は愈々猜疑の眼を張れり、殊に林外相の韓國保護條約成立後、韓國を引證して清國を豫戒するが如き口吻を漏らせる粗忽の失言あり、清國は日本が清國を以て第二の韓國たらしめんとするものならざるかを疑ひ恐懼を極めたり、後英露協商、英佛協約成るに及んでや、清國は之を以て亦日本其備を作れるものなりと評論せり、吾人は玆に特筆言明す、日本の官民は東洋の平和上、又自國の自衛上、衷心清國の保全を以て心となし、決して他の權略あるなきを、而かも清國官民をして意外なる鬼胎を懷かしむ、是れ一ぱら清國が外國の抑壓迫害を被むる年已に久しく、繼つ子根性漸く固く、猜疑心は殆んど國民第二の天性となり、動もすれば同情ある人々の好誼をさへ色眼鏡を以て之を見るに至れるの責にのみ歸して已むべきものなりや否や、深く察せざるべからざるなり。

日本の官民は何故に歐米の事情にのみ熱心にして、而して此くの如く支那の研究に冷淡なるや、五千萬の同胞支那の眞相、支那民族の神髓を解せるもの幾人か

ある、日本一般の國民は當代の支那を解せざるなり、日清戰爭當時の老支那と光緒三十三四年今日の新支那とは雲泥の相違あり、清國は既に呉下の舊阿蒙にあらず、清國國民の智識は覺醒せり、清國國民の勢力は確立せり、清國の現政府は既に今日に於て國民の意思を度外しては何等の政治をも施設し能はざるに至れり、清國國民の實力は既に今日に於て間接に政府を監督し牽制するに就て稍有效なるに至れり、辰丸事件に於て日本政府が自由行動云云の警告がましき威どし文句を併べて而かも清國動せず、日本の「押し」の利かなくなりしも理なり、威嚇して「押し」の利かぬ程見ともなきはなし、弱い者苛じめはすまじしきものなり。

日本の官民は何故に歐米諸國をのみ餘りに畏敬尊崇し、而して此くの如く内心餘りに清國を輕蔑するに過ぐるや、凡そ人を輕侮するの念慮は其恐威を惹起するのみに止まらず、總て其人に對する方策を劃するに於て用意の周到を缺き蹉跌せざる者幾んど稀なり、侮る者は敗る、不測の大失策實に玆に宿る、間島問題案件の如き亦油斷と粗漏と輕侮とに胚胎し來れる失策にはあらざるなき乎、清國に對する國際的禮讓尊敬、清國人に對する清淨無垢の同情、是れぞ比隣の友邦に對する吾人當然の義務にして、而して又清國に對する大小事業成功の關鍵なりと知れ、サー、ロバート、ハートは清國に成功せる秘訣の一として

余は五十年餘の久しき未だ嘗て一日も衷心清國の國家及國民を輕蔑したることなし

てふ千古の教訓を吾人に垂れたり、鑑む可し。

日本現代の政治は腐敗せり、政黨は壞頽せり、古人曰く敵國外患なければ國必ず滅ぶと、吾人謂へらく、外國に對し全國民の智力を傾注するに足る可き程の國家の大問題なくんば政治や政黨や必らず廢ると、對清政策の樹立確定は日本帝國の發達自衛上造次顛沛も緩ふすべからざる當今の急務にして當代の政治界に於ける好個の緊要問題なり、日本のあらゆる政治家や政論の士や宜しく此支那問題を提げて中心の問題となし全國民を率ひて之れが解決に勗めなば、庶幾くは大事に

臨んで惑はず、危機に瀕して措置其宜しきを失はず、日本をして永く一等國として東亞の事必らず其同意を經るに非ずんば行ひ難からしむるを得べく、而かも適々以て腐敗沈淪せる現代の政治を刷新し政黨を廓清振興することを得ん。

而かも翻つて惟ふに凡そ立憲治下に於ける百般の政治は國民の力之れを導かざる可からず、政府の對清外交や政黨の對清政綱や、亦吾人國民之れが後援者たり指導者たらざるべからざらず、日本は既に東亞に於ける文明の先進國として清國を誘導し扶掖せざるべからずとせば、日本は先づ清國を解釋し其國情民俗の眞髓を洞悉するの要自づから有り、教ゆる者は先づ學ばざる可からず、日本一般の國民は清國に關する智識を修得し、對清問題に就て政府の監督者たり指導者たるべき立憲的國民の資格を具備するを急要とす、是れ清國に對する帝國國民根本の覺悟となすべき所なり。

（四十一年七月十四日稿）

歐洲 彫刻の音樂化

青柳有美

物極まれば、必ず其本に歸る。文明の極致は、遂に野蠻趣味の復興となれり。前世紀に於て最も世間に迎へられたるもの、一として野蠻趣味の發現に外ならざるは無し。ショウペンハウエルの哲學然り、カーライルのシンセリチー稱道又然り。ニーツェが道徳宗教を痛罵して喝采せられたるも、其所論の頗る世界に勃興せる野蠻趣味に投合したるものあればなり。近時無謀極端この上なき社會主義なるものゝ、世の耳目を聳動するに至り、かの陽に正義人道を標榜して其實我利我利亡者の代表者たるローゼベルドが世界の巨人を以て目せらるゝ如きも、是れ明に世界に於ける野蠻趣味の普及を證するものに非ずや。日露戰爭に於ける日本の勝利は、誠に是れ野蠻趣味の放てる凱歌の聲なりといふを得べし。

然り而して、最も能く一代の趣味を代表するものは其時代が産出するところの美術作物なりとす。蓋し、趣味の、形となりて現れたるもの、是れ即ち美術なればなり。誰か鎌倉時代の彫刻を觀て、其時代に於ける趣味の、那邊にありしかを察知する能はずといふものぞ。平安朝は、ハイカラ趣味の最も横溢せる時代なり。是に於てか、定朝の如き殆んど觀るものをして嘔吐せしめずんば止まざる程、頗る非常に氣取りたるハイカラ臭氣紛々の作物を遺す者あり。此くの如くにして、前世紀に瀰漫せる野蠻趣味は遂に其代表美術として、音樂を出すに至れり。人、若し具に美術各科の基原を尋ね、音樂が繪畫無く彫刻無き以前に於て、早く先づ原人の間に發生したるべきに想ひ到り、野蠻人の有する美術の第一は、是れ這の音樂なるに氣附かば、前世紀の野蠻趣味が、其美術を音樂によりて代表せしめしことの、決して偶然のものたらざるを知らむ。故に以爲らく、前世紀に於ける野蠻趣味の發現は、音樂に於て具體せられたりと。而して、其代表音樂は實に獨逸のワグネル樂なりし

批評家の説に據れば、ニイツエはワグネル樂の感化を受くること頗る大なるものありしと。又森鷗外の説くところに徵すれば、前世紀末に於ける人種進化論なるものも、ワグネル樂によりて影響せられたるところ少からざりしが如し。哲學既に然り、進化論既に然り、况んや其姉妹美術たる繪畫彫刻等の、第拾九世紀に入りて、音樂、殊に、ワグネル樂の感化影響を蒙らざるの理あらんや。昔者、雪舟の將に筆を取りて書かんとするや、必ず先づ尺八を一吹し、神興の來るを待ちて後書箋に向ひたりと。音樂と繪畫との關渉するところ誠に夫れ此くの如く、雪舟の筆が神韻漂渺の趣ありしも音樂の賜なりしが如し。されば、第十九世紀の歐洲が、ワグネル音樂を以て其代表美術たらしむるに及ぶや、最も早くワグネル樂化せられたるものも亦素より繪畫なり。前世紀末の歐洲畫が漸く寫實と從來のコンヴエンシヨナリズムとより遠かりて、大膽なる手法と神韻の漂逸朦朧なるとを尊ぶに至れるは、是れ全く音

樂の影響を受けたるものに非ずして何ぞ。換言すれば第十九世紀末の歐洲畫は、頗る代表美術たるワグネル樂に接近せるものなりしなり。而して、其結果は、今やシャヷアンネの作物に於て明に觀らるゝ如く、古希臘より更に古埃及の畫風に復古せんとするにあるが如し。依て、歐洲の彫刻も又遂に此の音樂の感化より脫する能はず、現下歐洲彫刻界の傾向は、專ら音樂に接近せんとし其結果は又繪畫と同く古埃及式の復古にあるが如し。

近頃、友人荻原守衛君、歐洲式彫刻の技術を巴里に研究し、のち希臘埃及の古彫刻を見學するところありて歸朝す。相見るや問ふに歐洲の彫刻が、目下、埃及式に傾かんとしつゝあるに非るやを以てせしに、實に其然るものあるを答へたり。爾後荻原君はロダンを說くと共に、埃及古彫刻の秀逸仰ぐべきものあるを賞讃して措かず、切りに之を鼓吹す。予は未だロダンの作物に就て多くを知らずと雖ども、歐洲の彫刻が古埃及式に復古せんとする傾向あるを感知せしは、實に一昨明治三十九年の夏にあり。當時、米國雜誌『マンセー』紙上、波蘭の彫刻家にして其頃歐洲の斯界に嘖々の盛名を傳え、異常の天才を以て目せられつゝありといふボレスラス、ビーガスの作物を寫眞せるものを觀しがその極端なるシムボリズムに走り、寫實を離れて主觀に重きを置き、氏の傑作『生存競爭』の如き『死神の愛』の如き『世界』の如き、『夜』の如き或は『ショッパンの像』の如き、非凡の想像力を有する觀照家に非ずんば容易に其好趣を玩味する能はず、宛然ワグネル樂を耳にせると、其感を同ふするものあるべきも、予は其頗る古代埃及の彫刻に彷彿たるものあるを覺えたり。又同く一昨年夏頃英國刊行の『マガヂン、オブ、アーツ』に其寫眞を插入せる新進の彫刻家墺太利人ビー、カフカの作物の如きも、殆んどボレスラス、ビーガスの作物と、其意匠に於て將た傾向に於て、殆んど相等しきものありて、能く從來のコンヴェンションたる寫實の拘束を脫し、想像の肆に驅けるところに隨て大膽なる手法を揮ひ、中にありて最も寫實を無視せざりし如く

に觀ぜらるゝ二三の肖像すら、茫漠朦朧の趣を充滿せり。又、獨逸サクソニー王國ドレスデン彫刻博物館に一昨年春頃より陳列せられたるアウグスト、フドレル作の『鶩鳥持の女』、及び、エンツエッゼ作の『赤子』の如きも、今や歐洲彫刻界に評判高き作物なるが、其寫眞版に印行せられたるものを觀るに、何れもシムボリズムの趣を帶び、古代埃及彫刻の風味あり。なほ一昨年三月開會の巴里サロン展覽會にキンスプルゲル氏の出品受賞せる『沈思』の如き、亦然り。予は是等の事實より綜合し、一昨年夏以來、歐洲彫刻界昨今の風潮を稱し附するに『埃及式シムボリズム』の名を以てしつゝありしが、最近に於ける荻原君の歸朝により、予が萬里の異國に在り、未だ實作物を目にせずして成せる臆斷の必ずしも正鵠を過まれるものに非るを知り、私に之を快とす。されど、同君の説に據れば、歐洲の彫刻家自身の中にありても、今に於て早く既に此る風潮あるを看取し了れるものは、頗る少數にして、僅に同君及其同志に過ぎずと。然りと雖ども、學者若し試にピーガス或はカフカの作物を取りて、之を古代埃及のスウキンクス石像其他に比較觀過せば、必ずや思半に過ぐるものあらむ。殊に况んや、カフカが今日の盛名を得る以前に當り、多年大英博物館に出入して、古代埃及の彫刻に就き、熱心研究するところありしは、明白の事實なるに於てをや。

元來、歐洲の繪畫が、專ら寫實に流れ精緻を旨として、日本畫と全然その趣を異にするに反し、その彫刻は從來より朦朧の傾を帶び。餘韻の味ふべきものあること、却て日本彫刻に勝り、日本彫刻は繪畫と正反對にて、僅に左甚五郎及奈良人形等を除くの外、却て劣惡なる寫實に流るゝ傾ありしが、今や歐洲彫刻の傾向が、從來よりも更に極端なるシムボリズムに走り、朦朧の極端に達せんとし、遂に古埃及式の風趣に復古したるものなるも、是れを以て單に古代埃及彫刻の感化に依るものなりとのみ目すべからず。實は、前世紀の代表美術にして、第十九世紀の一大勢力たりし音樂、殊にワグネル樂の影響を受け、之に接近したるの結果

なり。詳く言へば、歐洲昨今の彫刻は、第十九世紀下半期に横溢せる野蠻趣味に影響せられ、甚しく音樂化せられつゝあるに外ならず。英國聖アンドルウ大學教授ナイト曰く。希臘の美術は彫刻により羅馬の美術は建築により中世紀の美術は繪畫によりて代表せられたるも、第十九世紀の有せる代表美術は實に獨逸音樂なり。」』と。宜なる哉言や。

傳記に據れば、ボレスラス、ピーガスは、唯に其父が音樂を以て業とせし者たるのみならず、自ら亦幼少の時に於て能く父を補け演奏者の一人となり、生活の資を得たる程なりしと。又、氏が傑作中に『ショッパンの像』あるが如き、以て如何に音樂が氏の作物に影響するところ多かりしやを窺ふに足るべし。疑ふ者は請ふ氏が傑作の一を取りて、假令へばワグネルの作曲中に於て怪異朦朧の隨一を以て目せらるゝ『ニベルンゲン、リングス、リード』の如きに對比せよ。必ずや兩者が彷彿の間に類似するものあるを發見すべし。故に以爲らく、歐洲の彫刻は、今や大に音樂殊にワグネル樂の感化を受けつゝあるものなりと。偉なる哉ワグネル。盛なる哉ワグネリヤナ。

内閣更迭所感

靜観居主人

今度の政變について私の直覺的に感じた事は、政權といふものは欲しくて／＼堪らないものに、終には落ちるといふ事である。欲しくて／＼堪らなければ、どういふ事をしてゞも自分の欲望を遂げやうとする。いゝ事は無論する。其いゝ事はお上に向ての申譯にも無論するし、又下、人民に對しての言開きにも無論する。同時に又少々無理な事、自分で濟まないと思ふ事も遣り兼ねない。自分の手て濟まなければ人の手を借りてゞもやる。此奴は間違ない觀察であらうと思ふ。若し大間違ひに間違て政權を欲しいと思はない人に政權が落ちる事も古來あつたとすれば、それは欲しくて／＼

堪らない人が、みんなしくじつて上も下も收まらぬ場合に限ることて、然らざる以上は、政權の得喪は政權を渇する熱度の厚薄によつて決するものと思ふ。

然し若し西園寺内閣に失政がなかつたならば、どんなに政權に渇望するものがあつても、之に乘ずる隙もなかつたらうが、つひに之を明渡すやうになつたのは、矢張り乘ぜらるゝ丈けの失政があつたものと見るの外はない。其失政の主なるものはといふと、いふまでもなく財政經濟。それは松田がわるいとか原がわるいとかいふ事もあらうが、主として西園寺其人の頭の中て財政經濟はどうでもよいと見て、しつかりした意見がないのによる事である。假令意見があつた所で、經濟財政の理屈に根據した確固たる意見ではなくして、他の方面の注文から出て來たものゝやうに見える。つまる所、積極的方針といふやうなものから割り出したものである。積極的方針といふやうな事は先生も無論好きであるし、又さうでなくてはならぬと思うて居るに違ひない。それは誰れにした所て、日本の國運が進んて行くのを、引伸ばす事が出來なくても、之に伴うて行かふと思ふのは當り前である。然しあんまり積極になれば後に消極をとらざるべからざるやうになる。今日の場合消極論はどうしても人望のあるものではない。

然し積極論がしくじれば消極論が頭を持ち上げるやうになる。西園寺の積極論が行き過ぎたといふよりも寧ろ檢束がなかつたので、消極論が跋扈するやうになつた。消極論が跋扈するにあらずして積極論が行き詰つて事實上行はれなくなつたのである。これは確かに西園寺の失策に違ひない。外交上の事も小さな失敗を數へ立てたら隨分あるかも知れん、けれども大小輕重を比較すれば寧ろ財政經濟の方の失敗は多い。然し世間て一般に成効と目して居る日露、日佛兩協約共に私は成効とは見ない。今日支那に具合の惡くなつた其大本は此兩協約にある。さればといつてあの場合此協約を結ばずに濟ます譯には行かなかつたらう、寄り處なくやつたものと私は信ずる。又支那に對しての外交がわるいので頻りに清國人から攻擊されるといふ向きも

あるが、其本は當局者の遣り口よりも滿洲の占領中軍政に對する不平の塊りが殘つて、其れが何時も邪魔をして、反抗心を高めるのである。今少しエライ外務大臣が居たら其不平の塊りを打消すことが出來たかも知れぬ。それを打消し得なかつたのは無能であるといへば無能に違ひない。けれども今實際に總てを見廻して總てを比較した所で、日本ばかり支那に失敗したとはいはれない。他の列國も皆さうである。日本も其一つで、殊に日本は最も支那に近いから或時代には日本に對する問題が一番多い事があつたかも知れん。けれども今は大變に問題が少けなくなつて居る。何か外に重大なる外交上の失策があつたかも知れぬが私は知らない。知つて居る範圍內では財政經濟に比して失策が少ないやうに思ふ。

西園寺內閣で評判のよいのは松田の司法であつた。多年問題になつて居た新刑法も通過した。若し其上司法官の增給問題でも行はれたら松田は大いに法曹社會から謳はれたであらう。

原の內務も私は先づあんなものだらうと思ふ。原、松田は總ての桂一派からの攻擊の燒點となつた。總てが黨派本位であるといはれた、無論二人の考の中には衆議院に絕對の過半數を得る爲めに自分等の勢力を增さうとしたのは間違なからう。けれども其爲めに先生等のやつた仕事はどの位あるか。假りに想像して星亨が今日まで存命して內閣の一員となつて內務をやつたとすればどうであらう。原のやり方などはよほどねるいものであらうと思ふ。星ならば爭ももそつと激しかつたらうし。又西園寺內閣ももそつと早くこはれたかも知れぬ。

鐵道國有はどうしても成効と認めることが出來ない。一體鐵道國有の是非を論辯する根據はいくらもあらうが、單に經濟上から見るならば確かに失敗といふの外はない。經濟上から見た鐵道は、成るべくよい鐵道を成るべく長く蜘蛛の巢のやうに敷いて運輸交通の便をよくするといふのが理想である。此れを基礎にして鐵道論をなし、さうして今日の官有鐵道を見れば、

一々反對である　皆よろしくない。元來鐵道國有は桂の考案であつて、桂案を西園寺が踏襲したのだといふが、桂案の方はもう少し利巧に出來て居たかも知れぬ。六大線とか何とかいつてよい線ばかりを買ふのであつたかも知れぬ。それは大いに利益になつたらう。兎に角この鐵道國有といふ事も内閣を倒れしめる一の原因になつたに違ひない。或は西園寺もさう澤山の鐵道を買ふ積りでなかつたかも知れぬが、みんなが賣りたがつたので、つひ買ひ込まねばならぬやうになつたのかも知れない。

西園寺内閣は陸海軍を少しく擴張した。所謂帶には短し、襷にや長しで、餘り役にも立たぬ擴張で、而かもあれが爲めに列國からどの位猜疑を受けたか知れぬ。軍事上の本當の眼のある奴が見たならばあの位の事は怖くも何ともないと見るかも知れぬが、普通の人間から見るとなかなかさうでない。輿論は一體愚論なもので、亞米利加の騷いだ事なども、いくらか軍備擴張と關係があるかも知れぬ。けれども此事はマア失政として論ずべき程の事ではなからう。

西園寺内閣の成功と目すべきものありとすれば、それは政黨内閣らしい内閣を作り得た事にあるだらう。其點に於ける西園寺の成功は伊藤以上である。伊藤の政黨内閣は直ぐいけなかつたが西園寺のはさうでなかつた。若し細かく觀たらば、其點に就て西園寺がいくら骨を折つたから分るだらうが、今は別にいはぬ。

それから今度の桂内閣はどうかといふに私は餘程危い内閣と見る。込み入つたゴタゴタした内閣と思ふ。桂は政綱として財政の整理を標榜して居る。財政經濟の方にかけては桂の方は西園寺よりいゝてせう。アウトライン丈けは時の需要に合ふに違ひない。けれどもどつちかといへばマア餘りどつとしない事だ、といふのはつまる所消極作用をせねばならぬからだ。つめるといふ事はどつちに向いても餘りよい事はない。此冬の議會迄には大抵整理案も立て、悉く滿足させる事が出來ないにしても、又みんなに不平を起させぬ位の事は出來るだらう。今日財政の事に口を容れるものが二

人ある。井上、松方の二人である。今迄は三人あつた。桂も其一人であつた。西園寺は自己の財政上の定見がなくて、みんなの意見を聴いて之れをゴチャにしてやつたものだ。處が桂は自己の案があるから、松方、井上に自己の說を容れさせ、又松方、井上のゝも參考にして消化して自己のものとする力量があるだらう。一體整理案といふものが一向に六つかしいものでない。戰時稅を其儘にして、其上に增稅をして居る。桂でなくても譯なく出來る事だ。今度の議會迄には何とか步けるやうな方針が立つだらう。が、そいつは平凡な事だ　何でもない事だ。其上にもそつとエライ、よい事をせなくては桂內閣の出來上つた甲斐がない。處が今日は桂も其先きはまだ考へてないやうだ。

桂の危い處は無論對政黨の關係である。どうも衆議院に對して手足が弱い。政治界に於ける一番の見物は、桂が今度政黨をどうするかといふ事である。マア大同派の方には大臣にならうといふものもなからうが進步黨の方には二三ある。其れを一人も入れる事をしない。尤もそいつをやれば治まらぬかも知れぬ。大同派からも文句をいふものが出て來るだらう。此やりにくい處が桂の危險な處だ。然し其呼吸は大抵桂の知て居る處である。桂は元、議員買ひをやつて、政友會などは大事に買て、自己の藥籠中のものにした。西園寺に政權を讓つたといふのも其處いらから出來た事であらう。處が今度はあゝいふ事になつて一寸兩方立合つた形であるから今迄通りの事はいはれまい。今迄は親類附合であつたのが、今度は同じ親類にした處で、中ちがひの親類になつた。然し據り處がなければ又金を出して買ふ事にして、進步黨政友會の一部、中立派等を味方にせうが、然しこれは桂自身は出來得る事なら、したくないと思うて居るに違ひない。之をしないで遣て行かうとして居るに違ひない。然ししないで行けるか行けないかゞ問題である。解散風を吹かして行くか行かないかゞ疑問である。然し今年の議會丈けは大丈夫だ政友會も成るべく反對に立たないで行きたいのだ。政友會にも利かぬ氣の、怨骨髓に徹したやうなのも四五

人はあるだらうが、ヒロヨ〱の陳笠連は成るべく政府にくつゝいて行きたいのだ。四五人の利かぬ氣の奴はどういふ事をするかも知れないが、陳笠の方が大多數だからマア大丈夫だと見た方が適當であらう。今度の政變について思ひついた儘に順序もなく話して見たのである。（完）

次號論文豫告

次號の本欄には、竹越與三郎、藤岡作太郎、副島義一、藤井健治郎、芳賀矢一の諸氏に依賴したり、



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と緊密の關係ある濠米獨等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

職工の見たる米國人（下）

東京府立工藝學校長　今景彦

彼米國人は勇み肌である

彼れ米人は勞働主義て、活動主義て、腕自慢て、日給取主義てあると同時に又勇み肌てある。弱きものを扶け、氣の毒なる人を救ふといふ氣前がある。此事は一度び米國に行て見ると、到る處に其光彩を放つて居ることを認める。電車の中や汽車の中などに於て婦人小兒に席を讓るが如きはいふまでもない事てあるが、

全く見ず知らずの外國人に對しても其旅情を慰むべき談話をし掛け、或は其附近の地理や、實業上の談話などをして旅人を喜ばせる。これは其一例に過ぎないのであるが、其他あらゆる場所に於てこういふやうな美はしき行爲を認める。私の遭遇した一二の實例についてお話をするならば、私がボストンに居つた時にリンチ、マニユーアル、スクールといふ學校を參觀に行つた、が第一回には恰度學校の休業日であつた爲めに全部を見ることが出來なかつた。其時に案内をして吳れた人は工場に於て働いて居た一人の職工らしい人てあつた。て其人の働いて居た工場丈けを見せて貰て歸て來たが、其後暫らくして私は再び其學校を見に行たが、第一回に案内をして吳れた人が、自分があの人を案内をしたいからと校長に申出てて、許可をとつて居たのである、私が先きに職工と思つて居た其人は生徒てあつた。自分が授業時間のあるに拘らず、豫て私に一回會つたといふ因みに、二回目にも其生徒が先導をして、學校を殘る隈なく見せて吳れた。此等の行爲は米國に於ては少しも不思議はないが、若し日本の學校の生徒に比ぶれば寧ろ意外に感ずるのである。日本の生徒は、學校に用事あり若くは參觀に來た人に對しては極めて冷淡の態度を取る。之れが教育上から見ても大いに考を要することと思ふ。今一つの例はウースターの工業學校を參觀に行た時に私は往く時は馬車に乘つたが歸りには電車にせうと思つて町の角々をよく注意して電車に乘る時の目標をつけて置いて馬車を歸した。それから約半日程學校を參觀して午後から學校の終りまで見て居た。處が歸らうとする時に外に出ると雪が俄かに降り出して一寸の間に二寸許りも積つてゐる。爲めに先きに注意して置いた道が雪の爲めに見覺えがなくなり、當惑をした。すると向ふから一人の生徒がやつて來たので、私は其生徒に自分の行くべき道、乘るべき電車等を問合せると、生徒は僕も其近くへ行く所ですから御一所しませうといふので電車に乘つた。然るに暫らくして乘換をすべき所に行て、二人とも下りて乘換車の來るのを待たが、約廿分許り立て居ても電車は來ない、而かも其日は非常に寒い日で、ずつとして立て居ることが出來ず、身體を動かして暖をとらなければならぬ程の寒い日だのに電車はなかなか來さうもない。私はいつそ馬車を雇ふかしらと思つたが、マア其中に電車が來つと來た。生徒は私に向てさアお乘りなさいといふから私が乘て、生徒も無論一所に乘るの

かと思つたら僕は之れで失敬しますといふて反對の電車に乘つた。私は其處で初めて氣がついて、扨は此生徒は私に乘換を間違はぬやうに敎へる爲めに態々反對の方へ來たのだといふ事が分つた。大變氣の毒に考へたので叮嚀に御禮をいひたいと思つたが、電車が出るので、極く簡單な禮しか述べる事が出來ずに別れた。かふいふ風に米國人の親切は日本人のそれとは親切振りが違つてゐる。どういふ風に違ふかといふに日本の學生なら、どこでどう乘換へるといふ位は敎へてやるだらうが、自分が態々反對の處まで來て、實際乘る處を見屆ける迄やるものは餘り多くあるまいと思ふ。此處が卽ち私の前にいつた通り、米人の自負する所は考ふるにあらずして爲すにあり、言ふにあらずして行ふにある所である。此親切といふ事も同樣に親切をするのてある。親切の結果があらはれるまで、物になるまで親切を盡くすのである。

で、斯樣な行爲をするものに對しては米人は之を立派なる人物として尊敬するのである。だからかゝる風習はますく〵社會一般に擴がる樣になると思ふ。汽車の中なんどに於て何か不自由な樣な風をして居る人があると、其人の側に行て話をしてやるなどいふ事は立派な行爲として他人も見て居る。汽車の中に於て他國人があれば、向ふから求めなくても、こちらから進んで話しかけてやるやうな事は往々ある。日本人などは電車に乘て支那人でも側らに居れば、支那人と友人であると思はれて笑はれうかと寧ろ心配して、却て遠ざかるやうな風をするのは甚だ遺憾と思ふ。實際是等は國と國との交際の上にも關係を及ぼすべきことであるから、今後の國民の大いに注意すべき點であらうと思ふ殊に敎育上の問題としては、親切を人にするといふ事は、只口で以て人に聞かせた許りではいけない。親切を行ふ事を修練しなければ、値打がないと思ふ。私は嘗て三田の通りを私の父と二人連れで散歩した事がある。其時向ふから一人の學生が來た。私等より少し先きには外國人の夫婦が步いて居る。處がどういふはづみであつたのか其學生が石に躓づいて下駄がポンと飛んだ。外國人は早速之を拾ふて學生に捧げた。然るに學生は傲然と下駄を履いて碌に禮もいはずに行つた。私は今此學生を批難するのではないが、外國人が之を拾うて、直ぐ其後ろに居る日本人たる吾々が拾はなかつたのを見ると、親切を行ふといふ事には修練を要するものといはなければならない。子供が倒れる。之れ

を起さうといふ考はよいには違ひないが躊躇せず猶豫せず、すばしこく之を起すといふ行爲が眞の値打であらうと思ふ。然らば教育上に於ても此實際に親切を行どいふ修練をなさしむることを要するだらうと信ずる。

一體勇み肌といふ事は寧ろ日本人の自負する道德的行爲である、日本が勇み肌の本場であると思はれる。處が日本の勇み肌と米國の夫れとは考は同じであつても、其考を應用する場所、場合が違ふと思ふ、米人は日常平和の間に於て、時に從ひ、事に從ひ終始此れを發揮して居る。日本の昔の勇み肌は非常特別の場合に或人から賴まれた場合に己れの生命を捨てゝもやるといふやうな事はあつたが、日常平和の際にも之を發揮するといふやうの事は少なかつた。けれども勇み肌的思想は日本人の多量に持て居るものに相違ないから敎育上から大いに修練を加へて行かなければならぬと思ふ。而して敎育上に於てかゝる立派なる考を養て行くにはどうするかといふに私は競技運動を奬勵することが必要だと思ふ。今日敎育社會に於ては競技運動の弊害ばかりを認めて批難する向きもあるが、其やり方、やらせ方の惡いので競技運動其物は敎育上非常に値打のあるものと思ふ。例へば勝敗の間に立て正々堂々として勝つといふ事、勝敗の分らぬ時は勝を人に讓るといふやうな事は大變によい事である。平和の時には立派に見ゆる人でも勝敗問題になれば稍々もすればバケを出し易いものであるが、競技運動に於て勝敗問題でも立派にやるといふ風を養ふのは非常によい事と信ずる。米國人の此競技運動に對する態度を見ても實に立派なもので、ゲームの決定しないものはお互にゆづる。見物人も單に勝つたからといつて喝采はしない。負けても奇麗なものに向て喝采をする。こういふ事も米人の勇肌の本源をなすものであらうと思ふ。

彼米國人は簡單主義である

勞働自活を愛する彼米國人は天上天下其賴みとする所は腕一本である。眼中又王公貴人がない。從て人爵的階級がない。故に又複雜煩多なる形式がない。大統領に對しても、職工に對しても同樣にミスターを以て通ずる。故に日常の禮儀などいふものも殆んど一般的て共通的であるから、我國などのやうにあの人には頭を何尺下げなければならぬとか、此人には何寸て澤山だとか、又こういふ人には疊を何枚下がつてお辭儀をするとかいふこともなく、又閣下、足下、樣、殿など

の使ひ分けをするやうな面倒臭い事がないのである。恰かも兄貴主義で、熊公、虎公といふやうに極く簡單なやり方である。從て彼國に於て官衙や學校の如きものに行ても、受附や門鑑などに怒鳴りつけらるゝやうな事がない。外套を着たまゝ何處へでも平然と行くことが出來る。殊に學校などに行くと、受附の處に校長が居る事もあるといふやうな具合で、萬事簡單明瞭主義である。此點はいくらか日本の職工生活に似て居るやうに思はれる。かくいふと米人を褒めるのか、くさすのか一寸分らぬやうに聞えるが、無論米人と雖も禮儀を重んじないといふのではない。初めて人を訪問するとか、婦人に面會するとか、若くは食卓に於て談話するとかいふ時には、習慣の異る日本人から見るとやかましいと思はるゝ禮儀が澤山ある。然し實はこれはやかましいのではなく、人に迷惑をかけぬ、人に快感を與ふるといふ趣意から成立て居る。而かも其禮儀が誰れに對しても皆平等である。平等であるから又其れが甚だ簡單であると評し得られるのである。

彼國の教育主義は職人的教育である

昔、我國に於ける職工徒弟なんどの教育は、親方が之に對して授くべき事項を一々指示したものではなかつた。親方が手本を示して居る間に子弟が見聞して自ら求めて學び得たものである。之れは我國に於ける職工教育の主義であつた。が米國の教育主義は皆凡て自ら求めさせる流儀だというてよからうと思ふ。現にニューヨークにあるプラット工業學校は此主義を標榜して居る最も有名なる學校である。彼の學校の器械科の科長に私が會つた時に、此學校が如何にして立派なる成績を擧げて居るかと尋ねた時に、彼の答に曰く我學校は何もよい事はないが、生徒がよい。我生徒は皆自ら求めんとする所の生徒である。自ら求めんとする生徒は求めて卒業することが出來る。若し自ら求めんとせざるの生徒あらば我學校の本領を失ふといふた。之れによつて見ても其一端を見ることが出來やう。又ニューヨーク、トレード、スクールといふ學校があるが、其學校は極く短期の間に職工を養成することに於て米國にて最も有名なるものである。其處の教育法は全く學理を授けずに終日實習許りをやつて居る。單に働く許りでは學校に入學する値打がないやうに一寸思はるゝ。處が此處の生徒は學校で働いて許り居るに拘らず、

成績が大變よい。何故かといふに生徒をして働いて居る中に自ら求めしむることをやつて居るからである。學理上のクエッション丈けを集めた「疑問集」といふやうなものを學校から生徒に配附する。生徒は其れを何かの方法によつてアンサーを求めねと實習が甘く出來ぬやうになる。て生徒は圖書館に行て調べるなり、若くは人から聞くなりして兎に角疑問を解決しなくてはならぬ。かうして疑問を解かせながら生徒に實習を授けるやうな仕組てある。此等も注ぎ込み主義でなくして自求的やり方である。其他の學校教育に於ても多く同様の主義をとつて居るやうに私は感じた。そこが即ち日本の昔の職工教育法と同じアイデアであるのだが、勇肌の應用が日本と違ふやうに矢張り此教育上のアイデアの應用も日本と違ふ。日本のゝもアイデアはよいのであるが自求心を惹起する事までやらぬ。つまり其應用の方法甚だ拙なるものである。私が米國人について感じた事の概略を申せば、右の通りである。

（完）

列國近事一班

如楓庵

●佛大統領の英國訪問　五月二十六日佛國大統領ファリエル氏は倫敦へ到着、先づペレスフオード卿に指揮せられたる英艦隊の歡迎を受て上陸、ヴイクトリア停車場にて英王陛下ウエールス親王以下各皇族殿下の御出迎に接し、英王陛下同乗ヨークハウスに入りたり。官民の歡迎盛に、夜に入りてはバッキンハム宮殿に於て大晩餐會開かれしが、氏今回の訪問は何か政治的意味あるものの如く思惟せられたり、即ち以上兩國主權者の晩餐會席上に於ける握手が如何なる程度まで英佛協約を永久に且つ鞏固となしたるか、英佛協約は果して暗默の間に同盟條約の有効範圍にまで進み入るべきや否やとの問題は倫敦の輿論を喚起したり、中には英王の訪露を俟つて英佛露の新三國同盟を見るに至るべしと云ふ者さへあるに至りしが、之に對する佛國の輿論は更に一層の熱度を加へたり、巴里の市民は大統領に對する英國朝野の歡迎を深く喜び、形式の上に於てこそ、未だ英佛同盟條約なきも、既に精神的同盟はバッキンハム宮殿に於て成りたりと云ひ、新三國同盟の成立は次て來るべく、而して愈々成立の曉は日英同盟と相俟つて東西兩半球の平和を確保すべしと豪語するに至れり。スペクテーターは是等の說に闢して英佛協約は如何なる程度まで擴張せらるゝとも第三國を威嚇すべき意味を有せず、英佛の甚深な

る關係が、獨逸を孤立せしむべしとの觀念は、全然一毫の價値だもなきものなりとて巧に伯林の嫉視を避けたり猶ファリエル氏は英王兩陛下及びウエールス親王コンノート殿下等の御案内にて木曜日英佛博覽會に臨み訪英表面上の目的を果して三十日巴里に歸りたり。

●ドレーフス遭難　六月四日文豪ゾラの遺骸はファリエル氏以下閣臣文星及び其他の有志等に依りてパンテオンに改葬せられしが、當日ゾラに因緣最も淺からざる前陸軍大尉ドレーフスが玆に再び難に遭ふて巴里市を騷擾せしめたる大椿事起りたるは奇遇と云ふべし。當日巴里の民心は甚しく激昂し居たりしが、式終りて參列者各々。パンテオンを退出せんとする時、軍事記者グレゴリなる者突然其背後より短銃を以て之を狙擊し右腕に負傷せしめ、續いて第二發を放ちしが、彼は左腕を其胸部に宛てゝ一擊悲鳴を擧げしに、其弟マーシウドレーフスは直に駈け寄りて之を扶けたり、群集は之を見るよりグレゴリの行爲を卑怯なりとし、罪を問ふに法廷あり、汝の罪するを要せずと叫びつゝ、兇漢を亂打せしが、弟のドレーフスは健氣にも之を押止めて兇漢を救ひたり、兇漢は直に捕へられ其の場は事なく濟みたるも、大統領狙擊せられたりと誤傳せられ一時官民を驚かしたりしが、ドレーフスなりと事分明するに及びて、巴里の市民は更に憤慨無量なりしと云ふ、兇行の原因には政治的意味なし、矢張猶太人に對する人種的反感より出てたるものにして、ドレーフスの辯護に殆ど全力を傾注して斃れたりしゾラの改葬に不滿を抱き、機を得て之をドレーフスに洩らしたるなりとの事なり。

●英露兩帝の會見と政局　英帝露都訪問の議は久しき以前より唱へられたる事なるが、愈々出發間際となるに及びて種々の妨碍運動起りたり下院に於ては勞働黨盛に露國の虐政を鳴らし多數の代議士が妄に殺害或は禁錮せらるゝが如き地に英帝の入らせ給ふは不安なりとて外務省費の削減を主張したりしも、少數にて否決せられたりしが、英國政府側の大膽なる露國辯護及び露國外相イゾルスキー氏の熱心なる奔走等は能く是等の反對論を排除して、遂に英帝は六月六日を以て倫敦を出發せられたり、之と同時に露帝も又レヴォルに向て露都を發す。英帝を載せたる快遊船は無事キールに寄港、獨逸艦隊の歡迎を受けし後、九日午前九時レヴォルに利着。露帝先づ英帝を御召のヸクトリア號に訪はせられしが、兩帝は相抱き其兩頰に接吻されたり、露國の新聞紙は此の深厚なる兩帝の交情に滿足し、佛國大統領訪問後の兩帝會見は頗る重大なる政治的意義ありと爲し、露佛同盟は英佛露同盟となるべしと說き、阿富汗、波斯、西藏等の諸問題に對する兩國の態度は將來益々圓滑となるべしと論じたり。されど獨紙の多くは兩帝の會見を見て、痛く之を攻擊し、マセドニア問題に關し兩國の接近を憂懼するものの如くなるが、要するに事實の眞相は決して深く込み入りたるものにあらず、半官報ロシアは聊か其消息を洩して曰く「現時に於ては歐洲列强の結合は見るを得べからず」と、之れ獨逸側の反抗に依りて新三國同盟の下相談が行惱みたる結果なりと更に臆測する者あれど、此の際獨逸が斯かる輕擧に出てんとも思はれず、マセドニア、波斯、西藏諸問題に於ては多少の打合せありたりしならんも

其れ以上の外交的意味ある會見はなきとなるべしとの事なり。

●露國海軍改造案否決　露國政府は海軍部内の大改革を斷行せんとし、波羅的海、黒海、大平洋の三鎭守府に各一名宛の司令長官を置き且つ現海軍省の職責を是等司令長官の双肩に負はしむべしとの海軍改造案を下院に提出し、之と同時に製艦費として一千百萬留を要求せしが、下院に於ける反對論者は、以上の改革を以て不充分なりとし、猶海軍根據地を極東に失ひたる露國が今更民の生血を吸集して、要もなき處に虚飾的艦隊を浮べたりとて何かせん、政府は製艦費を要求する前に、先づ、海軍部内の腐敗を一掃し、諸般の準備か整ひざるべからず、戰艦を波羅的海に浮べんとするは、獨逸に對する防禦の意味ならんも獨逸は露國と同じく大陸軍國なれば海軍を俟つて雌雄を決すべからず、且つ暗礁多くして大艦の操縦に不便なり、不急の海軍を建造して財政を危からしむるにも及ばざるべしとて、頗る痛切に露國海軍省の不信任海軍部内の腐敗を鳴らせし後、遂に製艦費を否決したり。それかあらぬか十一日浦港來電に依れば、露國政府は詔勅を以て一種の海軍縮少とも云ふべき海軍改革令を發布したり、即ち其内容は波羅的海、北海、大平洋、裏海各艦隊の司令官を一括して其上に總司令官を置き、現在の各艦司令長官を廢して其職員を海軍總司令部の手に移すべきものなりと云ふ。

●波斯の叛亂　去月來王黨と議會との衝突は一層激甚となりしが、國王は輿論に威壓せられて出奔せしも、夏閣に隱れて猶頑强の態度を取り居たりしため、國民黨は遂に數千名を驅り集めて議會を包圍し、國王は更に官兵を出して、之を解散らすべしと威嚇し、事態益々容易ならず、國民黨は國王の憲法違反を指摘し、之を責めたる不信任上奏案を起草せるも、國王は依然として之を顧みず、飽迄も專政々治を斷行せん意氣込なりしが、二十四日發タイムス發の電報に依れば、帝室砲兵隊は不意に武裝せる國民黨員を議會に襲ひ、議會防禦隊を潰走せしめ、數名の代議士及び其他七十有餘名の有志者を死傷せしめたりと云ふ猶當日テイラン各所に行はれたる官民衝突の爲め、之が爲に斃れし老幼婦女約八百名に及び、目も當てられぬ程の慘劇を演じたりとの事なりしが、國王は國民黨の領袖二名を捕縛して之を絞首の刑に處したり。官兵の横暴到らざるなく國民は九死に一生を得んとしつゝある有様にして、タブリッツに於ける婦人連の如き其寶玉装飾品など賣却して民黨の氣勢を揚げつゝありと云ふ。之に對する英露兩國の態度は聊か冷靜の嫌なき能はず、彼等は何れも波斯の内政に干渉する意志なきのみならず、王黨國民黨共に英露兩國の援助を豫期すべからずと通告せられたり。去れと露國陸軍大佐リアクホフ氏はテイランに於ける治安上の全權を納め遂に同市に戒嚴令を布告するの止むを得ざるに至りたり。

●獨帝の演説と其辯明　新三國同盟に對する獨逸官民の危惧心は容易に消え失せず、種々の風説を傳ふるに到りしが、獨帝は外國陸軍武官列席せる觀兵式上に於て、特に獨逸軍人を其馬前に集め、今や列國は獨逸を包圍し進退の途を鎖さんとす、されど來らば來るべし、吾人は既に準備成れりと語りたりとの報一度世間に洩れ出づるや、獨逸の人心は愈々

激昂し彼等の杞憂は一層甚しきを致せり、之に關し政府側の新聞紙は其謬傳なる事を辯明し、デベリッツ觀兵式場に於ける獨帝の演説は更に軍氣發揚の意より、フレデリック大王の精神を帶して事に從へと語られたるまでにて、敢て政治上に關係せるものにあらずと云ひ、更に進て獨逸が土耳古波斯阿富汗及び其他の諸問題に於て、常に不和の攪亂者なるが如く誤報せらるゝは遺憾の極みなりとて之を痛嘆せり。又之に關し吾人の手にせる伯林電報は更に最も興味ある辯明を傳へたり即ち曰く「北獨アルゲマイネ、ツアイツングは英露佛新三國同盟に關し先頃獨逸皇帝が何事か言はれたりとの風説に論及して曰く獨逸政策の眞相を誤解せる批評は往々にして不安の念慮を惹起さしめ其結果平和に解決せられ得べき問題も面倒となる事あるは遺憾なり。面倒なる外交問題が何時起るやも知れざるは吾人之を否まず而して常に根據なき風説又は報告によりて攻撃の標的となり居る獨逸は之に備ふる處なかる可からず、デベリッツに於ける獨逸皇帝の演説は單に軍事に關係したるものにして、何等現下の政治問題に論及したるにあらず、唯古來の傳說に忠實なる軍隊は常に偉功を奏すべしとの一の心得を述べたるのみと。右の獨逸半官報の所論は他の獨逸新聞に依りて一般に歡迎せられたり云々」と。獨逸皇帝が果して斯かる演説をせられしや否やは其眞僞固より遽に斷定し難きも、少なくとも斯かる說が獨逸人の口の端にかゝりて、彼等に不安の念を與ふる以上、新三國同盟說に對する獨逸官民の心の底の押し測られて餘りあるにあらずや、獨逸が近來益々外交に於て孤立の地位に陷らんとするものの如くなるより見るも、流石に彼等も神經過敏となりたりと某列國外交通は語られたり。

●タフト氏當選確定　タフト氏の勁敵として紐育府知事ヒユーズ氏あり、其何れが中原の鹿を射止むべきやとは、中外の等しく最も興味を抱き居たる問題なりしが、タフト氏の聲望に加ふるに現大統領ロ氏の重量は、機熟するに從つて、ヒユーズ氏も其敵にあらざるの形勢となり、タフト氏は遂に共和黨大會の第一投票に於て、二七八に對する七〇二の大多數を以て共和黨候補に選定せられたり。之が爲に落選せる共和黨の候補者は前記ヒユーズ氏を始め上院議員フォーカー氏、富豪フェーアバンクス氏及びフオックス氏等なるが、彼等は毫も惡感情を抱かず、來る十一月の晴れの選擧には協力一致してタフト氏を扶くべしと云ふ。猶タフト氏は愈々共和黨大統領候補と確定せられたるを以て、直に陸軍卿を辭しテネシー州出身たるルーク、ライト氏其後を襲ぎて新陸軍卿となりたり、ライト氏は非律賓總督として名あり、前に米國大使として我東京駐劄を命ぜられたる人なり

●前米國大統領クレブランド氏逝去　二十五日のロイテル電報は氏の悲報を傳へ來れり、氏は民主黨大統領として二度米國の政を執りたる人にして、氏の後又民主黨の大統領出でず、ブライアンの形勢日に非なるを見て居常頗る樂まざるものの如くなりしが今春來病んで遂に不歸の客となれり。氏は二十七歲にして辯護士となり、四十九歲にしてニユーヨーク州知事となり五十二歲にして民主黨大統領に當選せらる。現大

統領ロ氏は氏の葬式に陸海軍の儀禮を行ふべきを命じ且つ氏の手腕男氣愛國の精神等を擧げたる宣言書を發したり。嘗ては共和黨のブジン氏を敗りハリソン氏と第二期の大統領を爭ふて、見事に月桂冠を得たりし彼れ、今飛鳥を落す共和黨の豫選候補タフト氏に一致すると相前後して去る、氏果して如何の感ありしや。

●サモス島騷擾の眞相　サモス島の騷擾は一時非常に激烈なりしが今や漸く鎭靜せるもの丶如し、其眞相なりと云ふを聞くに、同島は全然基督敎信徒に依りて住はる丶頗る富裕なる一自治島にして、其主權者は土耳古皇帝の選任に拘はる者にして希臘のパナリチテ王家世々之を繼承する事となり居たり、現主權者は昨秋新に土耳古帝より選任せられたる王子なりしが、煙草問題に於て現首相ソホウリス氏と衝突し、爲に生じたる暴徒の爲に侮辱せられ、急電を土帝に飛ばして援兵を請ひ、漸く事なきを得たり、首相は海に航して出奔し、希臘に遁走せる王黨側の官民は總てサモス島に歸り來り秩序全く快復したりと云ふ。

●摩洛哥問題と佛國議會　其後アブダルアジツ正王の形勢日に非にして、ムラフイド潜王は遂に威風堂々たる行裝を整ひて入都し、盛大なる即位式を擧けて正統の王なりと宣せしが、之が爲に摩洛哥の形勢又一變せんとするものの如く、既に正王アブダルアジツに附隨せる官兵中にすら王に叛して、ムラフイド潜王を正王と布告する者あるに至りしかば、列國は又大に其正王の位置を危み始めたり、佛國下院に於ては右に關し外相ピシヨン氏と社會黨首領ジヨツレ氏との間に激烈なる論戰あり、外相は憤然として潜王ムラフイドを正當なる帝國王と認むるや否やは、一に佛國自身の意向に依らずして歐洲列强の意見にも聞かんと云ひ、佛國は摩國問題に關して獨逸の指導を受くる者にあらずとて其說を否認し、佛國は摩國が漸次平和に赴くを以て追々撤兵を實行すべしと說き、且つアブダルアジツは猶正當の國王なり、彼の歐洲人反對の宗敎戰爭を旗幟とするムラフイドを國王と承認する能はずと言明せり。潜王の勢威猶熾にして容易に鎭靜し得べくもあらざれば、摩國問題は今後益々紛糾し來るべき摸樣あり、されど獨逸を始め列强は佛國の之に對する所置に就ては毫も不滿を抱かず、今後とても一切干涉せざるべしと聲言し居れば、如何に複雜し來るとも累を列强に及ぼすが如き事なかるべしと云ふ。





現代人物評論（七）

後藤新平論

△後藤新平論

無名氏

私は後藤に向てよくいふ。「お前は仕合せ者だ。明治の聖世に生れた。御維新前ならばどうせお前は疊の上で死ぬる人間ぢやない。お前の親族の高野長英になるか、或は大縣大貳になるか、若くは佐倉宗五郎になるか、何にか知らんけれども兎に角無事には濟むまい。明治聖世の恩澤を蒙て居る人間の中でもお前程澤山蒙つて居るものはあるまい。」是れは九分通りは笑談であるが、中の一分は本當だと思ふ。

後藤といふ先生はレストレス、スピリットによつて、不息の精神によつて支配されてゐる。活動家てある。活動の向け方一つでは明治の今日でも或は社會黨の首領となつたかも知れぬ。所がそつちの方へは行かずに、中頃多少の蹉躓はあつたが、順序よく行て、とう／＼大臣までなつた。當人にとつて祝すべき事である。

子を知るは親に若くはなしといふ言葉があるが、後藤のお父さんが後藤の遊學する時に與へた手紙が今でも殘て居る。其手紙には諄々として悟してある。何處の親も子にいふ通りの事が書いてあるが、其中に殊に目立て見ゆるのは、お前は漫りに權謀術數を弄するやうな事をしてはいかんといふ事もあるし、世の中の事を高談誹謗するやうな事を餘りやつてはいかん、忠信篤敬、誠意誠心でやらなければいかんと書いてある。これが十五六の子供に向て親がいつたのであるから、其時分から親の眼には非凡な息子と映じたのであら

う。其手紙を見れば何となく今日の後藤の寫眞のやうに思はれる。後藤のお父さんといふのは、聞く所によれば非常に謹直な人である。手紙や何かを見てもチャンと行が正しくて筆に墨のつけ所も極まつてゐるといふ程に几帳面な人である。さういふ几帳面な人に今日の後藤のやうな人が生れるのは不思議なやうだが、實は後藤といふ人もなか／＼几帳面な人だ。其點は親父の息子といつてもよい。世間では後藤を東洋流の豪傑と思つて居るものもある。之れが第一の間違である。次ぎには小心翼々で豪傑の皮を被ぶつてゐるのだといふものもある。之れも全く當つたとは思ひない。誰れでも單純な人間はない。後藤も決して單純な人間ではない。只一本の鰹節のやうに何處を切ても鰹節が出て來るといふ譯のものでない。後藤は一のオルガニズムである、機關である。色々のものが其機關の中にある。これは矢張り一つの研究材料である。て、色々のものが此機關の中にあるが、今其れについて一つ二つ見た所を話せば、後藤は非常なる彈力を持て居る。此れが彼れの特色である。頭からか丶つて彼れを抑へつけやうとすると何處までも彈ねる。大概の奴は彼の彈ね飛ばす力に喫驚する。て抑へつけるといふ事は彼をマネージする所以ではない。其彈力で時としては失敗もするが、時としては——否多くの場合には成功する。彼れの今日あるは此彈力の致す所といつてもよい。今日は大臣をして明日は浪人をしても、明日から食ふ物がなくなつたらなど心配するやうな男ではない。彼は非常な短氣なやうな風で、面倒臭ければ、小使の髯々を擲るやうだから、性急短慮一徹のものかといへばさうではない。辛棒せねばならぬ事はなか／＼辛棒する。疳癪を起して惡い時はなか／＼疳癪を起さない。一寸した事を氣にするやうな風だが又どうなつても構はないといふ處に見込を据ゑて、捨身の勇氣も澤山にある。なか／＼只一口にどうと評することの六つかしい代物だ。別に作り飾て居る譯ではないが、彼れはいろ／＼のコンパウンド、エレメントから出來てゐて、而かも其中にある無限の活動力でクル／＼廻て居るのである

から、他人は今日と明日と矛盾撞着して居ると彼を見るのであるが、當人は一向不思議でも何でもなく、只自分のやる丈けの事をやつて居るのに過ぎないだらうと思ふ。

兒玉さんと彼れと臺灣を治めて居た時分、世間では兒玉が後藤のお守役をしてゐたと思つて居る。或點に於てはさうであつたかも知れぬ。けれども多くの點に於ては實は彼れが兒玉のお守役をしたのである。彼は寧ろ飛び出す力でなくして、飛び出す力を引き止むる力であつた。

又彼れについて最も主もなる點を擧げて見れば彼の頭は科學的である。彼の頭は全體火山的で少しキ印でないかといふやうに思はるゝ事もある。處が彼はなか〳〵さうでない。極くサインチフックである。成程彼れにはイマジネーションもあればファイアもある。想像もあれば火もある。エンシユーズアスム、熱誠に至ては最もある。けれども是等の力を科學的研究の範圍内から出さない。是等の力で寧ろ科學的研究の力を加へて居る。之れは彼れがお醫者さんであつたからさうであるかどうか知らんが、確かに彼のエライ所、他人の彼れに及ぶべからざる所である。さういふ譯であるから總ての點に於て彼れはシステムを考へる、組織系統を考へる。決して飯の上の蠅を追ふといふやり方でない。ちやんと案を立てゝ、其案に應じて今日一事を行ひ、明日一事を行ふといふ譯である。當座〳〵の出來心で御勝手次第といふ事をやらない。其爲めに時としては鷄を割くに牛刀を用ふのではないかと思はるゝ事もある。其結果として何事も大袈裟になる。何事も根本からやる。臺灣の地租を取立てるにしても、土地の調査は勿論の事、地方〳〵の慣習までも吟味する。彼れのやり方は總てさういふ風である。或は之を稱してステーツマン的、經世家的やり方というてよからうと思ふ。

其次ぎには總ての問題に對してオープン、マインドだ事である。頭を開いて總ての問題に接する。どうしたら現狀を今一歩進まれやうかといふ事を考へる。此

點からいへば彼れは先天的の進歩主義てある。

今一つは彼れは人間本位といふ事を忘れない。科學的精神の厚い人などは兎角人間といふ事を忘れる。人間本位といふ事を忘れる。彼は人物を養成するといふ事と、人物を吸收するといふ事には殆んど餘力を餘さない。一つの仕事をやる時には先づ人間を見附ける。なければ養成してからやるといふ譯てある。だから彼のやり方は仕掛が大きい。一方てはなか／＼性急て五分間も待てないといふやうてあるが、一方ては實を蒔いて其れを材木にして夫れから建築せうといふやうな事もやつて居る。そこらは彼の最もよい處てあらう。さういふ風てあるから彼れは冷血動物かといふになか／＼さうてない。熱血男子の方てあつて血は始終湧いて居る。敵には強く當るが味方にはやさしい。友誼などに至ては何れかといへば最も厚い方てある。世間の見た所てはあれ程我儘なやうな事をして居るに拘らず、彼の先輩て彼れをよく思はぬものは餘程少ないだらう。又彼れの同輩て、中には彼れに不服のものもあるだらうが彼をよく思うて居る人間も少くはない。敵は持て居るが、あれ程活動した割合には敵が少ない。彼の美德といつてよからう。

彼れについて委しく話せば、いろ／＼あるけれども極く大體を摘んでいへば右の如きものてある。彼れは横着てもあれば又なか／＼喰ひない奴だ、が根は惡黨てはない。寧ろ正直な方だといつた方が確かだ。なか／＼劍幕て居るが一皮むいて見れば涙脆く、寧ろ與し易い所もある。然し大抵のものは彼れに吹き飛ばされて了つて其眞相を見得ないのてある。

よくいふて見れば、彼の理想といふものは、別に金持にならうといふ譯てもあるまいし、大勳位公爵にならうといふ譯てもあるまいし、どつちかといへば日本の爲めに一仕事したいといふに外ならない。治國平天下といふのが彼れの理想てある。彼れは此點に於て確かに理想家てある。彼れは決して眼の前の俗務に鞅掌して滿足する奴ではない。矢張り頭の中に大きな理想があつて、日一日に其れに接近して行きたいといふの

である。是れが彼れの本領である。時としては餘り理想に過ぎて多少いろ〳〵の事を考へる事があるが、そこは科學的精神と實際的官能(プラクチカルセンス)を以て稍々調和を得て行て居る。

今迄話した事は概して彼れの美德と思ふ方面である。尚穴を探せば隨分あらうが、今賣り出した人間の穴を探す必要はなからうと思ふ。公人は天下の共有物といふ事があるから、其積りて成るべく彼れの前途の發達することを望むが爲めに、其よき方面を話せば、右のやうな譯である。(完)

△後藤新平

黑頭巾

其一

●後藤男の入閣は、彼自身に取りては、勿怪の幸運也。而して彼は、世間より新内閣の一異采を以て期待せらる。彼は多福なる哉。

●彼は蠻鐵の稱號を世間より贏ち得て、盛んに氣焰を、吐きつゝありと雖も、實は、彼は頗る滿鐵を持て餘したるは近來の眞相也。

●彼の巧智なる、逸早く、滿鐵の前途を見限りて、それと無く、榮轉の途を講じたる也。

●前内閣の對外政策を非難し、其の政策の下には、滿鐵繁榮の途無きことを痛論したるも事實也。

●而して彼は其親分桂侯の内閣の成立するありて、泡善くば一椅子を占め得んことを、心窃かに豫想したる也。

●彼が大臣候補の世評に上れるは、既に兒玉大將生前の時にあり。彼が入閣の志も亦漸く熟せり。今や故大將の恰も三年忌に當たり、彼れ遞信大臣として兒玉子の靈に對するを得たるは、其の滿足、蓋し察するに餘あり。

●故兒玉子は、總理の器にして自らも亦た任ずる處遠大に、屢其の子分を推選して地步を占めしむ。之に由て、男後藤も亦た嘗て大臣候補者に列せり。

●彼が先般入閣の志の切なりしは、吾輩深く之を疑はざりき。彼が、新聞社員に向つて、新内閣の短命なるべきを豫言し、大磐石の鐵鐵の位地を捨つるの不得策なることを、放言せる如きは、偶以て、其の腹底を見透かさるゝの材料たるに過ぎず。

●此の如きは、彼が、心にも無き豪語にして、彼が慣用の手段也。

●其の實は、彼が入閣の見込は未だ十分に立たざりしかば、彼は巧みに逆櫓式の論法を用ひて、新内閣の短命を豫言し、入閣落第の時の申譯を爲し置きたる也。

●新内閣にして、成立せざりしならば、彼は眞に滿鐵の用務を帶びて、北京に旅行すべき筈にて、土産物など澤山買込みたるが、それをば、態と新聞記者等に見せ付けたるが故に、流石の新聞記者も、彼が入閣の眞否を洞看する能はざりし也。

●彼が入閣は、實に新内閣成立の間際に至つて確定す。而して極力、彼を推選したる者は、子清浦奎吾也。これ世人の知らざる處也。

●子清浦が新内閣に列せざるを見て、彼が當初より入閣の交渉を受けざりしといひ、或は、桂、清浦間の離反を說く者などあるは、全然誤謬也。是逸早く、政友派策士の書下せる狂言ならずんばあらず。

●桂と清浦とは、依然として親密也。子清浦は、男後藤を推選するの言分は、『自分を入れる餘地あるならば、何卒、後藤を入れて吳れよ』といふにあり。

●外ならぬ子清浦の熱心なる身代はり的推選に依て、男後藤は芽出度く入閣せる也。

●彼の入閣は、桂の懇望に出るにあらず、彼自身の巧妙なる處世術の發現也。

●子清浦が、かく迄、男後藤に肩入せるは、男の外父故男安場保和が、子が同郷の先輩にして、嘗て其の引立を受けたるの關係もあるならん。

●而して、子清浦が自ら入閣せざるは、恐らくは、彼が大志の存する處ならずんばあらず。

●山縣伊三郎が、養父の相續者として、内閣を組織するの日は尙ほ遠かるべきが故に、桂侯を除きては同系

の政事家、首相の才ある者、子寺内を第一とし、其の外は、子曾禰荒助、已むを得ずんば、お鉢は、子清浦に廻らずとも斷言せられず。

●吾輩は敢て、子清浦を總理に推選する者に非ず。然れども、彼自らは、期する處あるべき也。

●されば彼は、近來、子分を推擧することをのみ專途とするに似たり。龜井英三郎(宮城縣知事)を警視總監に推すも亦其一例也。

●想ふに、子清浦は、大に前途の空想に耽りて、新内閣に入らざりしならん。新内閣更迭の際、閣員としては、跡引受に不便なれば、態と樞密の壘に據りて待つといふは、彼の理想なるべし。

●若し子清浦が總理として立つの日ありとせば、其時は、後藤は、男波多野と相並びて、子の羽翼たらん。

其二

●蓋し近來の新人材中、男後藤の如く、毀譽紛々として、月旦の定まり難き者はあらず。或者は以て一代の怪腕と爲すに至る。

●後藤は世間稀見の才子也。之を以て一代の怪腕と爲すに至つては、則ち識者は與みせざる也。

●男後藤の名に關聯して離る可らざる、怪腕を杉山茂丸と爲す。彼こそは、眞に一代の怪腕といふ可き也。杉山の前に、後藤何の氣燄あらんや。

●杉山より見れば、後藤は一傀儡子たるに過ぎず。彼、金の必要あれば、則ち後藤を使役して、何かの儲口を案出せしむ。

●杉山は、玄洋社の怪物、頭山滿の門下より出つ。現今の活動に至つては、杉山或は、頭山の上にあらん。

●男後藤を語るに當りて、吾輩をして聊か杉山を語らしめよ。

●杉山の出處閲歷は頗る混沌の中に葬らる。彼は頗る付きの辯士也。其の辯には一種の魔力あり。何とも言はれぬ、面白くて、而して愛嬌あり。彼と語れば、何人も引入れらるゝ心地すべし。

●杉山の演說は、吾輩之を知らず、然れども其の坐談に至つては、優に一代の才たるを失はず。

●彼は、謹嚴なる公山縣、子寺内等へも時々出入して、到處、好評を以て迎へらる。

●彼が、巧みに捕獲し得たるは公伊藤也。彼を公伊藤に紹介する者は、男後藤也。

●彼を男後藤に紹介する者は、子金子溪水也。金子は杉山と同鄕の先輩也。

●杉山と、男後藤を利用するに及びて、非凡の才、忽然として頴脱し、一怪星として光彩を發するに至れり。

●杉山の閲歴には種々の秘密を包有すべく傳へらる。彼の手の中指の頭を缺く如きも、人をして幾多の想像を胚胎し來らしむ。

●然るに、彼をして、其の中指の物語を爲さしめよ。實に面白く、罪無き稚物語を語り出すべし。

●杉山は實に多くを辯じて、秘密を漏らさず。多くを語りて油を賣らず、駄法螺を吹かず、男後藤の雄辯とは全く其の選を異にする也。

●彼の眼に映する後藤は、怪腕家にもあらず、大人物にもあらず。自家藥籠中の一能吏のみ。

●差し男後藤は、須らく顔を洗つて、杉山の機鋒を研究し、以て自ら修養する處無かる可らず。

●杉山今は、築地に台華社を築きて、此に居る。彼の智を以てして、天下の財自由自在なる可くして而して大に富まざるも亦た頗る妙ならずや。

●杉山嘗て病に由て、病院に入る。男後藤一日來り見舞ふ。坐に頭山滿等數輩あり。後藤相識らず、滔々獨舞台に、氣燄を吐き散らして去る。

●去るに及んで、頭山重くるしき口調を以て、杉山に問ふ。『今の蟲は何んだイ。何デモ善く喋べる蟲だの──』

其三

●男後藤は、自ら頭を上げ得ざる、幾多の人物を有す而して、自ら面前に、頭を上げしめざる無數の人物有することを以て、自ら慰安す。

●彼は伊藤、山縣兩公を始め、多くの有力家の前には、猫の如く、柔にして、氣燄を吐かず。

●而して其の後輩、若くは配下に向つては、頗る氣燄

揚り、傍若無人の態度を爲す。

●およそ、上に向つて、極めて媚ぶる者は、下に向つて無暗に威張るを常情とす。男後藤の如きは、特に其の傾向の發展したる者ならずんばあらず。

●彼は極めて柔順にして、殊に彼を崇拜し敬屈する者を好むの癖あり。所謂、眞骨頭あるの士は、彼の取らざる處也。

●博士岡松參太郎の如きも、彼の前には、顏色を失ふ。

●男後藤は。强者に對抗するの骨頭を有せざるに似たり、而して『弱者苛め』を爲すことは、寧ろ殘酷なるの程度にまで歩を進む。

●彼が所謂「午前十時」の人物にして、使ひ易きといふもの、年壯氣鋭、敏腕にして、男後藤に、極めて隨喜するの意味ならずんばあらず。

●十年前、嘗て、男後藤、其の後進者に語つて曰く、余伊藤公の性格を見るに、萬事は暫らく措き、皇室に對しては、深く忠義の志を抱く。此の一事、公の特に美點とする處也。

●公は、諸事に、つねに有限責任を以て當るの風ありひとり、事、皇室に關するに至つては、則ち無限責任を以て、振つて力を盡す。

●余は、つねに、しか思ひて公を信じ來れり。然るに、近來の公を見れば、頗る疑はしきもの無くんばあらず。

●則ち此事を以て公に語り、公が有限責任の態度を非難せしに、公は、ヒドイ事を言ふ奴哉と言はれたりと。

●此の如きは、男後藤が、自ら語る處也。然れども、何んぞ嘗て、公伊藤の面前に、此の如く大膽なるを得可んや。

●彼自ら、一場の法螺を吹きて、鬼面以て、後進を嚇するに過ぎざる也。

●彼は、公山縣、伊藤、侯井上、松方は申すに及ばず在野の伯大隈に至るまで、或は兩院の領袖者に對しては、つねに存問の禮を盡し、上京の際に土産物を贈り出發の際、一々、暇乞を爲し、極めて匆忙の時と雖も嘗て怠ることあらず。

●假令、彼は、長者の爲めに、其の腹底を見透かさる

ゝありと雖も、更に意に介せず。鞠躬如として、其の態度を悛ためず。

●彼の議會の委員會に於て、陣笠議員に對するや、意氣軒昂として、勢焔頗る熾に、敵手を壓迫す。

●その辭氣、態度、テキハキとして、其の才氣を發揮すと雖も、往々にして傲岸を極むることあり。

●彼は弱者と見れば、此の如く強くなる人也。而して此に對して、陣笠議員連、切齒扼腕することあるも、領袖すでに、軟化するを以て、彼に對して加ふることある能はず。

●男後藤は、斷じて親分の性格を有せず。決して勇者にもあらず。

●彼は、雄の一字には、嘗て値せざる人物也。彼は行動の潑剌たる才子也。

其　四

●男後藤は、黃金萬能主義の權化也。彼は這般の意義に於て、時代精神の代表的人物たる也。

●若し、高尙なる意味に於て其の人格を評價せば、男後藤は、聲聞其の實に過ぎ、案外に、ツマラヌ人物たるやも知る可らず。

●然れども、彼が黃金萬能主義を發揮するに當りてや、虎、翼を生ずるの勢無くんばあらず。

●而して、男後藤より黃金を引き去らば、殘る處は或は零ならんといふは、少しく酷也と雖も、亦た半面の眞理たるを失はず。

●臺灣總督府が、年々、對議會、對新聞の爲に支出する巨萬の金額は、つねに精算されたること無く、男後藤の手に由つて自在に使用せられたり。

●蓋し新殖民地に於ては、窮屈なる會計檢査の制度は、其の事業の發展を妨ぐるの嫌無くんばあらず。

●此の精神に本づき、總督府の機密費は支出さる。後藤の妙腕は、此間に發揮さるゝ也。

●滿鐵に於ても、亦た此の如し、殊に滿鐵は二億圓の大會社なれば、年々數十萬圓の運動費を支出するは、困難ならず。

●男後藤は、自由に黃金を散じ得るの制度の下に活動

する政事家也。彼の成功は、彼が殖民地的政事家たることを現示す。

●彼は、敏才を驅使するに、金力を以てせること、恰も富翁が、藝妓に對すると同一般の趣無くんばあらず。

●彼は、議會の領袖に、遍ねく「袖の下」を贈り、廣く黄白を散じて、以て、臺灣の事々、つねに議會の難問たらざるを得しためり。滿鐵に於ても、固より同一筆法也。

●彼は上京するや、日々、待合に來りて、議員、記者を御馳走し、以て評判の發展を圖りつゝあり。

●彼は、かゝる席に在りては、必ずしも豪語せず。『君等は、罪が無くて善イノ』と、寛々然横臥して、微笑するのみ。

●彼が土産物の贈遺は非常に盛ん也と謂ふべし。臺灣滿洲より東京に、東京より歸任の時も共に然る也。

●彼は、金を以て、人の頭を叩き、人の頰を撫で、人心を籠絡し、皷舞して、黄金政略以て唯一の政策と爲す者也。

●彼は、新内閣に在りても、男平田東助の如く、淸廉潔白の人とは、全然其の傾向を異にし、金力以外、人格の力以て後進を統率するに足るの人物に非る也。

●或は言ふ、彼は内地の一大臣としては、從來の聲價を落すことあらんを恐ると。

●男後藤は、如才無き人たる也。滿鐵にゆくの時は、臺灣の顧問。入閣の際には則ち滿鐵の顧問たるの地位を留保す。

●彼が顧問の地位を留保するは、機密費を使はんが爲のみ。殊に、今回は、事實上、滿鐵の總裁たるべしと傳へらる。

●彼は、かくの如く、つねに、黄金萬能政策の資源を確保するを以て、吾輩は、未だ容易に、彼の手腕の窮するを見ざる也。

其五

●男後藤の成功は、畢竟、黄金萬能主義。賄賂政略。自家吹聽政略、新聞政略。强者閉口の弱者苛じめの數條に歸着せざる可らず。

●現代の政事家中、最も華やかなる新聞政略を發揮する者は、男後藤也。

●彼は、臺灣に在ては、臺灣日日新聞、滿洲に在ては、滿洲日々新聞を發行し、盛んに『御用』を勤めしむ。

●東京に在ても、一二の新聞及び數多の新聞記者に密接なる關係を有す。

●暫らく一例を擧ぐ。『日本』新聞が、陸實氏の時代に一時、日曜寫眞版附錄を發行してより頓に紙數を增加せることあり。

●當時公伊藤、此の現象に興味を感じ、探偵して、其の資源の總督府に在ることを知れりと云ふ。

●若しそれ、廣告の才に至つては、即ち男後藤は、伯大隈以來の能手たるを失はず。

●彼はつねに、自分を世間注目の焦點に置くことを忘れず。つねに巧みに、自分を吹聽して、後藤の名、世の人心に、つねに新たならしむ。

●伯大隈は今や專ら其の雄辯に於てし、後藤は公金社金を散じて、華やかに廣告するの相違あるのみ。

●彼は、自家廣告の才あると共に、同時に世上の評判を極めて、氣にする人物なる也。

●彼の新聞政略は、半ば此意義より出て來る。此に於て、彼の人格の如何を察知するに難からざる也。

其六

●吾輩は男後藤を月旦するに當りて、轉た故星亨を憶ふの情無くんばあらず。

●擧世、紛々として、弱者多きの時に當り、大手を揮つて、政海を横行濶歩せること、彼が如きは眞に快男兒なる哉。

●男後藤の如きは、虎皮羊質の人のみ。其の人格、更に一箇、痛快なる處あるを見ず。

●彼が他の顏色を伺ひ、世上の評判を氣にする如き、弱者の本色、隱す可らざるものある也。

●星は意思の人也。後藤は才の人也。

●而して此の兩者、共に時代精神の權化たるを失はず一は積極的に於て、他は消極的たるに於て。

●男後藤の成功は、時代精神の傾向を現示するもの也

星亭の人格は、時代人心の希望を現示するもの也。

◉換言すれば、男後藤は、時代が有する、特徴を代表し、星亭は、時代が、之を缺きて、つねにあこがれつゝ、極めて稀に之を得ることあれば則ち讃歎して已まざる底のものを代表す。

◉星の後繼者は容易に得難かるべし。男後藤の亞流は踵を接して起らん。

◉現代拂底の者は、強志の人にあり。強き人にあり。雄者にあり。

◉才氣は現代に磅礴す。強志の人は、慧星の如く、出現すること稀也。

◉吾輩は、男後藤の成功を怪しまず。而して、其の才華の爛漫たるを見、轉た強志者の出現を待つの情無くんばあらず。

其七

◉男後藤は風采秀美、世間稀に見るの美丈夫たる也。

◉彼は少時、安場保和の玄關番たりしといふは非也。彼が、安場が、福島縣令たりしとき、給仕たりし也。

◉而して安場が愛知縣に轉任せしとき、彼は警部阿川某の書生として、隨つて亦た名古屋に來れり。其の頃已に彼は安場に出入し、其の知を受けたるに似たり。

◉彼は、名古屋の醫學校に入學するに及び、教師獨逸人ローレッの通譯たる多納存亭といへる者の家に、書生半分に寄寓せり。

◉其頃、多納は、月俸の七八十圓も取りて、獨身者なれば、金は有り餘りて、遊蕩を事とし、毎夜半を過ぐるに非されば歸宅せず。

◉然るに、後藤は、此の道樂なる先生に就いて、獨逸語を學はんが爲に、讀本を抱へて、毎日〳〵、多納の遊び先きの酒樓を、それからそれと、尋ねあるき、附き纒ひて、五月蠅くも、少しづゝ、質問も爲し、教授も受けたる也。

◉他日、多納、此事を語り出てゝ、後藤の精勵に感服せりといふ。實に此の如きは、現時少年者の龜鑑とすべきものならずんばあらず。

◉後藤は學校を卒業して、縣立病院の宿直醫となり、

勉強の結果、爾來、驟登りに出世して、遂に内務省に榮轉するに至れり。

●當時、後藤年壯、容貌頗る美に、名古屋の「今業平」として、殆んど名古屋美人の相場を狂はすの勢ありき

●當時、彼が贏ち得たる艶福一にして足らずと雖も、彼が眞に、愛情を傾注して今に至りて、渝らざるもの唯だ一あり。

●薄命の佳人、今に至つて嫁せず、貞心頗る固し。男後藤が、事に託して屢、名古屋にゆき、且つ滯在するもの、此の爲也と傳ふるものあり。

●或は曰く、男後藤にして、彼の壯年時に、婦人の包圍軍の爲に陷落せず、能く今日の地位を致せるは、當時を識る者の、美談とするところ也と。

●男後藤夫人、若き時、氣の利たる人にもあらず、とても世間に交際すべき人とも思はれざりしといへるに、今や、一廉の交際家となり了れるは、男後藤の感化ならずんばあらず。

其八

●男後藤の大叔父に故高野長英あり。新文明啓發の偉人也。

●男後藤は、高野の繼承者を以て、自ら任ずるものに似たり。

●蓋し其容貌は、多少相似たるところあるが如し。而して其の覇氣滿身、才華の溢るが如き又た相似たり。

●唯だ男は、高野の如き、識量と志操と、而して逆流に反抗して主張を貫徹するの大勇氣とを缺く。

●然りと雖も、男後藤は、紛々たる世の才人中に在りて、固より鷄群の一鶴たるを失はざるもの也。

●彼は確かに時代の人氣男たるに足るの素質を有する者也。

●彼は背後に大勢力を脊負ふの時に安んじて、其の妙腕を揮ふ。

●而して彼は順境の成功者にして、逆境の勇士に非ず。

●且つ彼の功名に急にして、虛榮心に富める、内閣の歩調困難のときは、華やかなる問題を掲げ來りて、逸早く辭職の好名目を造り出すものは、恐らくは彼なら

ん。（完結）

△余の識れる後藤新平氏

萬朝報編輯に於て　圓城寺　淸

後藤新平氏とは余は所謂一面の識たるに過ぎぬ、隨つて氏に就ては多く知る所が無い。

今より五六年前のことゝ覺えて居る、余は『財政整理案』と題する一書を著はし、其の中に臺灣の財政に關する批評論議——と言ふよりも寧ろ其の失計を指摘して之を非難したことがあつた、氏は夫れを閲覽したものと見え、一々精密に之を辯駁答解した一大長篇を部下のものに起稿せしめ、夫れを見て貰ひたいから何處かで一會しやうと言ふことを吾が萬朝報社の一員を經由して傳へられた、余は其の前に既に後藤新平氏の名前を承知して多少普通の役人連とは違つて居ると言ふことも聞いて居たが、更に一新聞記者たる余の論議に對して辯駁答解しやうと言ふのであるから、是れは面白い、宜しい、一會しやう、場所は何處でも構はぬ、が、ソンなことであるなら、話の十分に出來る處が宜いから、料理屋や待合などにせず、氏の自宅にする方が善からう、余の方から氏の自宅の方に出かくることにしやうと答へ、日時を約して仲介の一社員と共に麻布の氏の宅に往訪した

初對面の挨拶が濟み、有觸れた寒暄の相敘が了ると、氏は最と磊落に「君に一ツ見て貰ふものがある、是れまで世上の論議に對してコンなことを仕たことはないが、君の著書中に有つた臺灣財政に關する論議は如何にも眞面目で夫れ〳〵根底もあり、世の常並の議論とは違ふやうに思つたから、僕の方でも特に注意を拂ひ、態々コンな精細な辯明書を拵へたのだ、一ト通り讀んで見て呉れ給へ」と差出されるのを見れば『圓城寺淸君の財政整理案中、臺灣に關する部分に付ての辯明（後に臺灣財政辯妄と題し財務局長祝辰巳氏の名を以て臺灣協會々報に續載されたと覺えて居る）と題し、統計表などをも加へて沿々數千言を費した一大辯駁文で

ある、余はハヽー、左樣ですかと答へつゝ之を受取り、暫時の間に之を默讀し了り、イヤ、大要解りました、けれども僕の意見は之が爲めに寸毫も改むべきを見ません、とて夫れから辯明中の要點に就て更に反駁すると、氏は又一々之に辯明される、其の辯明に對して更に又反駁を加ふると、氏も亦負けずに答辯される、斯くて論難答辯に刻を移したが、果しがないから、是れては丸で水掛論で乾る時が無い、孰れ更に又日を期して議論を仕やう、時に最早時刻だ、何處かに行つて一酌やらうかと切出されたから、ハイ、ドウも有難う、が、アナタの內では遣れませんかと切返すと、ウム、遣れる、夫れてはさうしやう、手數入らずだ、何處かて豪飲ても遣ると、後藤は直ぐ買收てもするやうに言ふからナーと言ひつゝ家人に用意を命ぜらるゝ、余は輕くフフム、御馳走受けて其の上に買收される、結構てすナー、が、御馳走を受けても、買收されても、反對すべきは反對しますよなどと餘談する內、食事の用意が出來たとの知らせ、夫れては御馳走に爲らうと連れ立つて食卓に着き、飮む、食ふ、其の間にも兩方得意の議論は絕えなかつた、折柄、神山潤次君も居合せられて食卓を共にし、神山氏からは多少研究を重ねた積りだと言ふ曰く附きの敎育談を聽かされたやうに覺えて居る。

余と後藤氏との面識は此時よりて、唯此の一回綏晤したのである、其の後は訪ねたこともなければ訪ねられたこともない、折々公會の席などで邂逅し、イヤ、ドウですと挨拶を受け、ドウも御無沙汰、孰れお暇の時分にと返辭を仕た切り、其の內、後藤氏は臺灣より滿洲に移り、最近には愈々遞信大臣と爲り濟まされた、遞信の方は余が最も反對しつゝある鐵道國有の問題があり、其始末は決して容易なことてはないから、是れからは又直接に追々筆鋒を向けなければならぬことに爲るであらう、他のものを相手にするよりも、後藤氏を相手だけに何だか相手甲斐があるやうに感ずる。

以上のやうな次第であるから、余は後藤氏に就てマダ多くを知らぬ、隨つて評論の筆を下し兼ねる、が、

吾が萬朝報紙上では氏を評して油繪のやうだ、遠くから見れば奇麗だが、近寄つて見ればボロが出さうだと言つて、氏が内閣大臣と爲つたのを危ぶむで居る、兎に角、臺灣や、滿洲に腰を据へて心任せに遣つて居つた時とは大分違ふに相違ない、良否功過とも見え透き易い、氏の從來の遣方は内地向きとは言へない廉が多いやうだ、又遞信省は臺灣や、滿鐵のやうに自由は利くまい、自由の利かぬだけ氏の手腕を揮ふには窮屈であらう、が、兎に角、精しい批評は此上の手並を見た上のことに仕やう。

△後藤新平について

空々山人

○後藤といふ男は少しキ印だやうだね。そりや、なか〱大きな計畫も立てるし、又細かい所にも氣の附く男さ。けれど、どうかすると所謂向つ腹を立て、何ても打棄つて了ふやうな事をし兼ねない男だよ。然し上の人に向ては滅多にやらないといふ話がある、?そりや滅多にはやるまい。けれど、決してやらないといふことは保證の出來ん男だね。

○今度遞信大臣になつたら大いにやるだらうかと聞くのかい。さアどうかな。然し己れは餘りやるまいと思つとる。成るべく不得要領、事勿れ主義をとるぢやないか。若しやつたら、小村といふ是れも利かぬ氣の男と衝突するやうな事がないとも限らん。さうしたら内閣の爲めには困るだらうが、よい見物だらうよ。然し後藤もなか〱利巧になつたから、大抵他と衝突するやうな事はしまいな。話はそれ丈けさ。失敬。

△後藤新平

三宅雪嶺

後藤男入閣の噂が出て、次いで又打消の噂が出たが、その經過の跡は明かでない。入閣の運びになつて事實にならないとすれば、入ること能はざるのであつたか

又は入るを欲せざるのであつたか、といふ上に男の値打が係る。が這入らうと思へば這入れるものとして判斷するが宜からう、人の事業を爲すは、功名心に出たとか、然らずして意氣に感じたとか、其處には樣々の別ちがあるが、事業を爲した上から見ると、或る難局に當つて何處迄も之が爲に結末を附けねば止まぬといふのと、絶えず物を踏臺にする心持て、或る位置に居るのはより宜き位置に上るの段階であるとして、より宜き位置の來るまで働き、それが來ると共に前の位置は蹈み蹴つて去つてしまうといふのとある、その又二者の間に居るものも尠くない、クローマー卿の如きは第一者の例になる、が普通政治家と稱するものは重に第二者に屬する。後藤男はその孰れに居るか、男は才能も尋常で無く、氣魄も尋常で無い、境遇の變化も少くなかつたが、つまり如何なる人であるかは今日未定である、臺灣に於ける成績より見れば第一者たるの傾向無しともせぬ、若し滿鐵總裁として十分に基礎を固めたならば愈よその實の上がるのである、併し第二者たるの跡方無いでもない、今度入閣するならば第二者と認むるの適當であるのであるが、若し滿鐵の前途猶ほ分らぬので之を去ること出來ぬとて踏み止まつたとすれば、愈よ第一者たるの面目を發揮する、クローマー卿は中央政局に活動したもの程に花々しく見えぬが、國民の感謝を受くること頗る大であつた、永らく埃及に止まり、同一の官に居り、同一の事業に從事して、一たび事功の認められては男爵となり、十年内にして子爵となり伯爵となり、尚ほ議會より少からぬ賞金を授けられたのは、彼に取つて多く關するところでないとしても、兎に角彼の國家に對して大功の有つたことの表彰である。總理大臣たる程に世間に謠はれぬが、功業の認められたのは寧ろ大なりとして宜い、總理大臣としてよりも、成功として酬られたものと言へるのだらう、固よりその孰れがよいとして決する譯には行かぬ。一事業に專なるものを他に移して不利益なこともあるし、絶えず踏臺の心持のものを、一事業に專らならしめんとして不利益なこともある、各々その長所を

盡さしむる外は無い、が後藤男自ら何が長所であるか、何を以て志望として居るか、隨分境遇に變化が多く、殆んど行くとして可ならざるなしといふ有樣であるが、今日迄の處概括して順境であつたとすべきである。中にも故兒玉大將の知遇を受け、臺灣の民政長官として七年間徒事したのは、その最も著しいものである。若し滿鐵總裁として帝國の利權を彼岸に發展し得たならば、その事功は更に大なるものとなる、前には兒玉大將の下になし得たのを、今度は獨力で能く如何なる度にまで爲し得るかを證明するのである、國家の爲といふ事は暫く措き、個人の政略としても是れ亦得策で無いとはせぬ、が男は安んじて今數年間現職を續け得るか、或は滿鐵の面倒な事業をばよい加減に切上げて最ちつと派手な位置に就かうとしはせぬか、男の噂に出たのは遞信大臣であつた、遞信にも大にその技倆を振ふべき餘地がある。又他の大臣としても猶ほ爲すべきことがある、滿鐵の前途未だ計られぬ時に當つて、去つて内閣に入るのは巧なりといふべきであるが、若しさる場合のあるならば必ず將來總理大臣たるべき希望が無てはならぬ、尋常の大臣となるなどは左程値打のあるものでない、今日まで大臣たるものは數へ切れぬのであるが、それは唯大臣の名を貰つたといふに止まる、事業の認められたのでは無く、大臣たりしといふ事の幽かに記臆せられたのである、空名は由來力あるものゝ喜ぶところではない、名のみの大臣となるならば爲るも爲らんも大差は無い、或る大臣として或る仕事をし、又他の大臣となつて他の仕事をし、孰れも前任者の仕事を引繼いで、若干年月その位に在るといふ程の事は、左まで力を要する譯でない、凡常人も能くするところである、首相といつても必ずしも宜い職とすべきで無いが、先づ功名心あるものの最も希望するところの一つだ、凡て踏臺にする心持があつても首相まで上れば先づ本望を遂げたりと稱し得られる、が尋常大臣たるに終るのはその時の都合によつて宜い、後藤男にして滿鐵を去り尋常大臣となるのは一層事業の大にして困難なるものあらば兎に角、然らざる限り

自ら小にすると同じ、唯後藤といふ大臣もあつたといふ丈の事になる、滿鐵の基礎の固まらぬ間に入閣することあるならば、必ず全力を政界に注いで行く行くは首相となり、大に國政の上に爲すことあらうといふ決心がなくてならぬ、男は有爲の人と見做されて居る、これ迄は慥にその跡がある、今日は日本の有數なる人物である、その人が尋常大臣に伍して終るといふ樣なことになつては大に惜むべきことだ、性質は何に最も適するかは明白でないとして、大陸に帝國の足場を造るか、又は首相となるか、或は全く違つた方面に出るか、即ち各政黨を縱斷し横斷し政局を一變するが如きことをするか、何か尋常人の企て得ざる大事に身を委ぬるところ有るべきである、これ今日までの順境を趁うて更に歩を進むるところなのだ、が此先尋常大臣となつて終るが如きことあつたならば今日は順境の絶頂であつてこれから降り坂となるとすべきである、滿鐵總裁として奮勵するの或は本志に合はんことかも知れんが、性質は努力次第で幾干か改まるものである、性質が尋常大臣となる位のものであるとしても、之を改むるが宜い、今正に志が大になるか小になるかの分れ道である、その孰れに就くかを見るべき時である、男の爲に計るには此處更に大に奮勵すべきことだ、尋常大臣たること何かある、今日の處猶ほ或は男のそれ程の人物でないことを議するもある、更に奮勵一番を要する。

（七月十三日談話筆記校閲を經たるものなり）

△後藤新平君を評す

石川半山

明治二十六年頃我輩は東京經濟雜誌社の編輯局に在り、或る日故田口卯吉君、外より歸り來て曰く。今日初めて安場保和と云へる人に會見せしが、古の英雄とはかゝる人物を稱したる者ならんと感じたり蓋し安場翁の風采態度には一種の氣勢人に迫る者あり、人をして古英雄の面影を想はしめしなり、而して我輩は當代の流行兒たる後藤新平君を見る毎に、未だ

嘗て安場翁を連想せざるはあらず

後藤君は安場翁の女婿なれども、單に尋常一樣の女婿と云ふ可らず、其の人格は安場翁に依て陶冶されたる者なり、翁は彼れが青年時代に於て其の凡庸の器に非るを看破し、之を保護し之を育成し、而して其の人物の大成するに及んで、其女を以て之に娶はせし者なれば、後藤君の性格は翁の感化に依て成りし者と謂ふも不可なかる可し。

彼れの豪放磊落なる、氣宇の濶達なる、精悍にして氣を負へる、俠骨の稜々たる、皆安場翁の面影を存するものなり、翁は干涉知事の名を博して、黨人の間に憎まれたるも、亦頗る經綸を有し、地方長官として各地に遺したる治蹟の見るべき者少からず、後藤君が其の感化を受けて、國家に有用なる人物となれるは決して偶然に非るなり。

後藤君は醫を學んで醫を業とせず、人を醫するの匕を擲て國家の病を療治せんと志したり、然れども衞生局長の時代には未だ大に世に現はれざりき。一たび足を失して相馬事件の爲めに牢獄に投ぜらるゝや、人は頗る彼れが危險なる人物なるを想ふて、多く彼れの性格を疑ひたり、當時彼れの一蹶を見たる者、誰れか今日の後藤男爵あるを想はんや。

兒玉大將は彼れの知己なりき、而して臺灣に於ける彼れの成功は、彼れを一代の人氣役者とならしめたり、今や彼れの聲望は眞に隆々たる者なり。

然れども我輩を以て之を見る、彼れの如きは蓋しナポレオン式の人物なり、其の聲望や恐らくは一時的に非るべきか。

我輩は嘗て齋藤修一郎氏の盛なる勢力を見たり、又星亨氏が一代の人氣役者たりしを見たり、更らに高島鞆之助氏が意氣天下を吐呑するの慨ありしを見たり、而して星氏は不幸にして兇刄に斃れ、高島、齋藤の兩氏は今や社會の傍觀者となれり、後藤君の將來は果して如何なるべき、是等の諸氏と同じ運命を取ることなきか、今日の日本に於て人氣旺盛なる三個の人物は、政治家として後藤君、角力道に於て常陸山谷右衞門、浪

花節に於て桃中軒雲右エ門なり。

我輩は此の三幅對の人物が何れも非凡の資質を有し、傑出したる力量を有し、常に活動して以て一代を驚動するを見て、其の花々しさ、派手やかなる、活氣ある、氣味の良き男振りを愛する者なりと雖も、之れと同時に窃かに彼等の運命の前途に於て、又一種の暗雲の横はり居らざるやを恐れずんばあらず。

彼等の行動を見る時は「長い浮世に短かい生命、太く短く面白く花やかに、思ふ程の事を遣て死ぬ可し」との方針にて、荒れ廻はり得るだけ荒れ廻り、働き得るだけ働き、生活の如きも力の及ぶ限りの豪奢を極め、人目を聳動して以て快となせる如くに思はる、是れ人の處世上素より萬全の計に非るなり。

唯後藤君に至ては放膽なるが如き中に、頗る小心なる所あり、特に好んで賢才を用ひ、新渡戸博士の如き君子人を尊敬して、之れと親交を訂せるが故に、幸ひに或は大過なくして能く圓滿なる生涯を送り、死する迄其の聲望を維持して以て能く邦家に大功を貢献するを得るやも知れざれども、單に今日の外觀を以て之を見れば、彼れも亦ナポレオン式の人物なり、奢る平家の一門に類する末路を取らざるやを危ぶまるゝなり。

△後藤新平論

匿名氏

私は後藤新平といふ人を申分のない好運兒と思つて居る。一體誰でも小兒の時は自分の理想の爲めに動くもので、少年時代は最も其人の性格の發揮される時代だと私は信じて居る。例へば文學を目的とする人は少年時代からして文學を嗜む、又政治を目的とする人は少年時代から自ら政治上の趣味を持て居る。後にどういふ逆境に立たうとも其目的とする所を貫かうとするものである。さうして貫ぎ得た人が即ち知名の士となつて居るのである。處があの後藤といふ人の少年時代はどうかといふに何等の理想もあらはれてゐない。經歷の委しきことは新聞紙などにも傳へられたから今

更ら繰り返す必要はないが、家は極く貧乏で學資金を父から貰て修學することが出來ず、他人の食客學僕となつて居た。さうして其時にあの人の目的通りの學問をしたかといふにさうぢやない。誰れかの世話で醫學校に入學したのも、實は醫者でもやつたら、飯が食へるだらうと位ゐに思つたからで、恐らくは醫者が好きといふ譯ではなかつたらうと考へる。其れから獨逸に衛生學研究に出掛け、歸朝して內務省の衛生局に勤めることになつたのも、石黒といふ世話男に見込まれて誘ひ込まれた爲て、其れが當人の志望であつたとも信じられない。其後境遇が一變して兒玉といふ軍人上りの政治家に關係してから、醫學も衛生學もがらりと止めにして、とう／＼政治家となつて仕舞つた。私はあの人の性格には政治家が一番適當だとは思つて居るが、政治家は少年時代からの目的でなかつた事は確かである。さうすると、あの人は境遇に作られた人で、好運の神に導かれた人といはねばならぬと思ふ。今日では誰れも、あの人を醫學を研究したと信ずるものがない位に政治家になつて了つた。あの人の生ひ立を委しく知つて居る人は格別、若い人は醫者をやつた人と考へぬ程立派な政治家となつた。而かも政治家としても有數の政治家で、滿鐵總裁から終に現內閣の一椅子を得る所まで漕ぎ附けた。これ程好運の人も餘りあるまい。例へば末松謙澄とか加藤高明とかいふ人も好運の人ではあらうが、然しあの人等の好運は、自ら作つた好運のやうに見える。末松は伊藤の婿、加藤は三菱の婿となつたが、彼等は初めから政治界に立たうといふ考があつて、其爲めに此等の人に婿となつたやうな形がある。然し後藤男爵に至つては種々の境遇を轉輾して居る間に、其境遇に導かれて作られてつひ今日までなつた人のやうに私は見て居る。かういふのこそ本當の好運兒と目すべきであらうと思ふ。

後藤男爵を單に非常の好運兒と一口にいつて了へば何だかつまらぬ人のやうに思はるゝが、あの人は自己の頭腦を境遇に適用して行く技能は確かにある人である。どういふ風にして自己の頭腦を境遇に適用して行

くかといふに、あの人は勢力に結び付く秘訣を心得て居る。換言すれば勢力のある先輩の人の鬚の塵を拂ふに長けて居る所がある。現代の流行兒は多くは先輩の鬚の塵を拂ふことをするのであるが、此鬚の塵の拂ひ方には二種あると思ふ。第一種は柔かく出るので、第二種は強く出るのだ。先輩の人は必ずしも柔かく出る人のみを氣に入る譯ではない。柔かく出るといふのはいふまでもなく、チヤラッポコか何かを並べて機嫌をとることであるが、先輩がそれ許りを好きな譯ではない。強く出るのを好きな人も少くない。然し同じ柔かく出るにも強く出るにも何れにも秘訣はある。後藤は強く出る方の秘訣を心得て居る。後藤は大言壯語もする、又豪傑的にもやるが、然し先輩の人物を呑み込みて其人の感情には決して衝突せぬやうに巧みにそれをやる。外に向つてはなか〱放言高論もするが、先輩の人に向つてはなか〱如才なくやつて、當人の弱點を握る事が上手である。後藤は故の兒玉に愛されたが、兒玉といふ人も元來強い人を好きな方であつた。強いというても喧嘩腰では困るが、強く出るにも手管があるので、其れで兒玉の贔負になつた。日清戰爭中、撿疫所の主任者となして一切のことを後藤に任せた。後藤を兒玉に紹介した人は石黑男である。石黑といふ人はなか〱人を見るの明があり、內務省の衞生局に居た時に後藤を知て、兒玉から檢疫事務に適任者がないかといはれた時に後藤を推薦した。其時までは兒玉は全く後藤を知らず、只相馬事件で世間の噂に上つた人だといふ事丈けを知つて居た。然し石黑の推薦ならば取得があるだらうといふので後藤を用ふることにした。處が後藤は元來活動的の人物であるから、事務がなか〱よく擧がつた。て兒玉も面白い人物だといふので、自分が臺灣總督になつた時にあの人を民政長官にした。其後は兒玉を本尊として、兒玉に關係ある山縣系に向て自己の信任を弘める手段をとり、今日では山縣系の有力なる一人となつた。彼が山縣系に取入つたのは、今日山縣系がどの位政治上に勢力あるかを知るの明があつたからである。性格や意見から言つたら

あの人は山縣公よりは寧ろ大隈伯に近い人だらうと思ふ。どこまでも進歩的の人で保守的思想のない人であるから若し思想の通りに働いたら山縣系になる人ではない。然しあの人は事業を好み、實際の仕事をしやうと思ふ人であるから實際の勢力に結び付かねばならぬといふのは、藩閥でもなく、眇たる東北の小藩から出た人故、どうしても藩閥の何れへか結び付かねばならぬ事を知つて居る。さうするには兒玉に知られたのはよい機會で、之れをキッカケに長州派となり、長州派の中でも伊藤よりも山縣に接近するやうになつた。そこで今日では出來得る限り山縣系を利用して自己の勢力を作らうとアセッて居る。又あの人は自己の勢力を發展する爲めには總てを犧牲にする人である。茲に總てを犧牲にするといふ意味は手段方法の如何を選ばずに只目的さへ達すればよい、といふやり方をいふのである。所謂藩閥であらうが、或は富豪であらうが利用し得べきものは、利用するのである。三井なども隨分利用して居る。臺灣に民政長官として仕事をして居た時にも三井、大倉などを利用して居た。其の秘密を素破抜くのは天機を洩らすの恐れがあるから今はいはぬ。又滿洲に居て滿鐵總裁として仕事をするにも第一に資本を要することであるから、資本家と接近するの必要がある。又滿鐵に附帶する事業にも自然の成行に任せればいろ〱山師も來れば又小資本家も來る。それよりも大資本家の力でやらせた方が滿洲經營の爲に都合はよいといふので、三井の勢力を漸次滿洲へ導き入れる方針でやつてゐた。それが爲めに滿洲から歸るものには從分不平もあり、三井に頭を下げなければ仕事は出來ぬといふものもあり、又後藤が日本國民の自由運動を許せば兎も角も、若し三井の事業を發展せしむる爲めに總ての事業を三井に任せるといふ事になれば、滿洲に於ける日本人民の發達が後れるであらうといふ人もあつた位である。あの人のやり方はさういふ風に金持の勢力も利用し得る限りは利用するといふ方針である。又あの人は少し自分の手腕を誇るといふ妙な癖があり、それが爲めに色々な方面に矢鱈に手を延ばす、

例へば軍政の不仕末な事あれば其れに對しても不服を唱へる。尤も軍政については外務省も持て餘して居たものであるが、後藤は之れに口を入れる。又都督府の改正にも手を出す。軍政を民政にすることは外務省も一致した事であらうが、其れが形付けば今度は外務に干渉し出した。林權助が清國駐劄公使を免ぜられたのは後藤の干渉であるか否か明白でないが、然し南滿鐵道會社のやり口。即ち所謂後藤のやり口と林權助のやり口の一致せなかつたのは事實であつて、其結果、林が轉任なつたとすれば後藤が外務に對する壓迫と解しても間違はなかうと思ふ。尤も後藤をしてさういふ風に威張り得るやうにしたのは山縣系に結托したお蔭と見てもよからうが、かくまで山縣系に取入つたのは又後藤の賢い處といふべきであらう。又あの人が自ら清國の西太后と會見するとか、或は袁世凱と會見するとかいふ事を單なる私人的の無意味なものといふ人もあるが決してさうではない。彼が滿洲に於ける仕事の上て對清外交に關係するといふ上から無論一の政治的會見と目すべきものと思ふ。いはゞ、外務省が手ぬるいから己れがやるといふ外務に對する示威的運動である。又今度露西亞に行て皇帝とか外務大臣などゝ會見するといふのも、一會社の總長としては出過ぎたやり方て、わざ〳〵後藤が露西亞まで行く必要はないのである。一寸行て皇帝の顏を見て來るのだといふなら全く無用の事であるし、又日本の露西亞に對する感情を融和するとか日露の交際を圓滿にするとかいふのなら、それは外務省のやる事である。後藤の出づべき幕ではない。けれども後藤は元來自己の手腕を示したい人であるから、そんな事をやつて見るのである。然るに外務が之れに對して奈何ともする能はざるは後藤の地盤が固くなつたからで、あの人も自ら頼む所が出來た爲めにそんな外務を踏み附けたやうな事をするのである、一體あの人は自己の手腕を衒ふ許りでなく總ての事を衒ふ人のやうである。世間ではあの人を豪傑ともいひ又[illegible]爵ともいふ。然し實は豪傑の皮を被ぶつた才子で、なか〳〵細かい頭の人で、拔目なく如才なくやつてゐる。

あの人に表裏のある實例をいへば臺灣の總督をして居た時に自分の屬僚の中で、或殖民に關する新刊の書物を讀んだ人があつて、其書物の話をした、處が後藤がいふには、あの本は已れも讀んだが、何つまらんものだといつた。其れは實際讀まなかつたのだが、さういふ知つた振りをするのである、又あの人はよく人と議論をする。其時相手のものが何處までも屈しないで、後藤が負けると、大きな聲を出して豪傑笑ひをして了ふ。そして他日之を褒め立てゝ自分の部下にするといふやうなやり口の人で、とにかく盛んに嚇かしをやる。あの人の嚇かしを本當にすると必ず其人が失敗する。臺灣で後藤の世話に少しばかりなつたある男が後藤を訪問して少し法螺を吹ひて大言壯語した。處が後藤は貴様は從分法螺吹きだねといつた。此男隙さず、そりや勇將の下弱兵なしてせうとやつた。といふた意味は後節から考へるとおれにお世辭をいたのだと思つて、ムッと怒て、おれは何時法螺を吹いたことがあるかといつた、此男又隙さず、私の親分は早稻田の法螺吹て、私は貴下の子分てはないといふた。當り前の人なら一層怒るだらうが、後藤は唯だ苦が笑ひて御茶を濁したといふ話だ、そんな所はなかく如才ない。又あの人は盛んに人才を登用して居るが、然しあの人の使ふ人才には一種の型がある。あの人は決して大きな人間を使ふ人てはない。あゝいふ豪傑らしい人てあるから大きな人間も使ひさうだが、決してさうてない。軟化し易いとか、慾が深いとか、つまり弱點のある奴を使ふ。一寸見ると清濁併せ呑むといふ人のやうに見ゆるが決してさうでない。成程彼は大酒呑みや放蕩見のやうなものも使ふが、自分の言ひ次第になるものでなければ使はぬ。むづかしい理窟をいふやうな剛直な人は決して使はぬやうだ。今の滿鐵に居る人は多くは弱點のある人間で殊に片々たる才子などが多いやうであある。其點から見てあの人は決して度量の大きい人ではない。自分の意思通りになる人てなければ使はぬやうである。濶達のように見へても疳癖があつて毛嫌らひをする方だ。然し同じ毛嫌らひをしても其れには二種

あつて、理想を持て品行方正の人でなければ氣に喰はぬといふものと、そんな事は頓着なく、寧ろ自己の思ふやうに働く人でなければならぬといふものとある。後藤は即ち後者であつて不正直でも野暮臭くない奴や、輕薄才子の如きものをも使ふが、自己の思ふやうにならぬものは決して使はない。例へば島田などいふは第一種に屬する人で、自己と意見や性質の同じ人でなければ相手にしない人だ。後藤はあれと反對だ。けれど自己の意思に從て動かねばならぬといふ制限はあるので、決して度量のある人のやり口ではない。弱點のある人といふのは決して無能といふ意味ではない。利に渇するとか、名に渇するとか、位置に渇するとかいふ人で、後藤はそういふ人を利用するに妙を得て居る。角張つた八釜し屋は蟲が好かないのだ。利用し得る人を使ふのである。要するに現代の精神をよく理解して巧みに自己の名譽や勢力を博せんとする現代精神の權化と見てよからうと思ふ。

前にもいつた通り後藤といふ人は境遇に作られた人、て、其境遇が自己に順になるに從て乘氣になつて來た人である。元來乘氣になつてやる人はどうかすると失敗することがあるものである。この人は滅多に躓くやうな事はせぬだらうと思ふが、事によると餘り乘氣になつて非常な失敗をせぬとも限らない。あの人は意志も强固でなかなかしつかりした所もあるが、同時に感情の激しい人である。少年時代に艱難辛苦して飄泊した人であるから餘程神經質になつて居る。現に相馬事件の時も俠骨の爲めに錦織に同情を表したやうに見えて居る。それは實際本當かも知れん。或點に於てはあの人は涙脆い人であるから、あれは本當かも知れん、然しあれは全く錦織に喰はされたので、これからはあゝいふ喰はされるやうな事はあるまい。後藤はあの錦織事件の後で、一時勞働問題といふ事を無暗に唱へた事がある。今日あゝいふ風の議論をいへば社會黨といはれて山縣公から排斥されるかも知れん、當時大隈伯は後藤を評して、あの男は社會黨となつて何萬人かを率ゐたら大に活動が出來る。それがあの男に一番似合ふ

といふた事がある。彼れが感情が主となつて動いた時は一寸幡随院長兵衞といふやうな處がある。處が政治家となつてからは、根が悧巧な人だから錬磨されて感情を抑へる力が強くなつた。が萬一或動機によつて、乘氣になつたのが狂ふと、又感情が頭を擡げて來て失敗することもあるだらうと思ふ。元の兒玉といふ人も從分感情の激しい人で弱いものに同情するとか、自分の子分のもの、緣故のあるものを世話した人である。後藤にもさういふ點はないでもないから、其邊も後藤と意氣相投合した原因であらうと思ふ。さういふ人であるから若しあの人が兒玉に知られて山縣系に關係して今日の如き位置を作ることが出來なく、假りに相馬事件以後逆境にばかり居つたとすれば、あの人は恐らくは社會黨らしい運動をする人になつたゞらうと思ふ。あの人はあゝいふ多少義俠的の所もある人であるから、獨逸に留學して居た自分に獨逸の社會運動なんどを見て、興味を以て觀察して來たゞらうと思ふ。順境になつたから今日のやうになつたので、逆境に居たならば或は社會黨見たやうなものになつたかも知れない。境遇に作られた人であるから境遇の順逆によつて大に異る事をする人と思ふ。誰しも多少境遇によつて變化をさせられるが、後藤は其點の殊に著しい人である。又あの人は決して初めから政治的修養を積んだ事のない人だ。若し修養ありとせば、人格上の修養處世上の修養で、政治上の修養はない人である。少年時代には後藤男爵といふ今日の如き位置にならうとは決して彼の頭の中になかつたらうと思ふ。それが境遇が自己に順になるに從て野心が順々に大きくなつたのであつて、初めから政治的野心を以て政治上に名を成した人と典型を異にした人と思ふ。かういふ風になつた人は之を歐洲に尋ねても餘り種類の多くない人と思ふ。然し人格は徹頭徹尾日本的で東洋的である。言ふ事は或は歐洲的かも知れぬが、なすことは總て日本的、東洋的である。

序だからいふがあの人が宴會の席などに行けば必らず後まで殘つて居る人で決して人より先きには歸らな

い。なかく社交には勉める。何時も話の中心點になる人のやうだ。處がなかく人嫌ひのある人て、それを人に見せない所が彼れの利口な所だ。彼は新渡戸などいふ人を尊敬して時々先生などゝいふが、元來新渡戸といふ人は常識に富んて取扱ひ易い人だ。何となく愛嬌のある人だ。窮屈てない人だ。さういふ人なら後藤は親しくする。後藤は磊落らしく大きいやうに見せかけてゐるが。決して磊落でもなく、又大きい人でもないと私は思うて居る。

嗚呼國木田獨步

父母の膝下における獨步

母堂 國木田まさ子

△哲夫の子供の時はやんさんの異名で通つて居ました、やんさんはやんちやさんの略てすが、自分はそれとも知らず、お友達にやんさーんと呼ばれてはあーいと答へて飛び出したものてす、それは三つ位の頃からてすが此一つても並々ならぬ我儘ものなことは分りませう、何しろ父が大相な子煩惱何でもするなり放題て、偶々私どもが叱りでも致さうものなら御目玉は却つて此方へ來るといふ始末の處へ、如何した事か又大層人樣にも可愛がられたものですから、やんちやを言へばやんちやが通る、て何かして欲い時には先づむづかりさへすれば叶ふと心得る事とてもなつたのでせう

△學校の成績は優等て、一度でも賞與を貰はない事は無かつたのです、が品行の方ては遂に一度賞與などの沙汰を受けたことはありません、何しろ前にも申す樣な亂暴もので、喧嘩とあつたら我先にと出しや張る。着物の綻びなどは絕えた事なく、時には地までも切つて來るのですが、何時もこつそり隣の家へ行つて縫つて貰つて來る、地の切れた所へは糸を絡げて貰つて來る、そして申しますには、その儘て家へ戻つては必ず叱られる、所詮知れるにしても翌日頃になつてからならおつ母樣の御怒りも幾干かは和ぐからと、まー此樣な風にはしつこい處があり、此分ならば成年の後には物にも成ろうと賴みに致して居りましたところ、大きくなつて見ますれば思つた程にも行かずに了ひました。

△斯樣な腕白にも似氣なく隨分の臆病者てした、明治九年彼れの六つばかりの時に父が山口の方へ轉任したものてすから、小學時代は山口に居りましたのてすが、當時の住居は屋敷町て、あたりの廣い淋しい處を、夜々五町程隔つた漢學塾へ通はせました、間が原て狐さへあるのですから怖くて堪らぬと見えます、それを色々に賺して遣つて、歸つて來れば何や斯や御馳走を作つて待つことにしたものですから、兎に角參るには

參りました、が怖氣がして堪らぬものですから、湯屋が一軒あるその邊から大聲で「おつ母さん」〃何事かと思ふ樣な聲を立てゝ參るのであります、折々は泊つて翌朝歸る事もありました。

△晢夫は何時も着物の居敷の所を眞赤にして參ります、如何した事かと不審に思ひましたが、或る時招魂社、それは一帶の松山て、その邊まで松露を採りに參りましたら赤土の坂の上に一面の松の折枝、聞いて見れば毎日々々その折枝をお臀に當てゝ、坂を滑り下りるのを戲とするといふのでした。

△釣は子供の時から大の好で、あの御存知の錦帶橋の架つて居る川、それに妙見の瀨と申して亂杙の澤山有るところがあります、學校の戻りに塾へ廻つて、それから歸ると直に竿を持つて駈け出しますが、何時も行揚は妙見の瀨と定まつて居るので、亂杙の上へ上つて靜に糸を下すのであります、お友達と一所に行つたのが御友達は戻つても晢夫は戻らず、早や日暮てあるのに如何した事かとその御友達に尋ねると、晢夫だけは殘つたとの事、矢も楯もなく按じられて迎へに參りますと、平氣で杙の上に立つて居るといふ事もありました。

△釣に行く時には收二を連れて行かねば叱られるものですから餌入を收二に持たして家の前迄は出て參りますが、何しろ晢夫は總領で收二は季、その間の子供は皆早く亡くなつたのですから、年齡は大分違つて居ります、て足手纏ひて五月蠅いのでせう、止められない爲の工夫に連れ出しては見るものゝ、直にそこから餌入を奪ひ取つて一散かけて走り去るのであります、如何も手におひなかつたのであります。

△その後又一家が萩へ移りましたので、晢夫ばかり山口へ殘しました、中學へは高等小學三年からして這入りましたが、その入學試驗の折には麻疹を煩つて居りましたのを、言ひば止められると察して私共に一寸も聞かせず、皆濟ましてから苦いと言つて戻つてまゐりましたが、不思議な事にはそれ丈て、格別重りもせずに全快しました、そして澤山な志願者があつたにも拘らず幸運にも合格致しました、その頃の事です、休暇々々に萩へ戻つて來ては我儘ばかり致して居りましたが、それでも私どもに對して大相なことを聞かせて居りました、「後になつてお覽なさい、お父樣でもお母樣でも此樣な木綿布團の中には寢せず、乘つたら何處かへ落ち込む樣な心地のする、肩までもすつぽり埋まり込む上等な布團にくるまらせて上げる、そして臥ながら上を仰くと天井は總體の硝子張、湛ふる水に金魚の游ぎ群る姿を見せて上げます」と、此樣な呑氣な話を能く致して居たものです。

△十七の年に東京へ參りましたが、父の最初の計畫では大坂の親戚のところへやり、其處で學問をさせる積で御座いましたけれども、當時今井忠治といふ人が東京に居り、勉强は東京に限るといふ樣なことを初中終申して寄越しますので、それに痛く動かされて止めても止まりません、遂秋山といふ友達と一所に上京しましたが、その友達は別れて横須賀の叔父さんの所へ行つて仕舞ひ、晢夫ばかり此地に居りました、幼少の時に田舍へ行つたものですから東京の地理はかいくれ知れず、獨り今井と

いふ人を頼つて牛込の方へ辿り着いたといふ事です。

△父は自身が官吏なものですから彼をも矢張り同じ道にと思つたものですゝて帝國大學へ入れて法學でも修めさせ樣とばかり望んで居ましたので、高等學校へでも志願させ樣と勸めましたのだけれど、我意を以て貫く氣質なのですから其勸にも頓着なく、獨り思ふ仔細あつて早稻田の英語政治科へ入りましたのです、それも亦自分獨り考て見捨てるに至りました。

△子供を敎へることが好きで、その後私どもが麻郷といふ村に居りましたものですから、故郷へ戻つて其處で私塾などを開きました、收二が他の學問が出來ますにも似合はず習字が下手だと申しまして、一月ばかりの間は夜々熱心に敎えてやる、收二はその頃朝早くから一里も先の小學へ通ふのですから餘り長起しては困るのに、肝癪持が躍起となつて世話燒くのだから堪まりせん、見兼れて私が兎や角申し、明朝がつらいから大抵にしてやつて呉れと賴みますと、父がまた、弟の爲を思ふて心配するのに共々勵ましてやらせるこそ本意、それを妨げるものがあるかと申す樣な次第でした。がその爲に收二の手蹟が滅切艶つて、學校の方でも如何して僅かの間に斯樣まで上達したかと敎員が怪みましたといふ事です。

△哲夫が大分へ參りました時、即ち佐伯の塾へ參りました時には能く山野を駈け廻りましたそうて、家からは初中終紺足袋の底を厚く綴したのを贈りました。山口の寄宿舍に居ります頃にも絶えず麥こがしに砂糖とかおかちんとか彼の好むものを贈つてやりましたし、東京へ參りましてからも正月にはおかちんの代といつて特に余計のお金を送りましたし、色々彼の子の爲には私共も心盡しを致したものです、が哲夫は仲々の呑氣もの、佐伯の塾を辭して再び上京致します時など旅費を々々と申しますので私共は心配して送りますと、佐伯の塾生を四人まで誘ひ出して連れてまゐり、暫く一所に生活など致したものです。

早稻田在學時代の獨步

金子筑水

獨步君の早稻田に在學の期間は極めて短いとはいへ、初め英語科に居つたものとすれば級友としての記臆が少し私にも無ければならぬのだが、今靜に當時を回想しても何等の憶ひ出が無い、して見ると之れ亦甚だ短かからうと思ふ、私の頭に在る獨步君は英語政治科生としての獨步君ばかり、從つて勉強の仕振學力の如何等、さる詳細の點に就いては何等の印象の殘らう筈は無い、當時の英語政治科は仲々氣焰家の集團、特に京都の同志社から割れて來た不平黨も尠くない、一般當時の學生の風でもあるが、その徒は孰れも意氣軒昻無暗に痛憤し無暗に慷慨し、盛に時事を談論して倦まぬので、小野、城、津田、大久保湖州(故人)といふが如きが先づその牛耳を執つたもの、全校の勢力を集めて一に政治科に在らしめたかの觀があつた、否、全く左樣であつた、雜誌大陽に居る島谷

部春汀君、同文學院の柏原文太郎君、外交官の信夫淳平君等も同じ級に居たので、銘々自ら任ずるに天才を以てし、尋常の親矩を以て敢て驥足を拘束せらるべからずとするの慨があつたものだ、當時此天才自任連中の手によつて早稲田評論なる小雜誌、勿論印刷に附するではなし、政治、經濟、文學何でも御座れ、論文可なり美文可なり、唯の漫然たる感想錄可なり、銘々思ひ々々に書きなぐり、持ち寄つた原稿を集めて一寸綴ぢたといふ丈のもの、それが彼等に營まれて、別に回覽するといふでもなく唯圖書館の机上に人の持ち行かぬ様紐繫ぎにした儘載づかつて在る、それには隨分各講師連の惡口なども書かれて居たが、更に面白い事には、讀者の批評を歡迎すべく澤山の空白が殘して在るので、誰となく或は露骨に或は婉曲に、人様々の諷刺諧謔と頗る賑はつたものだ、で本文よりは却つて或は此方が振つたかの觀もあつたのだ、それも暫し、僅か五六ヶ月の壽命で果ててしまつた、我々も一味に加はつては居たが、勿論彼等が主腦で唯その慫慂に我々は從つたといふに過ぎぬ、當時の獨歩君の面影を偲(しの)ぶと、ガラ／＼した快活な氣象の中にも、極めて眞摯な誠實の籠つたところが見え、更に何處やら處女のやうな優しい點もあつた、その頃から早や靈性上の問題、即ち神やら實在やら、生死やらの問題に心を潛め、往々話題にも上して居た様に記臆する、で私は冥々の裡に、矢張り同志者邊から割れて來た一塊かとも考へて居た位だ、何しろ前にも言つた、悲歌激越の徒、而かも私や獨歩君等よりは遙に年長の徒が我は顏に振舞つて居た頃だから、短小な、か細い軀幹(からだ)の上にお坊つちやま顏をして居た獨歩君の事とて、迚も一つ席に罷り出て舌鋒を鬪はすなどいふ段には行かぬ、勿論默つて居る方ではない、何かにちよつ々々と口を附けるが、附けると「何だ青二才が貴様等の出る幕じや無い」とばかり、無下に小僧つ子扱ひに斥けられるので、鼻端(はなつぱし)は強い様でも割合に脆いは當時の君であつた、滿面忽ち紅を潮してそつと引き下るが常であつた、文學は最初から好むところであつたらしい、我々の科へちよい々々竊み聽に來たことも記臆して居る、が文名などが當時の級中に在つた譯でも何でもなく、又自ら文藝の徒を以て任じて居なかつたものだ、そんな彫蟲の技には決して耽つて居たものではなかつた、獨歩君をして筆に專念せしむるに至つたのは偏に後年の轗軻落魄備さに浮世の辛酸を味つてからの、境遇の轉變從つて心機の轉變に依る事と思ふ、が既に當時に文章を志さしめたならば、或は文壇の巨匠たる紅露逍鷗等の鑄型の中に嵌まつて仕まつたも知れぬものを、左様でなかつた事が何ものにも捉はれずに、後日直に自家の天眞を流露して別に一地歩を文壇に占め得るの素を爲したことゝ思ふ。幾干も無く天才肌連はその天才肌の爲に安住することが出來ず、早稲田を去つてしまつたが、獨歩君も同くその徒に動かされてか、學業半ばに學校を見棄てゝ爾來南船北馬の活社會の人となつてしまつた、私は獨歩君と語り合つた事もあるが、淡い交で終始したのだ、思へば僕の持つて居た杜翁のアンナカレニナは、大久保(湖州)君の手を經て獨歩君の手に移つたまゝ遂に今日までそれなりけりになつてしまつて居る、考へ付かずに居たが今思へば左様(かう)なのだつた、(座談筆記)。

手柬に現はれたる獨歩

金子筑水氏の談話中に見えし大久保湖州氏に宛てたる手柬にて封筒のスタンプには明治二十六年七月廿五日とある故早稻田退學以後再び上京して將に佐伯に趣かんとするに先つこと少時のものなるべし．文中金子氏とあるは金子筑水氏に疑なく、德富とあるは德富蘇峰氏なるべしとは予の想像なり（S生）

炎暑益々猛烈大兄其後御變も御座なく候や御見舞申上候生相變らす活潑潑地宇宙のエナルジーを呼吸罷在り候間御安心被下度候蒼天、白雲、綠葉、朝光、夕陽、皎月、星夜、凉風、實に夏は愉快の時候に候都會紅塵の裡に在りてすら此の如し湖邦の盛夏は又た格別のものならんと羨ましく候〇本月十日御認めの御手紙有難く拜讀仕候猶時々大兄獨占の湖邊の風光續々御讀ませ被下度候先達の手紙を讀みて僕一句あり。

わが宿は星滿つ夜（よる）の琵琶湖かな

僕か寓所の窓より滿天の星影輝きたるを望み且つ遠く湖上の夜を想ふ時は心耳遙かに磯打つ波の音を聞くの思、眼底直ちに星空垂れて水面に連るの想ありとの意に候

十六日の朝中桐確太郎氏を上野停車場に送り候得しより交友の間一層寂寥に相成候水谷氏も近々歸國の途に就かるゝ筈に候天或は僕に孤獨沈思の境を與へて大に得る處あらしむる者と被察候

先達金子氏を訪ひ候金子氏よりも先達來訪ありカント、ヘーゲルにて半日を面白く送り申候十八日の夜は吾同學の友なりし御存知の五島盛主子爵より卒業祝宴の招待を受け參り候此座に英語政治卒業の面々あり飲むやら舞ふやら踊るやら大騷ぎにて有之候彼等半は斷散致居候以て柏原等の怒化の空なりしを想像致され候〇大阪の方色々御面倒被下難有存候此方にては未だ何の事も御座なく實は心配を致し居候德富方とても十分當にはならず僕も默して待つより外なしとあきらめ居候但し大兄も何卒御心當りを御盡力願候〇「磯打つ浪」の仕事此の炎暑にては隨分御大儀の事と存候怡々如たり而も凛々乎たり而して孜々の御說、妙は則ち妙なれども之れを十分實行の上に現はすは心に充分の修養なかるべからずと存候此の如きは嬌めて到らるゝ者に非ず神會默契する處あり期せずして此境に到る事は乍失禮御互に今暫くの修養を要する事と存候僕が本年二月三日の欺かざるの記に之れあり曰く「幽に哀み、强く樂み、硬く行ひ、休まず勉め徐に急き以て天命を終らん乎」云々、されど要するに之れ一句の言葉に過ぎざりし事を今は悟り居候人間自然の境に達するは實に容易の事に非すと實驗致候〇神は人間を愛し給へども人間常に神より離れんとす哀哉〇世人動もすれは人間の精神的不滿足の情を歎くるなく限りなきを云ふ余は滔々たる人間餘りにあきらめよきに愕く⦿エマルソン曰く詩人は自由なり故に自由を造ると眞なる哉千百㑹ならざる人生の牢獄の裡に在りて天空唯一の自由を感得する者は幸哉〇凡百の熱情の裡に一片の氷心を寓し得る者は幸哉〇混淪たる人生の變轉逢遇の際に一貫直往の「シンシリテイ」を失はざる者は羨む可き哉眞にほむべき哉〇人間惡にあら

されば賢〇泣かんか笑はん乎笑はん乎叫ばんか心底一塊の血涙凝るあり高雲動ざるを仰ぐ時は魂飛ばんと欲し暗愁潮の如く寄せ來る時は胸裂けんとす狂乎眞乎、眞乎狂乎僕實に自ら知らず

　翩留る栅そなき泪川いかにながるゝ浮身なるらん

七月二十五日朝認む　　　　鐡斧生

大久保湖州大兄

　机下

民友社時代の獨歩

徳富蘇峯

始めて國木君と逢つたのは二十五年頃と思ふ、丁度其の頃國木田君は東京に來て早稲田の專門學校に勉強中、私の許の門人達も大勢通學して居つたのと懇意になつて、度々氷川の邸へ遊びに來る樣になつた。

其頃から年配に不相應な老けた意見が――老成とでも云ふべき思想を仄めかして何事に依らず大きな事を云つて居たが、私は大變面白い男と思つて普通の人以上に念を入れて談じて見た、吉田松陰やグラッドストンに關することや、其他文學に政事に甚だ趣味深い談話を交換した、之が交際の始てあつたのだ。

其から國民新聞記者となつて千代田艦に乘組む以前、さうか確三十六年の事て、矢野樣が郷里佐伯の學校に教師が欲しいが適當な人材はあるまいかとの話て、私は不取敢國木田君を推薦した。當時は渠も眞の若輩で果して教師として什麼てあらうかとの杞憂もあつたが、斷然佐伯行をすゝめた動機は、只國木田君を東京に置きたくない、黄塵萬丈の都を去つて田舍て靜かに勉強させた方が將來發展の要素を作るに必要と思つたからてあつた。

果せるかな之が非常に藥になつた、佐伯に於ける一ヶ年の修養は後年獨歩の名を文壇に高らしむる基礎を作つた大切な時代て、御承知の通り佐伯には山もある、海もある、自然の感化を受くるには尤も適當な住い所なので、國木田君は教鞭を執る傍山と海とに親しみ、世間の煩さい事を忘れて心ゆくばかり修養をした、其頃屢々私の處へ寄來した書翰は實に美事なもので密かに天下の奇才として感服して居つた、恐らく渠が生涯に於ける文藝作品のうちでもこの書翰は有數の佳篇として珍重する價値は充分あつたらうと信じて居るが、保存して置かなかつたのを今になつて殘念に思ふ。

其うちに丁度日清戰爭の火蓋が切れて、現時日本銀行に居る深井英五君と私と廣島まで大本營に從つて　陛下のお供をする少し前、二十七年の九月十日過ぎに國木田君が飄然と上京して社へやつて來たので――其頃から渠は社員同樣に考へて居るし私の方も隔てなく交際して居つた――深井君と三人て南鍋町の三橋亭で食事をした時、其なら僕も從軍しやうと云ふので、早速國民新聞記者として軍艦千代田へ乘組む手筈になつ

た。所が艦長の内田正敏氏が一方ならず可愛がつて何かと特別な便宜を與へて呉れたさうて、「愛弟通信」は當時紙上の異彩として歡迎されたものだ、國木田君が初陣の功名は實にこの「愛弟通信」によつて知られたのである。

一體運事通信の總てが無味乾燥な舊套を脱し得なかつた裡に、獨り國木田君は令弟收二君に送る書翰文體の形式をもつて刻々の報道を續けたので、兄は千里の波に浮んで戰艦に搭じ、弟は吾社に停つて興味ある通信を受けた。收二君は十八位てあつたらうか、幾分私も力になつて同じく專門校へ通はせて置いた事もあつた。兎に角「愛弟通信」は評判もよし亦作傑でもあつた。

序だからお話するが、總て戰局も終を告げ國木田君は目出度く凱旋した。すると私の友人て三田四國町に住んて居た佐々城豐壽と云ふ女傑が凱旋のお祝に國民新聞から從軍した記者諸君を招待して一夕の宴を張つた事がある、無論國木田君も招かれて行つた。いろ〱御馳走があつて私も興に乘じて詩を書いたり何かして居ると、佐々城の娘て信子と云ふのが切りと斡旋に努めて、「雪の進軍」とか其他二三の唱歌を唄つた、これが非常に國木田君にインプレッションを與へたと見えて、遂に戀の病におちた。――尤も私はずつと後ど知つたのだ。

其後國木田君の樣子ががらりと變つて、民友社の編輯も校正も手につかない、非常に間違ふ。宛然人が二人になつた樣て以前の國木田君の仕事とは受取れない、其處て私も什麼も變だと注意して訊てみると。切りに三田へ往來して居るとの事にさてはと驚いたが、戀に囚はれた二人は何時か夫婦約束まで出來て了つた。雖然信子の母が承知しない、密かに信子に配すべき人が極つてゐたさうて絕對的に不同意を言張る、娘の方ても言張る、國木田君も亦絕對的に約束履行を主張する、一時非常に大問題となつたが結局佐々城の友人て潮田千勢子と云ふ人が仲に入つて、不承〱に佐々城を納得させ結婚を許す事に迄話が運んだ。

其處て潮田夫人と竹越三叉君と植村正久君と私とが列して、新楠本男爵邸前の長屋の樣な家て結婚式を擧げて一段落は着いたが、其ても佐々城は兩人を東京に置く事は成らんと云ふので、若夫婦は手鍋をさげて逗子へ赴いた。其頃逗子には未だ私の邸が出來なかつたので、父や母は或家の一部を借りて靜養して居られた、處へ國木田夫婦は私の兩親の借りてゐる其亦一部へ置いて貰ふ事になり、襖一重を隔てゝ私の父や母と共に生活して居た。程なく佐々城の心が解けて東京へ歸る樣になつたが、二十九年の春花見時分に夫婦と收二君と連立つて花見に行つた歸途に、用事があるから外へ廻ると云つて女は獨り姿を匿して了つた。丁度私は病氣て疲てゐると此知らせがあつたので、甚だ怪しからんと心當りを探し見ると、佐々城と親しく交際して居た築地の浦島病院へ逃げて行つてゐる事が分つたけれど、什麼しても死んでも國木田君の處へ歸らぬと強情を張り通す、僅か半年前には親に反いて自分から進んで結婚したものかち、恁う云ふ意外な言葉を聽いて驚いたが、這般の消息は私にはよく分らずに濟んで了つた、致し方が無い話てある。

其以來國木田君が女に對する考が一變したと噂するものも有つたが、少なくとも渠の生涯(ライフ)に於ける事件(エピソード)で爾來この波動を受けた影響が各方面に現はれて居たらしく思はれる。

ざつと這麼話であるが、この事件？の經過を熟く知つて居らぬと、國木田君の作品に接する場合にも興味が少なからうと思ふ。雖然この不幸？も或は却つて文學者としての立脚地から見れば僥倖であつたかも知れない。國木田君の苦い經驗は必らず多くの讀者に向つて無形の教訓を與へたものが有らうと考へられる。

私は小説の事は委しく知らないが、一番好きなのは佐伯時代に寄來した書翰、次に「愛弟通信」、で武藏野の評判も聞いて居た。

私が最後に國木田と逢つたのは一昨年の冬で、收二君と二人私の邸へ呼んで晩餐を共にした時であつた。其頃は既に獨步の名が文壇に知れて居たのだが、私は國木田君に怎う云ふ忠告をした。

「お前さんは何處までも短篇が豪いのだ、成るべく錬つて尠く作つて年に一篇か二篇會心の作を發表しなさい、然うしたら屹度佳いものが出來るだらう。毎日、新聞へ載せる樣なものを書くのは天品の眞を滅ぼすものだ……お前さんは事業家ぢや無い、算盤をもつて仕事にあくせくするのは間違ひだ、止した方が宜からう」。

之が最後の忠告(アドバイス)であつた。實際は獨步社が瓦解したと聞いて竊かに欣んで居た、其は決して事業の失敗を意味するので無く、この失敗の爲に國木田君が町人、仕事師となりさがらずに、自己の天職によつて身を立てる事が出來る時の來たのを欣んだので、更に

「お前さんは薙刀を使ふ人ぢやない、九寸五分の短刀を縱横自在に使ふ可き人だ、彼の李長吉が旅中錦嚢に句を盛るの心懸と、背を刻み肝を彫るの用意とを忘れてはいけない、濫作は尤も愼むべきである」。

と切實に忠告した。此事は餘程感じたと見えて、友人にも國木田君が話して居たさうである。

懷かしき友獨步

齋藤弔花

（お互の放浪時代）

「病牀錄」の中に「余は不遇ならざりし」といふ一項がある。其中に

「余の細君は極めて余に忠實なり。什麼なる窮境に處してもツイゾ一度も愚痴がましき事を並べて余を惱ませし事なし。金錢はそこらの戸棚を探せば、出る位思ひ居たり。

「余には父あり、母あり。父は極めて暢氣濶達の人にして、余を信ずること篤く、而してまた貧乏にて平氣なる人なりき。霞ケ岡の窮迫時代清める酒よりドブロクが遙かに旨い。と眞底から喜んでドブロクばかり飮んでくれた人なり。

母は直情徑行の人、余を盲愛する外何事もなし。

弟收二は悌弟なり。余の爲めとならば、身命も辭せじ。」

余はこの一節を讀んで、實に無限の感慨に打たれた。余は獨歩君を中心としてこれ等周圍の人々と懇意以上の交際をして居たが、他人が讀んで左程にもあるまじきこの一節が、深く余の感情を搖かした。

獨歩君を思ふと共に其項中に書かれてある人々は余の眼に明白と浮ぶ。殊に嚴父君の面影は刻むが如く深く余の腦裏に印象されて居る。

この頃品川を通つた。天氣の可い日で、女郎屋町の外に夕日が火のやうに輝いて居た。湯屋の隣に穢い蕎麥屋がある。その表に子供を負ぶつた老人が立つて居た、不圖七年前の記憶を喚び起した。此家に一度此時刻に、國木田の老人と空腹を抱へて飛び込んだ事があつた。空ッ風がビユー／＼と品川沖から吹いて、二月の雪催の空を一日歩き廻つて、御殿山から彼方此方と家を探し歩いた歸途、何か喰はうと老人が先に立つて、此處の上り框に腰をかけて、僕はうどんのかけを取ると「大阪の人には蕎麥の味は解らないか喃」と云つて老人は笊蕎麥を二個平げて一本の徳利を二人で明けた。老人は剝げた怪しい衣服を被て、鼠茶色の毛糸の首卷を卷て居られた。宅に居るときも、この頸卷は離したことがない。無口ではあるが、樂天家だから、物に拘らぬ話し振が。此方も暢氣宗の開山だけに非常に面白く聞かれて、二人の暢氣黨は、蕎麥屋で一時間位はチビリ／＼とやつて、老人も非常に醉ひ、此方も苦しい程廻つて、フラリと此家を出た時は、巷には灯が入つて居た。中々達者で、杖も持たない。中差下駄をコツリ／＼と先に立つて歩かれる。腹が太いから歩く方が可い。といはれたを無理に車に乘て札の辻で別れたことがあつた。その時

余は何とも云へぬ感じがして、暫らく路傍に佇んで、老人の車を見送つて居たが、胸が塞つて泣きたくなつた。

其時余は國木田家に寄寓して居た（氷川町の宅に）當時の窮境は甚しかつた。獨歩君の文章の價値は少しも世間から認められず、金の入る處がない。「一體何方へ轉ぶのか。東とか、西とか運命の岐路に石でも立てゝ置け」と獨歩君は焦れ氣味で云つた、「盲進だ。手近から引蒐つて見る事だ。」と云つたことも聞いた。處が今大阪に賢部なして居る高野犧といふ人が雜誌を出す金主は田舍の金持、賣捌所は神田の上田屋。一つ大袈裟にやらうぢやないか。と吹いたので、余等も乘氣になつた。まづ今の處は狹いから。といふので十八圓止りで家を品川近處で探すことに成つた。その頃の事だから實は吞氣な余等と雖も多少心細い。雜誌を企てやうなといふ時は碌な時ではない。若い者は可いが、あの老人は何と思つてあの車に搖られて居られるだらう。と思ふと、氣の毒に成つたのである。テクツて歸つて見ると老人は老人で又余の事を心配して居られ、膳の前に兀然として、余を待つてくれられて。獨歩君も飯を食はず、余が歸つて來たので一緒に盃を上げた。老人は例のドブ公を旨さうに飮れる「一盃何うか」「私は眞平」と獨歩君と二人で濟まないが澄んだ奴を飮む。前に老人に勸められてドブ盃を上げたが、餘り旨くなかつた。今獨歩君の談話にドブの事か書いてあるを讀んで、余は實にこの親父君の躬さが思はれる。

二三盃やると余は眞赤になる。その頃獨歩君と二人で二合壜一本と定

って居て、毎夜獨酌して、醉ふて余は臺所を滑出て、椽側の籐椅子に寢轉ぶ少し醒めたら歩かうと獨歩君が無理に余を引張り出して、氷川町から田町に居た高野君の宅へよく出掛けた。その途中
「僕の父は聰揚寛濶、流通の才がある。此點に於て弟の收二は父子といふ方だ、僕は母に肖てゐる。母は直情徑行、自からを枉け得ない人だ。とよく云つて居た。弟收二君は大自慢の弟て、何かの端には收二々々といふ。

　何時か一緒に酒を飲んだ時「收二が居ればなア」と沁々言つた「僕は弟の會といふものを催して兄さん株は後見といふ顏で甘く飲んで見たいれ。松岡君の弟は海軍兵學校の俊才、本年銀時計の連中だ。僕の收二だつてまア俊才として恥かしからぬ人物だ。角田君も弟があつた。迂濶すると弟株の方が豪くつて、兄貴は愚兄て凹まされるのかも知れん」と云つて大に笑つた。がこゝに一つ令弟に就て奇談がある。さうは言つてゐるものゝ文學は勿論俺が兄貴だ。收二などが威張つても駄目だ、人物も俺が豪からう。(と云つて收二が駄目といふのではない)と例の氣焔てあつた處が、一朝、僕の處へやつて來て「これを見ろ。人を馬鹿にしてやアがる、吾輩はこれから萬朝報の黑岩に談判して來る。生意氣だ。と怫々してゐる。見ると新聞記者の評論があつて、收二君の事を書いてある中に「すべての點に於て弟收二氏は兄の獨歩以上てある。」といふ風なことが書いてあつた、「第一、年が俺に及ぶまい。兄と弟とは權威に於て俺が上だ。况んや……、」と腕白な兄さんを露骨に出して「抑も人物評論などが癪に觸る。兄を引合に出して弟が豪い。とは何の事だ。」と眞劍なのには驚いた。自信と自尊心とは獨歩君の尊重すべき一の性格を作つてゐた「文庫」といふ雜誌に十年後の文士とかいふ題て獨歩君の事を書いて「國木田獨歩は不相變テク／＼歩きの連中だとか何とか書いてあつた。この時も非常に憤つて「何だ、小憎つこの癖に生意氣だ。憚りながら文學などこの手合が解るものか。十年後にテク／＼が何うした。この六號文字といふ奴ア氣に喰はん。テク／＼ても何ても勝手にしろ。」と憤慨した事があつた。

　その頃高野君と謀つて靑年評論といふ雜誌を出し、後ワルズワースの詩集の評釋などを書いた。その殘本は誰も持つて居らぬ。上田屋になほあれば一遍見たいと思ふ。獨歩君は事業に忠實な人てある。とその頃余は敬服した。余は當時文學者に成らうなどとは夢にも思つて居ない。新聞社ても三面記者などは人間のする仕事てない。と思つてゐた頃だから、實は「靑年評論」の校正などに行くのも、獨歩君にお義理のつもりて、二人てよく出掛けたが、その頃馬車賃にも差支ひてゐた時分だから、二人共大抵赤坂からテクッた「君は威張つても我黨は矢張テク黨だ。」といふと「ナニ、今に馬車に乘ア」と云つて、歸りに萬世橋から「さア。馬車だ。」と笑つて鐵道馬車に乘つて歸る時などは、君はそつと余の肩を叩いて「この馬車は情ないなア」と苦笑した。後西園寺侯の宅に寄寓した頃、「どうだ君、侯に云つて馬車を貸りて乘らうや。まづ第一、田村三を驚かさう。どうだ田公は、不相變新聞屋か、てなことを俺がいふから笑つちやア不

可よ」など、洒落て、門に居た巡査に笑はれた、「馬車に乘れる身分になると乘たくないね、あへ、、、。」併し考へて見るとこれも借馬車だから、餘り標榜が善くない。」と云つたら、茶を持つて來てくれた女中は噴飯た。

今にして思ふと、「其の頃は實になつかしい。」余と獨歩君とは、氷川町で半年一緒に暮し、後赤坂新町に轉居してまた離れず、君が駿河臺へ行くといふから、僕も行くといつて、近所の下宿屋井田といふ家へ陣を構へた。金が入らないから、井田の内儀さんといふ厭に血の氣のない冷やか相な人相の人に冷遇された。其様な事は平氣だつたが、人の來た時、不愛想だつたので癪に障ると、折から來合した獨歩君は「ナニこんな百姓の家に居ないでも可い、俺が侯に云ふから一緒にならう。西園寺侯は君等の思ふやうな偏狹な人物ぢやない。」と云つて頻りに勸めた。余は冷淡に聞いて居ると「張合がないなア。」と獨りで嘆息してゐたことがある。到頭やり切れなくなつて、國木田君の蒲團も火鉢も大事にしてゐた机も打つちやらかして飛出した。その中に「欺かざる記」もあつた。鎌倉へ落城の一日前、獨歩君曰く机と「欺かざる記」丈けは、殉難さしたくない。あの机には云はれぬ歴史が附いてゐるし、「欺かざる記」は人に見られると困るから。と云つて其夜自分で談判に出かけて、「欺かざる記」を懐にして新石町の余の隱れ家へ來た「机は什麼した」と訊くと「小川町まで持つて來たが、いかにも體裁が惡いので賣つて了つた。」とケロリとしてゐた。二年後、余東京に飽て田舍に行かんとし、書物や、蒲團の事を氣にして、井田方へ行くと、一月程前、或男（瞭と名を逸す）が余と國木田の添書（勿論僞造）を以つて來て金を十圓置いてすつかり持つて行かれたといふ。其の手蹟から見當をつけて、其宿を訪ふたが引越して解らなかつた。その事を云つて國木田君に詫びると「勿論沈沒品は上つたところで舊の物ぢやない。」と云つて少しも咎まなかつた。余は今日までこの事を思ひ出す度びに心のない事をした。と衷心慚愧の情に堪へぬ。

鎌倉へ行つてからは比較的呑氣であつた。食物はヘッドに牛肉これは國木田君が主張て、三度三度のお菜、其の如く平凡に暮らしたが、當時余の好きな老人は蓮池の別莊に來られて、貞ちやんの手を引いては、權五郎前の菓子屋へお間食を買ひに行き貞坊の喜ぶのを見て、子供のやうな顏をして、鳥居の石燈の横に老人と子供は對座して、樂し相に話をしてゐられたのが眼に見えるやうだ。

三年に亘るこの窮居時代にありて獨歩君の夫人は「病牀錄」にある通り極めて忠實な主婦であつた。獨歩君本人も至つて親切な主人であつた。虚名を求むるに汲々たるが如き樣子は少しもなく、超然として所信を守つて居たその容子が余の第一に尊しと思ふ所である。大抵の場合貧乏中の人と交はると、一種の不快の感が起るものである、が互の貧乏の中には、常に愛情と同情とが溢れてゐた。

余は實際その頃非常に寂しい。近頃は忙しいので餘り往來もしなかつたが大久保には獨歩君が居る。茅ヶ崎には國木田君が居る。と思つて丈夫であつたが、余を庇つてくれた大木がポクリと挫けたので其の點で は人に云はれぬ程である。

不遇時代の獨歩君

原田秋浦

獨歩君の晩年は兎に角、その生涯を通じて言ふと、獨歩君は實に不遇の人であつた。

不遇必らずしも境遇を言ふのではない、要するに、氏はその作物に於て永く不遇の人であつた。

獨歩君の名は武藏野の一篇に依つて、僕が未だ學校時代の昔から知つて居た、親しく接したのは、民聲新報の編輯局に机を列べてからであるが、當時、獨歩君の机上には武藏野と題して、獨歩吟客の名を著した大部の原稿があつた、聞けば、嘗つて國民の友に載せられた武藏野の一篇を卷頭に、他は種々なる雜誌に掲載した短篇ものを集めてそれを書き直したものである、獨歩君はそれを示して、近々民友社から出版するが、出來たら讀んで呉れたまへと言つて、體裁や何かに就て相談をかけて居た。

出來上つて一部を送られた、實は、卷頭の武藏野一篇は嘗つて讀みは讀んだもの〻、未だ當時の僕にはその深遠なる趣味を深く解するだけの力がなかつたので、この時更めて全篇を通讀したが、中にも、武藏野の如き、忘れ得ぬ人々の如きは、神韻漂渺、讀むに從つて言ふべからざる妙味を感じたのである、茲に於てか、僕は幼稚なその頃の文壇に於て、獨り、超然としてその特殊の趣味と思想と筆とを有する氏の大なる天才には、眞實敬服した、敬服といふよりは寧ろ崇拜した。

が、武藏野出でしと雖も世間からは何等の反響もなかつたのである。

尤も、俗惡なる寫實派の作物のみ悦ばれた淺薄なる當時の讀書界に於て、幽趣、崇高、凡庸の頭には解す可らざる氏の作物の如きが到底歡迎さるべき筈もないが、而も、一部の作家を除いて、他の多くの作家や、乃至は、氣焔徒らに高き世の批評家連が、讀んで悦ばず、默して顧みざりしには、僕はそれ等の連中の眼識を常に疑つて居た。

尤も、獨歩君は世の所謂小說家ではない、要するに詩人なのだ、小說は書くと言つてもその小說は小說に非ずして詩なのである、小說と詩……この區別を解するものに非ざれば第一獨歩君の小說を讀む資格がない、而も、多くの作家や批評家連さへ、この區別を解するや否やを疑ふ程なのだから、幼稚な讀書界に於て氏の作物が歡迎されなかつたのも思へば不思議でも何んでもない。

既に、この時代に於て獨歩君は不遇であつた、更らに、民聲新報の運命が甚だ短かかりしと共に、當時編輯長たりし獨歩君の運命も從つて短かかつた、要するに、氏はその作物に於て甚だ不遇なりしと同時に、その境遇に於ても不遇の人となつた。

民聲の沒落後は、氏は赤坂氷川町の寓居に暫く潛んで、專心筆を執つて居た、この時代に於て氏に大なる產物がある、そは、獨歩君の作物中、最大傑作として知られて居る、牛肉と馬鈴薯が即ち之れだ、この一篇は大阪の小天地に載せられたもので、氏自身も非常に得意であつたが、而も、之れさへ僅かに一部の小數作家に認められた外には他に何等の反響

もなかつたのである、之れには獨歩君も稍々意外であつたかして、今の文壇の奴等に何が分るもんか、と言つて少なからず憤慨して居た、が、憤慨はして居たもの丶併し獨歩君は悄氣る男ではない、相不變孜々として書いて居た、偶々僕が遊びに往つた時にも、机に對つて切りに筆を動かして居たが、之れは新小說へ遣るのだと言つて、約七十枚ばかりのもの、題は未定であつたが恰度脫稿する所で、之れが濟んだら田舍へ往きたいなど言つて居た、それかあらぬか、越えて三十四年の二月、獨歩君は鎌倉へ隱遁した。

過去前半世に於ける獨歩君の境遇は多く不遇であつたと聞いて居た、が、この鎌倉時代に於ける獨歩君の境遇こそ、尤も永き不遇の時代であつたらうと思ふ、この尤も永き不遇の時代に於て、僕は獨歩君と又永く一ツ家に起臥寢食を共にして居たのである、この間の消息は別に趣味の方に詳しく書いたから、玆には省くとして、兎に角その頃の生活を、それからそれと思ひ起せば、逝ける大なる文豪、國木田獨歩の面影を傳ふべきこと殆んど枚擧に暇ない。

文壇には多く容れられず、境遇に於ても又甚だ意の如くならざりし獨歩君は、玆に鎌倉に隱遁して、放浪の生活を送つたのだが、而もこの放浪時代に於て、氏は尤も作物に忠實であつた、從つて多くの傑作を出した、但し、放浪と言つても流離轉々して居たのではない、最初は櫨五郎神社の境内に浪宅を構へて、僕に獨歩君、それに、齋藤弔花君を併せて都合三人、言はゞ、落武者の浪人共が寄り集つて梁山伯氣取りて居たのである、が、梁山伯時代は甚だ短かかつた、櫨五郎祠前を引き拂つて長谷の池別莊へ轉ずると共に、弔花君は去つて金港堂へ入社したので、後には獨歩君と僕、用もないたゞ廣い家に、小さな二ツの身體を容れて寂しく暮して居た。

試みに當時の生活を言ふと、家は廣いが中には何物もない、附き物の長火鉢一個と炊事道具が稍々揃つて居たばかり、偶々來客があつても肝腎の德利盃がない、人數の多い時にはビールの壜で燗をして、茶飲み茶椀で仰る、之れが梁山伯時代からの慣習であつたが、而もこの時には女中を賴んでも來てくれるものがない、止むなく獨歩君と炊事の勞まで取り合つて居た、仕事をするにも第一机がない、僅かに少さなチヤブ臺が一個あつたのを間に合せの机に、二人がそれに向ひ合つて窮屈な思ひをして居た位、思へば不便不自由でもあつたが併し言ふ可らざる愉快もあつた、仕事に倦めば散歩をする、散歩が厭になれば對酌する、そして、獨歩一流の快辯を以つて寂しい家を賑はして居た、賑はしたと言へば語弊がある、時には賑はすこともあるが實は寂寞を癒して居た。

實際、獨歩君の辯舌と言へば、恰もその文その想が古今獨歩であつた如く、その辯も實に獨歩であつた、世には話上手は如何程もある、辯舌家は如何程もある、が、要するにそれ等は單に上手といふに過ぎぬ、饒舌るといふに過ぎぬ、獨り獨歩君の辯に至つては、上手と言つても平凡ではない、流暢と言つても饒舌ではない、諄々として語る中には趣味がある、警句がある、人を魅する力がある、そして、千言萬語を費して

も秩序整然として一絲亂れないのだから、之を公衆の前にしては立派な演說となり、之を筆にしては立派な小說となる、眞に得難きの辯才であつた。

この辯を以つて、獨歩君は常に好んで語つて居たのだから、寂寞と言つても絕えて寂寞を感じなかつた、如何に語り續けたとても絕えて倦むことを知らなかつた、殊に、勇ましい氏の失戀の歷史や、その結果北海道へ走つて寂寞の生活を送つたことや、乃至は、曾つて艦隊へ乘り込んで從軍した當時のことや、或は少年時代の忘れ難き記憶、又は嬉しかりしこと悲しかりしことのそれや之れやを、興に乘じて徐ろに語られる時には、その光景眞に目前に髣髴として、時には泣かされたこともある、時には腕を扼させられたこともある、そして、不遇失意の歲月をのみ送つて居た僕の如きは、常に氏の談話に依つて大なる慰藉と大なる刺戟とを與へられて居た。

啻に、氏の談話は對座の時ばかりではない、寧ろ連れ立つて散歩をする時など、却つて興ある談話を聞かされた、山を見れば山に就ての感興を述べ、水を見れば水に就ての趣味を語る、要するに、眼に映ずる凡てのもの、耳に聞ゆる凡てのものは、悉く氏の詩的な頭に解釋されて、即座に一篇の舒情詩を聞かされるのだ。

が、氏は山よりも多く水を好んで居た、山には變化がなく、水には始終變化がある、といふのが氏の持論で、それに反對して山を好む僕は、散歩の折など常に衝突して居た、確か、田山花袋君の來た時かと思ふ、三人連れ立つて山へ遊びに往つたことがある、その時にも山と水との議論が出たが、田山君も矢張り山說であつたので、さすがの獨歩君も頭を掻きながら遂に默したのは聊か滑稽であつた。

その後、屢々携へて山へ往つた、何時であつたか、途を踏み迷ふて名も知れぬ山の絕巓へ上つたことがある、その時には、空は碧く澄んで居て、富士は勿論、箱根足柄の連山遠く續いて、大磯小田原の海岸は女波男波の狂ふ態さへ見えて居た、谿には樹木がこんもりと繁つて、鳥は微かに啼いて居る、絕景眞に言ふばかりもなかつたのだが、獨歩君はこの幽寂なる境に立つて、暫く空を仰ぎ、谿を瞰下して居たかと思ふと、僕はこんな所に永く堪へん、泣きたくなる、と言つてそこ〳〵に下りながら、矢張り海々と叫んで居た。

その癖、海に對しても時としてはかくの如き悲哀の感を抱いて居た、時は秋の始めの麗かなる日で、例に依つて由井ヶ濱邊を逍遙して居ると、談話に紛れて何時か逗子街道の小坪へ出た、其處には入江があつて、波もなければ底も淺く、水は美しく澄んで藻までが見え透えて居る、その、ゆつたりとした長閑な水面を見詰めて、斯う長閑でも寂寞だ、と言つて愁然としたことがある、而も、この時の感想は餘程深かつたと見えて、獨歩集中に在る第三者の主人公夫婦を殺した場所は、實に其處を描いたのだが、兎に角、氏の頭は何物に觸れても強く銳く感ずると共に、その觀察は決して無意味でない、偶々百舌鳥が啼いて居た、いよ〳〵秋が來たよ、と言つて耳を澄す、山の麓に若い男女が耕して居た、人生は彼れだ、と言

つて見惚れる、車の轍て迄が凹んで居る、其處を見詰めて何事か考ひ込む、要するに、氏は何處までも詩人であつたので、常に、自然の偉大なることや、人生の無窮なるとを深く觀じて居た。

尚ほ、地方面に就て言へば、氏の女子禽獸論などは有名なもので、僕などは屢々聞かされた、而もその頃には、餘りに不便不自由なので氏の家族を迎へて居たが、氏は妻君の前でも遠慮なく言つて、盛んに罵倒したものだ、今の僕なら進んで男女禽獸論まで唱へたい位なものゝ、未だ幼稚なりし僕は何時も氏の說に反對して、之が爲めには衝突もし、喧嘩もした。

當時、獨步君は以前の新聲社から出た現代百人豪に於て、故尾崎紅葉論を書いて居たが、その時もちやうど僕に對ひ合つて筆を執つて居たが、談端なくも紅葉論に及ぶと、僕は、紅葉の想などは取るに足らんが文だけは推奬せねばならぬ、要するに文豪だと言ふと、獨步君は忽ち反對して、文などは何うでも好い、想に於てゼロだから豪も推奬するに足らん、と言つて、口角泡を飛ばした結果、第一君が露伴紅葉を推奬するやうでは駄目だ、到底論ずるに足らん、とさん/\に罵倒されたことがある。

勿論、獨步君は時々心にもない極端なことを言ふ、極端に於ては僕も亦負けないから、その時も確か喧嘩に終つたのだが、後に至つて獨步君の作物を見ると、たとへば酒中日記の、母を迎へる所に、今の僕なら……の一節あたりや、女難の、親方が切り口上で……の一節あたりや、乃至は、第三者の筆致の如き、曾つては之を無視する如くに言つた獨步君にして、曾ほこの如き詩想の一筆があるかと僕はつく/\感嘆した、殊に、牛肉と馬鈴薯の中にある、『其處で女が欠伸をした……』、或は第三者の『鰻の味に唾を湧かす……』、などの、深讀骨を刺す如きの比喩や警句に至つては、さすがに比喩や警句の旨かつた紅葉でさへ、遂に獨步君には及ばぬ所と、僕は益々以つて感服した、要するに、紅葉は學んで得らるゝの人、獨步君は遂に得られざるの人である。

獨步君の筆の遲いことは、一部の人が皆言つて居る、が、僕の知れる所では、早いと言へぬ代りに遲いとも言はれない、たゞ、筆を執る迄に非常の苦心をする、筆を執る時には大概出來上つて居るので、執り出せば存外に早い、獨步君は常に言つて居た、僕は文そのものに就て苦心をするのではない、他人が三言五言を費して書く所を、僕は如何にして一語半語に縮め得られるかと、氏の筆の簡潔にして味のある所は成程と首肯させる。

而して、獨步君は常に自重して居た、當時最も不遇の時代なりしに拘はらず、中々に筆を執らなかつた、それに反して、僕の如きは苦し紛れに無暗になぐつて居た、その後、僕が上京して下宿をすると、獨步君も又僕の下宿に二十日ばかりも居た、この際である、君は之れから新[illegible]に入つたのだらう、なぐることやくだらぬものは斷じて止せ、序て取り代へろと忠告した、僕が東風と言つたのを秋湖と改名した、つまりは獨步君の勸告に基いたのだが、依然として相不變るのはお恥し次第、兎に角獨步君は決して境遇には負けなかつた。

僕の室でも短篇二つを書いた、一つは春の鳥で、之は二日にして脫稿した。

確か、夏目漱石氏かと思ふ、竹の木戸に就て、彼れも不自然だと批難した、之れには辯護がある、今年の春、僕が獨歩君を大久保に訪ふた時、氏は餘程へこたれて、近來はまう筆を執るどころか、實は金を出しても好いから他人に書いて貰ひたい、竹の木戸の如きも主人公を殺すのではないが、面倒臭いからとう〱殺して了つたのだ、と言つて苦笑した、その際獨歩君は辛くも机に倚りかゝつて居たが、僕は強へられるまゝ正午頃から夜の十一時頃まで獨りで飮みながら氏と語つた歸つた、思へば之れが飮み別れ、眞に今昔の感に堪へないのである。

近事畫報社時代の獨歩氏

矢野龍溪

○私は德富君の紹介で初めて國木田君に逢ひました。其後私の鄕里の英學校に國木田君を頼んで行て貰つた事があります。何でも二三年居りました。山水の明媚な處で、讀書とか文藝の趣味とかを養ふには極めて都合よい場所ですから、國木田君が文士にならるゝにはいくらか爲めになつたらうと存じます。

○一體近事畫報といふものはどうして起つたかと申すと、或出版者の一人が私の處へ來て、何がやりたいといふから、それなら畫報を起しなさい。日本には未だ畫報がないから、面白からうと答へると、私にやつてくれるかと反問するので、私は黑幕になつてやる。專任にやる人は私は適當の人を推薦するといふことに相談が纏まつたので、私は國木田君を選んで、近事畫報の專任者としたのでした。

○國木田君の書いたものなど見ると、沈痛悄嚴といふやうな處があつて沈靜らしい人のやうにも思はれるが、實際はそれとは反對、極く快濶で、パッとして、なか〱の愛嬌者でした。それならば事業などに掛けては駄目かといふに决してさうでない。存外綿密な處があつて、一體の事なか〱よく氣が附きました。私はホンの黑幕であつて、近事畫報一切の事業も經營も殆どあの人一人でやつたといつてもよい位でした。第一可笑しいのは戰爭中いろ〱な寫眞を買ひ込む時に、賣手はなか〱高ばるのを、ねぎつて買ふ。なか〱安く經濟的に買ふ。さういふ手腕もなか〱あつた。又表紙や挿畫なども小山君や滿谷君などゝ相談して毎號細かく氣をつけたものだ。又戰地に居る通信者がいろ〱戰況を報ずるスケッチを送る。其れが五十も七十も來る。や、是が讀者が喜び相だとか、是れが受けがよからうといふような事も一々國木田君がやる。又原稿の選擇は固より、印刷部數又は臨時增刊の如き事でも大抵國木田君がやつたもので　さうしてそれがなか〱よく當る。若し又やり損つても人を咎めず自分も餘りくよ〱せぬ方である。又廣告のやり方でも近事畫報では他に卒先して新機軸を出したものもあるが、それが多く國木田君の考案であつたのを見ても、あの人のなか〱緻密で利巧な人で

あつたことが分る。

○若し國木田君が初めから事業家として立つたら其方でも確かに成功した人たらうと思ふ。只事業家として少し鉄點かと思はるゝのは、あの人は事業家としては少し涙脆かつた。若し事業家に俗語でいふエゴイとい ふことが必要であるならば國木田君には此エゴイといふ處が足らなかつた。胸算もなか〳〵早く、眼先もなか〳〵利いたが、貸した金でも事情を述べて泣き附かるれば帖消にするといふ處があつたので、商賈人としては一寸困つたかも知れない。其點から考へると、矢張り文學者でしたが、其以外の事ではなか〳〵尋常以上の事業家といつてよからうと思ふ。

○何にしろ近事畫報は一時よく賣れて當つたものですから、先生の懐都合もいくらかよかつたらうし、暮し向きや何かの事については先生の最得意の時であつたらうと思ふ。此際には友人や知已の原稿を買てやつたり、若くは多少の融通をしてやる位の事は皆求得たやうに思ふ。

○近事畫報が段々利益の薄くなつて來た時に私共は廢刊しようといふ考であつたが、國木田はまだ算盤が持てるから私が引請けてやつて見やうといふので、つひ獨歩社といふものを起した。然るに不幸にして私共の豫言が當つて、つひ〳〵持ち切れなくなつてあの通りになつて了つたのであるから、今になつて見れば何處までも差止めればよかつたのであるが、然しあの時は國木田君も盛んに當つた時代の味も殘つて居るし、又所謂乗りかけた船であるから何處までやつて見やうといふ氣で居つたのでした。人間としてはあの場合止むを得なかつた事でせう。近事畫報社時代の國木田君について大體を話せば右のやうなものです。

作家としての獨歩氏

田山花袋

△國木田君が作家としてのエラィ處は矢張り物を眞實に見て眞實に寫すといふ處にあるでせう。其點は於て先生はずつと他の人より進んで居たやうに思ふ。が若し慊らぬ點があるかと問はれゝば、僕は先生の作物に少し主觀が出過ぎてゐるやうに思ふ。一種のあの人の主觀的な道徳的な臭ひがどの作物にも大抵つき纒つて居るやうだが、僕一個からいへば自分はもう少し書く事柄から離れて筆を執つたら、一層價値のある作物が出來るやうに考へるが、然しあの主觀的な所が、又他人の眞似の出來ない特徴かも知れない。

△國木田君がずつと前から書いて居た日記のやうなもの——即ち「欺かざるの記」といふやうなものを見ても、先生の考といふものは昔から今日に至るまで餘り變らないやうである。其日記の文章には幼稚なものもあるが、考にはなか〳〵奇拔な事があつて、近年の先生が考へてゐた事と全く同じな事がある。若しいくらか變つ居るとしても其れは傾斜（スロープ）をなして變化したので、決して突兀と斷層的に變化したのではないやうで

ある。

△國木田君の傑作はといへば私は「運命論者」「正直者」などだらうと思ふ。「女難」も好きです。又人が餘り褒めないうだやが「酒中日記」などもいゝと思ふ。「少年の悲哀」といふのはいくらか昔流の臭ひもするが私の好きな作である。

△話せばいくらもあるが、いろ〳〵の方面で同じやうな事が出るから、君の方はこういふ簡單なお話で御免を蒙つて置きませう。

家庭に於ける獨歩

國木田治子

△うるさがりは致しましたが仲々の子煩惱でございまして、私どもが偶にお灸を据えるとか何とか申し、叱ることが御座いますと、反對(あべこべ)にひどく怒られたものです、その癖自分で叱ることもあるのですが、併し滅多にはありませんでした、獨歩社を廢して(ママ)から大久保に居ります頃には、子供を連れて近郊を散歩するなども致し、日外(いつぞや)は風葉さんの邊までも連れて參り、子供を表に立たせて、自分ばかり一寸上り込んで話したこともある想です。

△が散歩と申しましても根が無性の方ですからたんとは致しません、でも鎌倉に居た頃や、赤坂新町に居た頃や、霞ケ關に居てまだ報知社へ入らぬ頃にはちよい〳〵致したものでした、霞ケ關も當時は未だ人家も疎らに自然の風致にも富んで居たものですから私をさへ無理矢理誘つて澁谷邊まで連れ出した事も屢次あつたのです。

△小供の時分に膽病ものだつたとの話をおつ母樣がなさるのですが、その膽病は大きくなつてゝもでしたれ、原宿に居た頃です、夜戻るに青山の原を拔けるか即ち兵營の側を通るか、左もなくば寺の境内を辿らなければ戻れぬのでしたが、その中の青山の原の方を選びますものの眞暗闇を怖々來ますともう如何してもいやになつてしまつて戻りたくは無くなるそうです、或る時の事矢張り例の怖々で來ると原の彼方に一團の人集(ひとだか)り、必定是は乞兒の群か、折惡く來合はしたものだ、仕舞つたとばかり躊躇(ためら)つたものゝ、といつて如何しやう術もなく向ほそろ〳〵と辿り寄ると、人集(ばか)りと見たのは、犬集(たか)りであつたので、戻つてから大笑ひで話した事も御座いました。

△疳癪持は誰も承知の事で御座いますが、でも一時間と長く續くことはありません、ワツと血相變へて怒鳴り付けます、その時には麒麟でも何でも有りません、全く眞から腹を立てるのですが、直ぐその後でケロリとして知らぬ顏で居ります。

△弟の收二さんと能く碁を打つたものです、碁は全くの處收二さんから敎はつたので、何でもその頃は滿足な碁盤さへ一面求めることが出來ず、薄い板に線を引いたもの、それに土製の石それを碁どろ〳〵と申しまして、その碁どろを用ひては二人で對座したものです、井目に風輪といふ珍しい手合はせて係るのですが、それでも收二さんには叶ひま

せぬ、毎時も自分が不利となるときあ眞つ赤になつて疳癪を起します「牧二貴樣ペテンを遣る」などと申しましてれ、その實自分も隨分ペテンをするのですけれど、其樣なことでヂア〳〵言ふ、牧二さんも仲々引かぬ、兄さんは野碁を言つて駄目だから止すなどゝ言ふ、到頭疳癪が收まらず、碁盤は引繰りかへる、碁石は飛んで座敷一杯に散亂するといふ有樣で相方立上つて分れて仕舞ひます、て父が、いお前等左樣毎時も々々碁の爲に喧嘩する樣では困る、其樣なことなら碁は以來止せと迄申したものです、處が二三分立つか立たぬに、「おい牧二散步せんか」と事も無げに言ふ、牧二さんもハと言つて素直に應ずる、更に可笑いことは輒て散步から戻つて參りますと、「牧二今一局圍まんか」と誘ふ誘はれて此方も應ずる、又パチ々々が始まるといふ風なので、まあ此樣な鹽梅の氣象てした、麻宿へ參りました時分には矢野(龍溪)さんの碁盤が來て居りましたから本物に向つて打ちました。氣が短いものですから勝負事はいけない筈です碁を好きましたものゝ蔭張上達致しませず、それもその筈一時間に四五局も圍むと申すのですから

△猿房町に居りました頃、家に居た人で大層球突を好なものが在りまして、その爲折々近所の球突場へ出入致しましたれど下手だつた相てす、唯稍上手てしたのは投球てして、能く獨步社の二階て編輯の人達と技を競べたのです、が是とても後には平塚(篤)さんなどの方がお上手にお成りになつたと申す事て御座います。

△が一つ矛盾に思ひますのは、釣は氣が長くなくてはと申しますのに如何いふ事か他の事にはあんな氣短かにも似合はず釣丈は大の好、高見(止水)さんの郷里が下總の古　て渡良瀨川に近いところといふので、能く山鯽釣りに出掛けたものでした、獨步社を經營して居た彼樣な忙い中でも數度は行く、大久保へ行きましてからも慥か一度參つたと記憶して居ります、參るとなつたら氣が早いものですから、お靈頭にヒヨつと發議して最う三時の汽車に連れ立つて乘つて行くと騷ぐのです。

△山鯽が大層好みましたものですから、何でも此年も五月頃かと思ひます、茅ヶ崎の病床に居て端なくその味を思ひ出しては堪らず、高見さんの處へ賴んでやつて早速貰つて貰ひました、まだ小さくて是ればかち(三寸ばかり)のものでしたがおいしい々々々と言つて喜んで頂きました。

△讀書は普段忙いものでしたからか餘り致しませぬ、書物も持つて居りませぬ、ツルゲネーフの物二三冊に水滸傳位の處でした、それから二葉亭さんのものとあつたら必ず讀むのでして、家では大抵の雜誌は諸方から頂いて居りますので、強て求めるなどいふ事はないのですが、文藝俱樂部は參りませんでした、でひよつと其樣な風の雜誌にても二葉亭さんのものが見えたとあると、屹度大急ぎて買はせて讀んだものです、そして會心の作物があると亦必ず私にも讀ませて汝も勉強しろと文學談などを致して呉れました。

△創作の時には自墮落の事はせず必ず、居住居正しく端然と机に向つて、さて靜に筆を運んだもので、病氣になりましてからばかり、即ち昨

年の冬頃からは巨燵に入つた儘、その櫓の上で執筆致して居りました、筆を持つてからは兎に角も、執る迄が想に凝ると申して長いので、作は早く出來る方ではありませんでした。

△多忙の爲に執筆の暇の十分無いのに感じましてか、私に速記術を習へと申しました、その爲私も大久保余丁町に居た頃ちよつと速記術を學んだことも有りましたが、又樣々の都合から暇が無くなつて止(よ)しました、茅ヶ崎の病院へ參りましてから、此樣な時お前が速記術を覺えて居て呉れたら宜かつたがと。シミ／＼殘念がつて居りました、口授の儘で自分の感想を發表したいといふ考なのです。

△何でも手を下して人を敎ふることを好み、且つ上手で御座いました、乳呑兒を泣かせて置いても飛んで來て自分で色々あやす、妙に子供が泣き止まる、すると子供をあやすには斯うするものだ、お前等は此樣なことさへ知らぬと言ては嘲(とば)しました、私に英語なども敎えて呉れましたが、敎え方は八釜しいけれども能く腑に落ちる樣に申して呉れます、つまり說明が上手なので能く理解が出來るので御座いました。

臨終當日の獨步氏

眞山青果

六月廿三日、午前九時病院に行く。收二氏と二人。雨降る、霖雨。室内陰濕甚だし。

氏病牀に仰臥し、默然われ等を見る。二十一日の喀血以來身心衰弱、口を利く氣力も無かりしとおぼし、われ等の挨拶に目をもて答へられたるのみ。

收二氏を中心に、奧樣その他と釣の話をなす。蓋しこの日は午後より舟を柳島に出だして鯉魚を獵せん約束、鹿島櫻巷氏と收二氏の間にありたればなり。

獨步氏默然として聞くのみ、一語なし。常にはかゝる例のありし事なし。釣の話は氏の最も好める所たればなり。われ等その衰弱の甚しきを心に憂ふ。

十一時頃昏々として眠る。鼾の聲小さく安らかなり。食鹽水の吸入をかけて目をさまさしめんとすれど甲斐なし。瞼の周圍ます々々黑し、二三日この方際立ちて目に立つやうになれり。

奧樣、起ちて顎を持そゆる。この頃にいたり、眠れる間顎ゆるみて自らおさゆる能はず、忽ち呼吸の困難を起せばなり。口を明きて眠れる事なき人なりと奧樣憂はしげに物語らる。

收二氏足を見る。別にはれもなきやうなり。

十分ぐらゐづゝに目覺め、又クン／＼と鼾して眠る。目覺むる時われ等を見る目に光りなし。キョトンとして物に驚けるさまあり。又眠る。

貪眠後の不快を氣遣ひて、十二時頃無理に搖起こす。

新聞手紙來る。中に早稻田校友會の寄附金勸誘狀あり。一讀して奧樣に、「仕舞つて置いて。」と渡さる。應募の心ありしならんと思はる。

新聞一覽。別に氣を付けても讀まず、たゞ重要を偶目一過せるのみ。讀賣を手に取り、「あゝ、今日は出てるな。」と、余の書ける近狀を報ずるの通信を讀む。讀終りて何とも云はずして手より落とす。常ならば兎角の批評なくてやまぬ人なり。

雨はげし。

われ等窓外を眺みて、今日小田原に使せる鹿島君の難澁せるならんを物語る。蓋し、同君は獨歩氏沈頭の鬱塞を慰めんとて、わざ〳〵、今日小田原まで小禽を買入に行きたればなり。

獨歩氏、力なく窓外の雨を眺む。

收二氏は又釣の話。いかにもして病める人の氣を引立てんと勉むるが如し。されど甲斐なし。

看護婦、午飯をはこび來る。黑塗の膳の上にイサキの照燒ありたりと記臆す。

われ等歸り仕度す。獨歩氏曰く、「鯉は却つて今日のやうな日に釣れるぞ。」と、これわれ等の聞ける最後の言葉なり。

一禮して雨の中を歸る。

歸途鹿島君の別莊を訪ふ。未だ小田原より歸らず。且つ寒さはげしければ今日の釣魚は駄目ならんと、別莊番の老爺に聞き、われ等は一先づ茅ヶ崎館に引上ぐ。

雨ます〳〵甚だし。午後は收二氏と閒談。行事常の如し。

夜九時近く、高田病院の提灯をさげたる男、國木田さんの樣子が變てすと慌しく驅付く。われ等上草履のまゝ宿を驅出だす。

雨は霽れたり。砂地なれば路も惡しからず。

外は眞暗なり、一足さきが分らず。途中幾度か熟知の道に迷ふ。本道にまがるところにて提灯の火消ゆ。

南湖院に着く、九時少しく前なり。

瞑目の間に合はず、獨歩氏は胸に合掌して牀上に横はる。十分前、午後八時四十分に逝かる。

ツルゲネフの虚無主義

片山孤村

いつぞや本誌で獨逸の碩學パウルゼンの「父子」と云ふ論文を紹介した際、自分は此の論文の題名の由つて來つた所のツルゲネフのの小說「父子」に就て說明をしやうと思つたが、論文があまり長々しくなるので此れだけ中止した。然るに現代我國に於ける自然主義や現實主義の思想は、ツルゲネフの「父子」に現はれ

たる虚無主義と全然一致してる所があり、又現實主義の唱道者長谷川天溪氏も何時かの議論に「父子」を引合ひに出した事がある程で、我文壇の自然派の間には、頗る愛讀されてるやうに見受ける。て、自分は今回は先づ小説の解題をなし、次ぎに虚無主義の思想を叙述し、暇があつたら天溪氏の現實主義に論及せうと思ふ。

順序だから先づ「父子」の梗概を述べる。

時は千八百五十九年、マリノと云ふ露國の一地方に、ニコラウス・ペトロキッチュ・キルザノフと云ふ貴族が妻の死後寂しい鰥暮しをして居る。この人は性質が至極温和て、お人好しとも云はれる程な上、家政や農業の管理などには頗る不得意なので、傭人や小作人等が附け上がつて手もつけられず、田畑は荒廢する、財政は日々に困難になると云ふ心細い有様。併しニコラウスは氣が弱いかはりに諦めも善く、家運の衰頽を運命と觀じ、亡き妻の面影に有りし世の樂しい戀の追想に耽り、シューベルトの優艶なる曲を小胡弓（ヴィオロンセル）に奏て、眼に涙をうかべつゝプシュキンの詩句を口吟むと云ふやうな、實際的な當世にはめづらしい非實際的の人である。所が同じ家にこれも亦時勢遲れの男が住んで居る。パウルと云つてニコラウスの實弟、もとは近衛の士官て、聖ペーテルスブルヒの交際社會でちやほやされた時代も有つたが、或る氣まぐれな公爵夫人に惚れたが身の詰り、職を停められて故郷に歸り、可惜男盛の身をもつて、土臭い田舍に埋もれて居る。それが爲めか、陰氣な、口の惡い、苦蟲を嚙みつぶしたやう拗ねものとなつて仕舞つたが、何處となく上品な、貴族的な性質丈けは殘つて居る。

ニコラウスにはアルカディーと云ふ息子が居る。今まで大學に居たのだが、此度自分の親友のオイゲン・ワッシリエン・バザロフと云ふ男を伴うて歸郷する。これより時代の變動と何等の交渉のなかつた、二人の老兄弟の平和な生活が攪亂されることになる。アルカディーは未だうぶなお坊ちやんて、やさしい父に對しても孝心の深い青年であるが、親友バザロフを崇拜し、バザロフの議論には一も二もなく感服して居る。バザロ

フは一平民の子ては有るが、智力の鋭い、自信の强い、男らしい靑年て、學問上てはたゞ自然科學を承認する許りて、哲學や宗教臭いものは悉く排斥する。生活上の方針として功利主義を奉ずる。一體が眞面目な、堅氣な男で怠惰、傲慢、虚僞を蛇蝎の如く憎み、特立獨行、俯仰天地に恥ぢずと云つたやうな槪がある。殊に文學美術を無用の長物となし、ラファエル、シェーベルト、プーシァキンに隨喜する人々を嘲笑し、さては戀愛、家庭、國家、教會、愛鄕心、等を罵つて愚劣なる「ロマンチック」だと云ふ。彼は如何なる主義をも法則も權威(アウトリテート)も認めぬ、否一切を否定し、何ものをも信仰せぬと云ふのが彼の唯一の主義てある。斯の如き言はゞ極端な過激な急進的思想を懷いてる靑年から見れば、ニコラウス、パウルの二老兄弟、所謂「年の寄つた小兒」は疾つくに「がらくた部屋」へ投込まるべきものてある。從つて二靑年がこの家へやつて來ると間も無く老人と意見の合はぬことが分る、議論が起る、多少のにらみ合ひも始まる。併しニコラウスは性質が柔和な丈け强いて若いものに逆はうとはせぬ。二人の靑年が居らない時、弟のパウルに向いてから云つた。「私(わし)は若いとき亡(な)くなられた母上と喧嘩したことがある。母上は隨分きびしく叱かられたけれど、私はどうしても聞入れ無かつたのだ。其時終に私は母上に向いて、「あなたに私(わたし)の言分がお解りに成らぬのは尤もてす、あなたと私とは時代が違うんてすもの」と云つたら、母上は大變に怒(おこ)られた。併し私は心の中てから思つたね、仕方が無い、藥は苦いものだが呑まにやァ成らぬと。——今度は愈々私等が苦い藥を呑む番が廻つて來たのだ。若い者どもが私等に向いて、あなた方(がた)は現代の人ては無いのです、さァ藥をお呑みなさいと云つても不平は言はれまい」

然るに、きかぬ氣のパウルは頑として自巳の立脚地を守り、何靑二才めがと侮つて居る。殊に貴族たる彼は元來平民のバザロフを毛嫌して居る上、屢々バザロフと衝突し、激論して言ひまくられた結果、ひどくバザロフを憎んで居たが、事は終に大破烈に及んだ。

この家にニコラウスの妾が内縁の妻とも云ふべきフェニチュカと云ふ氣立のやさしい女が居る。ニコラウスには至極氣に入つて、二三才の小供まで出來て居る。
或日フェニチュカとバザロフとが庭園で落合ひ色々談話をした末、バザロフは一寸した出來心から、フェニチュカの唇に接吻をする。その時折惡しくパウルがこの場を通りかゝつて之を見つける。所がパウルその人も實は兄の思ひものに心が有つたのだが、フェニチェカには嫌はれ憚られて居たのである。パウルは憤怨遣る方なく、その後二時ばかり經過してバザロフの部屋へ遣つて來て決闘を申込む。バザロフは暫く意外の感にうたれ、馬鹿々々しいヿと思ひ乍ら、思ひ當る所もあるので潔く承諾し、翌日附近の森林に於て密かにピストルで打合を遣つたが、バザロフの運が強かつたので彈丸はパウルの脚を傷ける。この決闘の顛末は巻中で最も興味ある場所の一て、冷靜にして聰明なるバサロフ、貴族の體面を重んずる英國紳士(ジェントルマン)の風あるパウルの兩性格が眼前に躍出する感が有る。

決闘がすむと二人は一切の怨を忘れて仲直りをする、バザロフは豫ねて用意の馬車にうち乘つて自分の故郷へ逃げ歸へる。
マリノの附近にアンナ・オディンツォフと云ふ富豪の若後家が妹のカティアと一所に、裕かな、靜かな生活をして居る。この家はアルカディーの知己なので、或日バザロフを連れて訪問したヿが有る。アンナはバザロフと交際をつゞけてゆくうちに、其才智と辯舌と男らしい氣象に惚れ込み、このやうな男となら再婚しても善いと思ふ。又今まで色や戀と云ふヿには全く無頓着て、女を天使のやうに崇めたり、女の爲めに命を棄てるやうなヿを氣違沙汰とのみ信じて居たバザロフも、この才色双絶のアンナを見て全く魂を奪はれ、遉がの虚無主義者も戀の虜になつて仕舞ふ。幾度かの煩悶葛藤の後終に戀を告白する アンナも一時は男の心に隨はうとも思つたが、また思返して男の手をつきのける。蓋し智の勝つたアンナの考では、戀はうれしい、結婚も樂しいが、従來自分が寡婦として固守して來た平和

や自由や獨立には代へられないと云ふのである。

　バザロフはかの決鬪の場から故郷へ逃歸る途中、再びアンナの家を訪ねたが、アンナの決心は益々堅く、バザロフも女の戀をねだるとは、乞食に等しき所業と思ひ諦めて、愈々我家へかへる。

　我家では思ひ設けぬ息子の歸省に、慈愛深き兩親は有頂天になつて喜ぶ。しかし心に病あるバザロフはこの度ばかりは父母の慈愛も身にしまず、ちやほやされるのを却てうるさいとに思ひながら、好きな醫學上の研究にも氣乘りがせず、精神鬱々とし樂まず、たゞ何となく退屈て、而かも落着きがなく、何をするにも懶く、日頃の活潑な擧動も全く消うせて仕舞つた。失戀は彼が元氣を燒き盡して死灰のみ殘したので有る。不幸は獨り來るものでは無い。ある日醫者なる父を扶けてチブスで死んだ人の死骸を解剖する際誤つて指頭を傷け、傷口から這入つた毒のために重病に罹つて、死んで仕舞ふ。慟哭の聲が家に滿ちたとき、哀れにも老ひたる父は俄然發狂する。

　以上は至極お粗末ながら、自分の記憶に殘つて居る「父子」の梗概で有る。さて、主人公バザロフが所謂虛無主義の權化たることは言ふまでも無いが、更に篇中の語を假りて虛無主義を明にせう。

　バザロフが始めてキルサノフ家へ來たとき、パウルがアルカディーに向つて「バザロフは元來何だ」と訊(き)くと、アルカディーは「あの人は虛無主義者(ニヒリスト)ですと答へる。すると父のニコラスは「虛無主義者(ニヒリスト)と云ふ語は拉典語ニ虛無(ニヒル)と云ふ字から來たのかな？　して見る、何ごとをも承認せぬ人の事だらう」

　と云ふ。アルカディーはそれより進んでこの語の意味を說明してきかせる。其の言葉に依ると、虛無主義者とは「一切を批評的(クリチツク)立脚地より判斷する人で有る。「如何なる權威(アトーリテート)にも屈せず、何如なる法則(プリンチツプ)をもそのまゝには信仰せぬ人である。この法則が如何に社會より重んぜられぬとも、虛無主義者は顧みない。」

　なほバザロフ自身の言葉をならべて見ると、「吾人は吾人が有用と認むるものによつて導かれる。現今に於

ては一切を否定するとが有用て有ると思はれる、だから吾人は一切を否定するのである。」「破壞の次ぎには建設が必要かは知らぬが、「建設は吾人の關する處で無い。吾人は先づ路を拓かねばならぬ。」「吾人は說敎をしないで、告訴をするのだ。吾人は手始めとして吾が露國の官吏の腐敗と、道路の缺乏と、商工業の皆無なることと、司法の紊亂とに世の注意を促した。……」

以上の諸語を綜合すると、虛無主義とは非權威主義である。一切のものを疑ひ、否定し破壞する主義である。この主義は哲學に於けるカントの批判主義(クリチナヂムス)と酷似して居る。破壞を先きにして建設を後にすると云ふよりも、原則としては寧ろ破壞を主とする消極主義である。併し多少の建設的方面が無いでもない。即ち現實を基礎とした正確(エクザクト)なる自然科學である。虛無主義といへども現實を否定することは出來ぬ、從つて唯一の信ずるに足るものとして科學を奉ずる。この建設的方面から見れば虛無主義は唯物論である。併し見方をかへると唯物論は虛無主義の發足點とも言ふことが出來る。何となれば虛無主義は現實——即ち感覺をもつて唯一の實在とするからである。次に第二の建設的方面は功利主義である、バザロフはこの立脚地より、文藝や無用の長物とした。曰く「卓拔な化學者は第一流の詩人よりも二十倍も有益だ。」「自分は美術は嫌だが、金儲けの術と、痔を根治する術なら大に尊敬する。」

さてこのツルゲネフの小說が出版の當時は大なる誤解をまねいた次第は、彼の「回想記」に詳しく出て居る。保守派や反動派の人々からは、ツルゲネフは過激奇矯の說を唱へて青年に媚びるものと謗られ、進步派や改革派や青年等の側からは、作者は故意にバザロフを戲畫(カリカツール)的に描き、當時の青年を侮辱したと云つて責められ、意外の筆禍を買つた。彼れは「この小說は永遠に余に對する露國青年の好意を失はしめたもので有る」と云つて居る。この小說は獨逸でも——日本でも青年の間に熱心なる愛讀を得て居るのに、本國では非常な不評判で有つたとは不思議である。

之について尙ほ興味ある逸話がある。この小說が出

版されて數週の後（千八百三十二年）、ツルゲネフはペータースブルヒのアプラキシン宮が燒けた日に、偶然にも主府に遣つ來て、ツルゲネフが始めて造つた「虛無黨」（ニヒリスト）と云ふ語が人々の口に上つて居たのを見て大に驚かされた。「御覽なさい、あなたの虛無黨が火を付けたのでしやう、ペータースブルヒも追つ付け燒拂はれるとてしやう」とは最初に遇つた知人の言葉であつた。更に厭ふべき感覺を起さしめたとは、もとからツルゲネフに同情し、味方をして居た人々は甚だ冷かな、寧ろ敵意ある態度を示し、もとからの反對者は却てツルゲネフに向つて祝詞を述べたとてある。

斯樣な誤解は何の爲めに生じたので有らうか。これも「回想記」を見れば明かに分る。實は何の不思議もないとてある。詩人はバザロフと云ふ人物を創作したのではなくて、ある地方の青年醫師をモデルに使ひ、詩人はこの人を當時の青年の新傾向や新思想を代表する人物と認めて、自分が觀察した所を公平に、切實に描き出したので有る。「余はバザロフと云ふ人物を描くに當つて、一切の文藝を排斥する人として表はし、その言動に激烈な、無遠慮な調子を與へたが、之れは決して我國の青年を侮辱して遣らうと云ふやうな、不都合極まる意思からでは無くて、余が知人なるドクトル某氏（「父子」の出版前に亡き人であつた）や其他類似の人物に於て觀察した所に從つたからで有る。恐らく誤謬も有るだらうが、正直な余の經驗は、余に「現實がさう云ふ風に出來て居るのだから仕方が無い」と告げた。「余は之に何等の智巧を挾むことは出來ぬ、余はたゞある一定の人物を描かんと欲した許りてある。」「余の個人的好惡の念は玆には何等の關係もない。然かも、余はバザロフの文藝觀を除き、殆んど彼が一切の意見に贊成すると主張するが。之を聞く余が讀者の多數は定めて一驚を喫するだらう。」

自分は贅言を費すに及ばない。讀者は詩人自身の語に依つて、其の世界觀と序に藝術觀の大要を解せられたて有らう。ツルゲネフは實に虛無主義者にして、且

つ自然主義者である。併し後者即ち藝術觀が、前者即ち世界觀から來たかどうかはまだ分らぬ。兩者の間に恣に聯結線を引かんとするのは、之れこそ所謂論理的遊戯で事實を重んずるものゝ取らざる所である。（ツルゲネフの藝術觀はなほ「回想記」の諸所に現はれて居るけれども、この論文の主旨外であるから茲には略した。）

自分はこれから古來の虛無主義、殊に十九世紀の佛國に於ける、唯物論に源を發し、藝術に於て自然主義となつた虛無主義（フローベール、ゴンクール兄弟等）につきて一言し、ツルゲネフの虛無主義と比較論評し、更に長谷川天溪氏の所謂「現實主義なるものに論及せうと計畫したが、本誌の原稿締切期限が切迫したので、この計畫は次の機會をまつて實行することにする。

前號の豫告に田山花袋氏の小說を掲載すべきことを記したりしが同氏は九州地方旅行の爲め期日迄に間に合はず依て德田秋聲氏に懇願して其代りとなしぬ

次號には

田山花袋

眞山青果

二氏の創作を掲載すべし

此廣告に由り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄新にして且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割增（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限内ニ死亡セバ）の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證券を擔保に貸金の便法もあり

京都本店　京都市下京區油小路御前通角（電話七貳貳番）
東京支店　東京市京橋區南植町壹番地（電話本局五壹八番）
大阪出張所　大阪市東區大川町御靈筋角（電話東壹貳五參番）
長崎出張所　長崎市榎津町六十五番地（電話七貳六番）
廣島出張所　廣島市紙屋町（秦　忠兵衞方）（電話六〇八番）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

目下大流行のインヂャン紙摺小冊子

其の容積は極めて小なれども活字大にして頗る讀易し

數百千巻の書册も集めて一小書架上に置くを得べし

NELSON'S NEW CENTURY LIBRARY

@ 1.35 & 2.00

Austen, J.—Pride and Prejudice.
— Sense and Sensibility.

Brontë, C.—Jane Eyre.
— Shirley.
— Villette.
— Wuthering Heights.

Dickens, C.—American Notes.
— Nicholas Nickelby.
— Our Mutual Friend.
— Hard Times.

Kingsley, C.—Westward Ho.

Lever, C.—Charles O'Malley.
— Harry Lorrequer.

Lytton, L.—Caxtons.
— Last of the Barons.

Scott, W.—The Abbot.
— The Antiquary.
— Court Robert of Paris.
— Fortunes of Nigel.
— St. Roman's Well.
— Waverley.
— Redgauntlet.
— The Betrothed.

Shakespeare, Wm. Dramatic and Poetical Works. 6 Vols. 9.60.

Thackeray, Wm. M.—The Book of Snobs.
— Burlesques.
— Contributions to Punch, Etc. Etc.
— The Newcomes.
— Virginians.

Tennyson, A. L.—Poetical Works.

大阪支店 郵便振替 貯金口座 第七四番

東京〇大阪〇京都

丸善株式會社

(東京本社貯金口座第五番)

京都支店 郵便振替 貯金口座 九八九〇

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

小説

出産

徳田秋聲

努は午少し前から、苦しい金策に出かけて、方々電車で乗廻し、へト／＼になつて今し方歸つて來たばかりである。

淀橋へ入つて來た頃には、森の上に底明のする赤い夕雲の色が大分薄らぎかけて居た。夕飯時の靜な、しかも何處か陽氣な初夏の町を、彼は屈托さうな顏をして、一歩々々息苦しいわが家の光景を目に浮べつゝ歩いて行つた。

通を少し右へ入つて、其から空地の垣根を左へ折れて、未だ木の匂のするやうな長い新しい塀に沿ふてゆくと、軈て幽暗い木蔭に自分の門の光が見え出した。氣忙しいやうな、不安なやうな思を抱いて、彼は飛つくやうに古い門を啓けて入つた。

上へ上つたが、目が些と變て、部屋の樣子が暫く解らなかつた。庭で二人の小供がお靜(妹)と遊んでゐるのと、奥の六疊で、小柄の、腹の大い細君が疊重ねた蒲團に伏り懸つて、痛む腹を抑へてゐるのが、

漸く見えて來た。女中は臺所で、晩飯の後始末をしてゐた。
努は中折帽を其處らへ投出すと六疊と茶の室の間角の柱に頸筋を持せて、疲れた足を踏のばし、「ア、！」と深い溜息を吐いて、尻を据えた。三十‥‥もう大分取つた男で、頭髮には白髮も少しは見えてゐる。チヨツキのしッくりしない胸が折れて弛い折襟から、骨張つた顎髯の伸び加減もぢゝむさい。
「如何したと云ふんだ、ランプもつけずに‥‥腹が痛出したのか」。
細君の年子は後向に伏つたまゝ、「もう今夜産れさうです。車夫を頼んで、私産婆を呼びにやりましてすよ。其から四谷の伯母さんにも來て戴かうと思つて」‥‥と苦しさうな聲で言ふ。
「其ぢや愈よ金が必要だらう」。
「いゝえ」と年子は水々と、透徹るやうな蒼い顔を此方へ向けて、「差當つて、其のためにお金が入用と云ふ譯ぢやありませんけれど、今日も相模屋と洋服屋が來ましたわ。そして洋服屋が何だか大變喧しいとを言つてゐるやうです。」と手を弛めてゐた腹を急に痛さうに抑えて、不恰好に口を歪めた。毛の薄くなつた眉根にも深い皺が寄つてゐた。
努はヂロリと其樣子を見たが、何だか故意らしいやうな氣がして、前の折のやうな同情も起らなかつた。
「其樣に痛むのか」。と苦い顔をする。
「其樣に痛むかつて‥‥まだ、なか〳〵此樣なもんぢやないんですよ。一ト晩苦しまなけやなりません

わ。加之、今度は少し脚氣もあるやうですから、何だか私心配で……」と斷々に言ふ。

「それで御都合は如何でしたの」

「駄目！」と、努は變な笑方をして、少時考込んでゐるやうであつたが、彼方行き此方行きして、到頭一つも要領を得なかつたとを、不平さうに搔摘んで零して、「けど爲方がないさ。他に金策しやう。」

「ぢや矢張少し拵えた方が可ござんすよ。靜さんに御苦勞して頂きませうか。」と細君は、「彼と〳〵、此と此とで……」と云ふやうな見積を、痛い腹を抑えながら、爲はじめてゐた。

努は冷かな目で、ヂロ〳〵其顔を見てゐたが、旋て洋服を脱ぎにかゝる。するうち妹も小供も椽から上つて來た。家内が急に騷々しくなる。末の女の子は、クフン〳〵と鼻を鳴しながら、滿らなさうに母親の肩に取ついたが、取合つてくれぬので、暗い部屋のなかを其方此方ウロ〳〵してゐた。日の暮方には、寂寞の感じは子供の胸にも通ふらしく、何時も明のつくまでは、悄してトボヽヽしてゐるのが定例だ。上の男の子も同じく取着端のない體を、奥へ行つたり、父親に取縋つたしりてゐた。

明がつくと、努は其下で食卓に向つて坐つた。而して不味ッぽらしく飯を喰はじめた。何を食つてゐるか、彼の舌では碌々其味も解らぬのであらう、目の色も箸を持つ手も浮の空で、如何かすると、茶碗を持つたまゝ、何處を瞶めるともなく、茫然考込んでゐる。暫くすると、努は面倒くささうに、茶を打かけて、さら〳〵と食り出した。

飯が濟んでから、靜に莨を喫してゐると、少しは氣が落着いて來た。ボッとしてゐた頭腦も多少明晰

して來た。妻が今出產の難關に差懸つてゐるのだと云ふ事も、可厭だ〱と思つてゐた其時が、もう迫つてゐると云ふとも、新しく强く胸に響いて來た。妻は愒して、其若い血をゲッソリ減らされて了ふてあらうが、五人の家族のために削られる自分の生は、今迄よりは又一層の細り方であらう。

年子は其間、そつと簞笥の抽斗を抽差してゐた。何やらシュッ〱と絹の擦れるやうな音も洩れて來る。

「靜さん」と靜子が膳を引いた氣勢を候つて、年子は低い聲で呼んだ。

お靜は急いで傍へ行つた。

年子は寄つて來る子供に、今包みかけた幾品かの代物を橫へ寄せて、體で隱すやうにして、「貴方牛込まで行けて?」

「え、行けてよ。」

「でも、夜分は物騷ですからね。淸をつけてやッたら如何でせう。」と年子は不相變顰めた顏を此方へ向けて努に問かけた。

「然う皆に出られちや困る。其よりか己が行かう。」と努は少し憤つたやうな調子で言出した。

「其ぢや靜さん好いわ。」と此も溜息を吐いた。

「然う。」とお靜は悄々と引退る。

年子は包のうへに手をかけたまゝ、多時俛いて考込んでゐた。初めて信一の產れた時、矢張恁云ふ

やうな事のあつたのが憶出された。次の女の子の時も、餘り裕ではなかつた。けれど其時分は今よりは未だ〳〵苦勞の爲效があつた。同じ苦しいうちにも、何となく張合があつた。夫婦の間には色々込入つた事情や、胸と胸とに通つてゐる溫かい感じがあつた。産褥に就くつい一日前に、自分で同じやうな使に出た時なども、少しも苦しいとは思はなかつた。其が何時の間にか一變して、努の感情も荒めば、自分にも不安が出來、始終砂漠の眞中にでも立つてゐるやうな念を懷くのである。

「さア其をおかし」。と努は起上つて羽織を引被けた。

年子はホロリとして、「子供の産れる時と云ふと何時でも恁う……。」と氣毒さうに包を其處へ差出した。

努は默つて、可也大な其包を横抱にして、そゝくさと出て行つた。

* * * * * * * * * * *

牛込見附で電車を降りた努の姿は、少時すると神樂坂の中程から、左へ折れて、其から又幽暗い横町へ曲つた。丸に菊と云ふ字を白く染拔いた、觸るとボト〳〵するやうな暖簾を潜つて、彼は紙を張つた嚴重な格子戸の前に突立つてゐた。と、間もなく啓けて入つた。

框に腰かけてゐる人が二組、立つてゐる女が二人もあつた。二十五六の、顏も肩も丸い番頭と、目のクル〳〵した、悧巧さうに顏の引締つた十五ばかりの小僧とが、後の格子窓から流込む風にパッ〳〵する、ガスの裸火の下で、客を引受けてゐた。一人は札の皺を伸しては算盤を彈いてゐたが、小い方は連

に臺帳を繰つては何やら檢べてゐた、傍に眞田紐で襷懸した、頰ッぺたの腫れた今一人の小僧が、代物を澁紙に包んでは繩をかけて、札を附けてゐた。努は端の方に腰かけて、包を私と潛らせて番頭の眼前へ出した。番頭はヂロリと其顏を見て、

「入つしやい!」とお辭儀をしながら、何か言ひたさうにして默つてゐた。古い馴みだと云ふとが、一見して解る。

「早く爲て下さいな。」と後の方の壁に喰ついて立つてゐた、三十二三の些と澁皮の剝けた內儀さんが、少し憤り氣味の聲をかける。

「私のも如何したんだよ。」此は太い品の惡い聲で、四十餘の肥つた婆さんであつた。

「どうも濟みません。」と番頭は機械的に返事だけしてゐる。

臺帳を檢べてゐた方の小僧は、ふと此方を向いて「××さんのは何と何とてしたつけ。」

前の內儀さんは、「アラ可厭ですよ小僧さん、だから今然う云つてるちやありませんか。セルに糸織の羽織ですつて。其セルだけ拔いて欲いんですよ。細い格子縞なんですよ。豈夫流しやしまいね。」

小僧は默つて又繰はじめる。

「此だから困つて了いますね。さアてつて駈つけてみると無つたり何かして、私なんか時々やられるんですよ。」

「えゝ、つい重寳だもんですから、持つてまゐりますけれど、矢張着る時節が來ませんとね、なかゝゝ

出せやしませんよ」

件の小僧は、程なく裾を端折つて、雪燈に火を點けて、倉へ駈込んだ。其時番頭は何やら一つの通帳にコテヽヽと書込んで、其を持つて奥へ入つたやうであつたが、間もなく引返して又机の前に坐る。と、奥から手頃な絨氈の鞄を提げて、三十五六の蒼い顔の女が一人出て來た。髮も亂れ、茶の竪縞のネルの單衣も何だか見窄らしげで、メリンスに黒繻子の大分懈れた晝夜を、シダラなく締めてゐる。此が默つて店頭へ出て來ると、番頭は胡散くさい顔つきて、周章て上へ上げてあつた下駄を出してやつた。女は始終ツンと澄して、無愛想に出て行つた。

「え、篠原さんの洋服てすな。」と番頭は今度は直ぐ其處に腰かけてゐる、顔の小い袴を穿いた書生に言かけた。

「然うさ。」と若い書生は持つてゐた一封の手紙を擴げはじめた。

「何だか能く解らんけれど、間服が一着にパナマが一つ入つてゐるさうだね。其を小包で送つてくれと云ふんだ。處は此處さ。」と福井縣福井市……と書いた封筒を其處へ投出した。

「へえ、成程。」と番頭は取あげて見て、「こんな病院に居るんですか。」

「それて、其の夜具をだね……」と書生は番頭の後に積んである海汚い黄縞の蒲團一組を指して、「其奴を、まア大概其位に見積つて、足らん口は來月中頃に出て來るさうだから、其時拂ふとして、左に右品物だけ至急送つてくれろと恁云ふんだ。」

「然てすな。」と番頭は氣のなさうに蒲團を所々摘んで見てゐたが、「洋服は確か三圓幾許かてしたらう。パナマは如何程か解りませんが……オイ新どん出して來てごらん。」

小僧は月と代物を訊いて、此も倉へ入つた。

書生は此時連の男に目配すると、柔順しさうな連の男は、默つて嵩高な一ト包の本を其處へ差出した。

「おい、それから此だがね。此うちで僕の時計を出して、アト四圓借してくれたまへ。」

「時計ですか。あの時計は、もう有ませんよ。」

「無い？ 嘘つけ。」

「いゝえ、他はもう……然し惜くもない時計でせう。」と番頭はエヘヽと笑ふ。

書生は負けぬ氣の目をパチヽヽさせて、「時計は左に右、メタルが惜かつた。」と二度ばかり舌打してゐた。

吸つけられたやうに、ジッと聽いてゐたが、然してゐるうちに努は何となく一種の自由と云つたやうな安易を感じて來た。

某かの金を袂の底へ捻込んで、其處を出たのは、八時過てあつた。

「もう今頃は皆なが來てゐるか知ら。」と努は矢張其事が氣にかゝつて、急いで暗い横町を出たが、何だか速に咽喉が渴くやうな氣もした。腹もう減つて來たやうである。尤も晝飯時はあちこち奔走してゐたので、知らずに過し、宅へ歸つても落着いて飯を食ふ氣もしなかつた。

ふと、放縦な書生時代に行つけたビヤホールの前へ出た。ガラ戸や白い窓幃は、一面華やかな火が映つて、中は陽氣に騷めいてゐるやうである。努は可厭な思を抱きながら、二三度行過ぎやうとしたが、結局はふらりと入ることになつた。

中は白熱のガスの光に、莨の煙が蒼く漂ふてゐる。幾組かの客は皆な陽氣に醉つてゐるやうて、派手な女と、白い男の給仕の姿が目にちらついた。努は隅の方に陣取つて、ビールと料理を一二品注文したが見たところ、知つた顔はもう一人もない。壁にかゝつた怪しげな裸體美人の畵だけは昔のまゝだが、代も變つてゐるらしく、見慣れぬ若い内儀さんが帳場に坐つてゐた。

二杯ばかり飲むうちに酷く醉つて來た。目がチロ／＼して、耳や頰が可恐しく熱して來た。けれど胸は前よりも一層冷く、心の底から寂しい思が湧上るのであつた。女が料理の代を持つて來た時、努は憶出したやうに、

「此處の持主は變つたのかね。」と訊いた。

女は胸にさした衿止を氣にしながら、粉桶から飛出したやうな顔に、興のない笑を浮べて、

「いゝえ、如何ですか。」

「前にゐたお美代さんと云ふ女は、もう居ないかい。」

「奈何ですか、私ちつとも　・」と言つて、ゴム漿酸を鳴しながら行つて了つた。

努は料理をソコ／＼に突ついて、旋て其處を出た。神樂坂の人の往來は、漸く疎になつてゐる。重い

雲が見附のあたり、空に蔽被さつて、チラ々々濠端に見える火が、如何にも夜の色を深く見せてゐた。耳は森と澄んで、脚が思のほかに輕かつた。

努は又何處やら暗い横町へ曲つた。昔し些と知つてゐた女の事を憶出したので。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

十一時頃、見附から電車のなかへ飛込んで來た努の顏は眞蒼であつた。

「何だ詰らない、もう居ないのか。あんな女を呼ぶくらゐなら。」と彼は袂の底へ手を突込んで私と札の勘定を爲はじめた。

家へ歸ると、宅は森としてゐる。町から離れた此の一區劃は深い眠に落ちて、騷つく梢の音ばかりが耳に立つた。

上ると茶の室の入口で、年子の伯母さんとバッタリ顏を合した。

伯母は頓狂な聲を出して「努さん、産れましたよ。男の子ですよ、大きな男ですよ。貴方の歸が遲くて〳〵、さア速く御覽なさい。」と騷立てる。

「アハヽ」と言ふ笑聲が奥から洩れる。年子の兄も來てゐる。

入ると、食卓のうへて、酒が始まつてゐた。薄暗い六疊にスー〳〵言ふ、年子の疲れた呼吸遣が聞える。

伯母は靜に寢てゐる赤子を抱いて來て差つけた。

「此から一生見るんだ。」と努は些と見向いたまゝて、何とも言はなかつた。

兄は祝を述べて猪口を差した。努は默つて無意識に三四杯酒ばかり呻つてゐた。（をはり）

私生兒

岡本靈華

一

乙吉とおりんとは同じ寺の役僧と下女である。齡を云へば一つ違ひの十九と十八。此二人は何時の間にか好い仲になつて居た。

其れを奥でも全く知らずに居た譯では無い。殊に乙吉の惡戯けは普段から人の目に付いた。何にしても若い同士の事、若しやとは思つたが、外の事と違つて然う〱立入つた詮議も出來ない。で、餘り人前の過ぎる都度には煩いから叱りもする、又それと無く嗜めても置いたが、それ以上はマア女でも騷いだらと、默つて見て居た。所が、其年の十二月の中頃、ある朝だつた。毎もの通り奥さんが幾度もおりんの名を呼んで起したけれど、一向返事が無いので、爲方無しに故々臺所まで起しに來た。見ると、寢所は敷放しのまゝになつて、乙吉の寢て居る南間の口から、寢衣姿のおりんが眞赤な顏をして出て來た。奥様は默つて奥へ引返した。

恁んな事のあつた頃には、最うおりんは二度まで見る物を見ない體になつて居た。

乙吉は村の彌七といふ小百姓の悴で、二年前から此方へ役僧の見習に上つて居る。親の彌七が評判の

小慾の深い男で、一人でも家の口數が減したさと、一つは息子の出世の爲めにも、仕込むなら是に限ると思つた。前の役僧といふがシツカリ者で、子供から五十年近くも寺役を勤め上げた揚句、田地も幾らか分けて貰ふし、今では村でも指折の樂な身上になつて居る。「那なれば可い。」といふ彌七の目算であつた。が、乙吉には到底其の後繼は難しい。讀書きが殊に嫌ひで、御經の讀覺えにも隨分住職を困らせた。二年懸つて、それでも漸う六首引と祥月、是だけは一人で勤まるやうになつたが、寺の方でも御堂の掃除から、供華の世話、檀家への配り物、何かと用が多いので、當分は其んな事に使ふ意りで、先々の見込などマア後廻しと云つた形だ。「手癖さへ惡くなければ、」と住職は思つて居た。阿彌陀經を讀上げた時に、釋名が無くてはと云ふので、了順と住職から附けられたが、誰も遂ぞ其名を呼ぶ者が無い。若いザンギリ頭と、ぎごちない肩付と、そして白衣の裾を捲れて出る黑い足とは、何う見ても了順といふ格好で無かつた。相變らず檀家へ行つても皆乙吉で濟して居る。

　恁んな風でも、爲る事が佛仕へだけに、下女の目からは何所か貴げに見えたに違無い。今笑談を言ひかけられた、本堂で最う半鐘が鳴つて居る、那れが其人だと思ふとおりんは何と無く樂しかつた。乙吉の顏は色の黑い、頰の高い、團子鼻といふ丸い鼻の可也蕪雜な顏立てあつたが、然し笑ふと口元に愛嬌があつた。恁ういふ顏は一番女に馴れ易い顏である。惡戲けは四五月頃から日に増し募つて來たが、些つと男の手も欲しい十八の娘には、其れも大して嫌で無かつた。時には煎餅など買つて來てくれる。其れを窃と物陰へ行つて二人して食べた。て、或夜突然男にゆり起された時に、おりんは聲を立てゝ騷出

す程恐しいとは思はなかつた。

然し、妊娠したのは未だ自身にも氣が付かない。何と無く體の樣子が變だとは思つて居る。月の物も二度見ないし、それに何を爲るにも體が大儀て、氣分が重くて、ともすると鳩尾の鼓動が高まる。胃が惡いのかとも思つて見た。朝起きて手水も碌には使はないで、急いで茶釜の下を焚付ける。そしてお茶の吹く間に土間の掃除をして、水を打つて、茶釜の後へ佛供飯を仕掛けて、それからお上の衆の膳立をするのだが、飯前の是丈の爲事が何よりも體に辛くなつた。時には水を打ちながらフラ〳〵と眩暈が來て嘔氣を催す事なぞもある。

其の起き損ねた間の惡い朝だ。恁んな話が二人の間に取交された――

丁度朝茶飯が濟んで、おりんは後の洗物にと裏の井戸端へ出て居た。茶碗や小皿やを入れた笊を流槽へ置いたまゝ、氣撓るさうにボンヤリと前の垣根を眺めて居ると、其所へ乙吉がやつて來た。起きてから始めて顏を合はせる。乙吉にも朝は樣々な日課があつて、まづ飯前に本堂の朝勤行を濟す事、それから内陣の掃除をして、長廊下へは雜巾を掛ける。其れが今辛と濟むと、今日は又墓場の掃除を言付けられたので、花水を汲みに來た所だ。片手に寺用と書いた大きな手桶を提げて居る。今朝の始末がおりんは甚く氣にかゝつて、隙があつたら乙吉に物蔭で逢ひたい〳〵と思つて居た。

丁度好かつた。

「何をボカンとし居るだえ。」男は笑ひ顏をしながら、傍に寄つて來た。

女も振向いて和りして見せる。

「茶碗前に置いて最も洗つ了つたのか。」

「なんの、未だ……。」と慨さうな聲だ。

「水汲んでやらすか。」と乙吉は手桶を置いて井筒際へ寄つた。軋みの惡い滑車がギイギイ云つて、釣瓶の上つて來た時、おりんは小桶を其所へ出した。

ザアッと桶へ水泡が立つ。

「今朝奥さんは臺所へお來てたゞね。」と低い聲て、心持顏を赤くしながら男の顏を見た。

「何時?。」

「私等が未だ寢とる時に。」

「然うだか知らん。」と乙吉は些つとしッぺ眉を動かしたが、其れ切別に氣に止める樣子も無い。

「でも、私が起きた時、那所の開扉が啓いとつたものね。それから、後で茶釜の下を焚付け居つたら、奥さんが今朝好う寢とつたなッてお言ひて、本當に極りが惡かつた。那れ前に最う何度も呼ばしたゞそうな。」

「見られたもんが何うならす。」と言つて、乙吉は氣樂に舌を出した。そして、大手桶を引寄せると又ギイ〳〵やり始める。おりんは水桶を傍へ引いて、ピョ〳〵額へかゝる亂れ毛を濡手で煩さゝうに搔上げながら、

「何せ最う一月限りだて………。」と獨言のやうに言ふ。

「何が一月え。」男は大きな聲をして振向いた。

「來月の十八日が節季だてね。幾ら顏見られたとて、後最う一月だちふ事ソ。」

「オレ、來年も居やせんだかえ。」

「一年ちふ證文だもん、そりや居つて居れん事は無いけんど、私や何うしたゞか此節體が惡くて爲樣無いて……何所か病氣が惡いだらすと思ふがね。」

「何ねに惡いえ、頭痛でも爲るのか。」と乙吉は眞顏になつた。病氣は左も右く、今餘所へ行かれて了ふのは惜しい。

「何ねにてつて、ハッキリ私にも分らんけんど、體が何せ氣懶くて爲樣無い。それに、胃腑でも惡いだか知らん、朝なんが飯食べすと種いな事爲るね、那れが本當に切無くて——。」

と言つて、足元へペッと生唾を吐いて居る。

「藥飲んで見さつせ、屹度癒るに。俺が買つて來てやらすに。」

「でも、何處が惡いだか其れが分らんもんだて。それに、朝の事が那辛くちや、到底この先辛抱出來やせん。土間なんか掃いとるとグラ〳〵と恁う目が暈んで來てね。」

然う言ふ顏を乙吉は心深さうに眺めた。氣分はそれ程惡いか知らぬが、顏は元頃より見勝りがする位である。全體おりんは標致は人並落ちる方だが、百姓の娘には稀しい色白で、その色白が此節は又透通

るやうに艶づいて來た。そして、頸筋から頤の邊へ見好げに痩せて、小い目が潤んだやうに柔かく光つて居る。乙吉は見馴れた目にも新しい美しさを見た。この可愛い代物と別れるのは、何としても嫌だと思つた。

「おや、俺が明日から土間掃かす、の、そしてお前茶釜の下だけ焚付けさつせ。」と優しい事を言ふ。「そりや胃病だ、胃に定つとら、俺が藥を買つて來てやらすにマア飮んで見さつせ。」

「胃病なら可いけどね。」と女も動かされた。

「胃病ツ、直き癒らの。惡い內や俺が朝の何を爲てやらすに、然ういふ事にして來年最う一年居らつせ。お前か行つ了つちや俺は寂しい。」

「居らすかね。」とおりんは男の顏を見て和りする。

「居らつせ、居らつせ。」

「その代り、本當に土間掃いとくれるだぞね。」

「噓言はすか。」

「ほゝ。」とおりんは出拔に笑つた。そして、又しても足下へ唾を吐く。

二

此節は田舍でも下女が拂底で、さて探さうとなると中々無い。だから、寺の方でも此女が續いて居てくれゝば誠に都合が好い、一年でも勤めたのが緣、來年も何うだらうかと云ふ話は前々からあつた。乙

吉と何んな間違があらうと、そんな事は要するに痛くも痒くも無い譯だ。

て、或晩おりんは其の相談に家へ遣られた。おりんの家は矢張同じ村內の、下邸といふ數の多い部分にある。母は二三年前產て亡くなつて、父と年老つた婆さんと、十二になる小さい弟と三人暮し、十六の妹は是も餘所へ奉公に出て居る。母を殺した赤兒は生れると二日目に死んで了つた。此三人の家族は、父が小作から得る僅かの收穫で生きて居るので、二人の娘は其給金を積んで、小さな跡取に田地を買つてやる意である。利助といふが父の名て、今年四十八だが、小工面な、グズ〱した、一生土に還つて暮すには最も應しい男だ。相談は無論成立つた。何の道何所へか奉公に出なければならない體だし、第一本人が居やうと云ふのだから、誰に異存も無かつた。

「マア成丈稼いで下よ、後で文次(弟の名)が何ねに樂せるか知れんに。然うせや、お主も又好い嫁入口が出來るちふもんだ。」と婆さんは言つた。

「三年も二人て稼いで下れや、一反位の田地は直きと買へる。」と父も言ふ。此頃體の惡い事や爲事の辛い事は、始めからおりんは言はぬ言りだつたが、係ういふ具合て、倘とそんな事は言出せなかつた。

水が違ふそなて、些との內に立派になつた事。」と婆さんは娘の顏を見て然う言つた。

左も右く今一年居る事に決つた、給金は二十五圓、證文を替へると共に前借にして銀行へ預けた。が、おりんの體は益々樣子が變てある。約束通り乙吉は土間の掃除もしてやるし、藥も買つて來て飮ました。胃散が好いと云つて、其れに十錢出したのは渠にしては大奮發だつた。朝、腹を減すのが惡いと云ふの

て、一錢二錢づゝ駄菓子なぞも買つてくれた。けれど、無論それで治らう筈は無い。相變らず體が撓く、氣分が重く、そして立働きが億劫でならない。それに酸味が欲しくなつて、時々蠅帳から窃と梅干を撮出しては口に含んで居る。

三度目の月經を見なかつた時に、始めておりんは若しやと思つた。然う思つて下腹を見ると、顯々と其の大きくなつたのが目に付く。風呂場だつた。おりんは其時何とも云へない悲しさと恐しさとが込上げて、フラ〳〵として風呂桶に摑つたが、我知らず涙が目縁を零れた。

やがて、湯から上つて、深い物思ひに沈んだ顏て、乙吉の居る火鉢の傍へ坐つて。十時過ぎ、奥の閒扉は最う閉つて居る。乙吉は自分の床を敷いて、最う寐るばかりにして、其所で消えかゝつた火に手を翳して居た。

「乙さ、私や何う爲うねえ。」と言つて、おりんは凝と男の顏を見た。

「何をえ。」

「私やね、子が出來たぞね。」と聲が顫へる。

「子がえ。」乙吉は有繋にビツクリしたが、「嘘言はつせ。」

「本當に。」と力を入れて、「……此頃内何うか體が可怪いと思つたけんど、矢張子を孕んだゞいねえ。腹見ても分るし、それに月經が最う三度も無いもの。」

懐妊すると月の物が無くなる、其れ丈は乙吉も聞いて居た。それが最も三度。ぢや然うだと思ふと、

何より先に、「失つた。」といふ念が乙吉の胸を突いた。

「何う爲うねえ。」と女は又言ふ。

渠は何と答へて可いか知らなかつた。女の始末も始末だが、自分の身に來る大きな破綻、其の恐れ、と云つたやうなものが一時に念頭に群つて來て、急に胸の塞がるやうな心の重みを感じた。

「乙さ、ねえ。」とおりんは最う涙含んで居る。

「何うせるてつて……。」と言つたまゝ、暫く默つて居たが、やがて苦しい氣輕な色が乙吉の顏に浮んだ。

「可いがえ、何も今日に今日心配せんでも、又何うか成らの。」此場合恁う言ふより外爲方が無かつた。

「そねな氣樂な事言つ居れんがね、今に人の目に付くもの。」

「でも、出來たもんが爲樣があらすか。マア知れるまで然うやつ居るツ、其内にや俺が又何とか勸考せるで。」

「勸考てつて、何ねな勸考だね。」

「然う案じんでも可いがの。最う寐さつせ、俺に任せ置かつせ。」と男は最う火鉢の傍を放れる。

「其時になつて、お前さん屹度知らんなんて言はしやゝせんだらすね。」

「馬鹿な事……。」と言つて、乙吉は寐床の中へ這込んで了つた。

後暫く女は未だ坐つて居た。

其夜二人は晩くまで寐なかつた。おりんの心配は言ふ迄も無いが、乙吉にしても氣樂らしく寐床には入つたもの丶、さて樣々に考へ惱んだ。所詮知れずに居ないとすれば、思切つて此方から親達に白狀したものか——無論然うした方が好い。話すなら先づ母だ、母なら多少何事にも言出し可い。が、それとして、始め何う切出したら一番對手を驚かさずに行くだらう、と思つて見た。駄目だ、駄目だ、誰でも驚く、恁んな事を聞いて「フム然うか。」と言つて居る親が何所にあるものか。そして、矢張折を見て父に告げるより外無い。あの嚴しい父が何んなに火になつて怒るだらう、其顏——乙吉は其の恐しい顏が心に浮んだ。是が、唯詫ぐらゐて先方へ濟む事なら何でも無いが、何れ手切金とか、女を貰受けるとか、子を引取るとか、何方にしても大きな金の費える事だ。金と云ふと、父は何時も目の色を變へて怒る。何時か、此の夏頃だ、おりんと未だ始めて關係の出來た時、簪を一本買つてやらうと思つて、母に請つて三十錢小使を內證で貰つた。其れが知れて、父が何んなに怒つたらう。乙吉は直ぐ家へ呼付けられて、門口を入ると、行成り拳骨で頰桁を張飛ばされた。母にも出て行けと呶鳴つた。其時の權幕が未だ乙吉の目にある。——と云つて、此儘默つて居たとて、何時まで是が露れずには居ない、遲くも一月、惡くすれば明日が日にも誰に勘付かれないとは言へない。すれば、直ぐに兩方の親元へ知れる——それから後は、最う何うなるかメチャ〳〵である。唯恐しい人の顏ばかり那方にも此方にも想像されて、乙吉は最う凝として居られない程胸の中が惑亂して來る。不安、悔い、恥、懼れ、渠は生れてから始めて恁んな心の苦をした。

偶と墮胎と云ふ事も考へた。「今の内なら墮せるかも知れん、それが若し出來りや恁んな有難い事は無い。」と思つた。費えも入らず、誰にも迷惑を掛けずに濟む。自分も些とも心配無しに始末が付くのだ。草の根だ――何かの草の根だと聞いて居る。はゝべ、でも無い、おほばこ、でも無い、何かそんな草だつたが、さて其れを何うすれば可いのか其れも分らない知らなかつた。以前、村の勘左後家といふ婆あが、チヨク〳〵人に賴まれて行つたと云ふ話だが、一度お上へ知れて懲役に行つてから、今ではサッパリ爲なくなつた。然し、恁うは思つたものゝ、何でも其れを試みやうと丈の決心は無い、一つ違へば懲役といふ事は、乙吉に取つて何よりも恐しかつた。

ほと〳〵渠は途方に昏れた。終には、恁うも早く子を孕んだ對手の女が憎いやうな氣がして、夏からホンの半年の内に、最う子を孕むつて何て事だらうと思へる。「淫亂め。」と口の中で罵つて見た。向ふて、おりんが啜泣でも爲て居るらしい低い咽び聲が聞える。が、乙吉は窃と聲を懸けて見やうとも思はなかつた。

三

其の翌日から、二人の間が妙に丸くなくなつた。乙吉は女と顏を合せるのを努めて避けるやうな氣味が見える。おりんは又機さへあると男を摑へては胎兒の事を言出した。恁んな事て、毎晩奧の開扉が閉つてから、屹度例の火鉢の傍で二人の樣々な掛合が始まる。ボソ〳〵ボソ〳〵言ふ聲が、長い時は一時間も聞えて、女の聲は每も男のより高かつた。

乙吉は大抵にして布團の中へ這込んで了ふと、女は枕元までも附いて來て、後から後から話を續ける。終には乙吉は故と怒つた聲をして、「最う大概にさつせ。明日起きれなんだら何う爲るだい。」と言ふ。

おりんは暫く默つて居てから、

「ね、乙さ。お前さん屹度其時になつて、知らんなんて言はしやゝせんだらすね。」

「何度言ふだえ。」

「でも、そねな事言はしやると、私や何う爲うとも無いでねえ。」

「俺がそねな惡徒かえ。」

「何も然う言ふぢや無いけれど、私が身になると……」と溜息をして、「そりやお前さんも覺えのある事を、豈やそねに言はしやるやうな氣遣ひ無いて可いけど……」

係う言つて、漸と其の重い體を起して自分の寢所へ歸つて行くのだ。掛合は幾晩しても同じ事て、何方も親元へ打明ける決心が付かずに、一日送りにグズ〳〵と日を過して行く。

腹は容赦なく目に立つて來る。二月の末、おりんは或日奧さんに呼ばれて、人目の無い奧の一間へ連れられて行つた。腹形の尋常で無いのは無論、其外此頃のおりんの變つた樣子は、一々奧さんの經驗に照して到頭其れと覺られたのだ。

「酸い物が甚う好きになつたも能う見て知つとるが、」と言はれた時には、おりんは蝴蝶の撮み食を思出してヒヤリとした。が、話はズツと立入つた事て、愈々女の妊娠が確められた。最う四ケ月になつて居

る事も分つた。何時まで隱して居る譯にも行かないから、產婆にも懸らなくては成らん、それには早く親元へ話して、それ〴〵含んで居て貰ふ必要がある。て、其れも自分達言ひ惡いならと云ふて、兩方の親元へは總て奧さんから打明けられる事に決つた。

「初產は大事だて、氣ィ付ける上にも氣ィ付けんと可かんぞよ。それに、お主のお母アが那して產て亡うならしたし、何も筋引くちふ事も無いけど、氣ィ付けるに越した事は無いでな。」と其れから其れと女らしい注意を與へて、そして終ひに恁う言加へた。「だけど、お寺で恁んな事が出來たてゝ、此方へ親元から不足受けるやうぢや困るでな、其所はお主達で能う心懸けとつて下れにや可かんぞよ。此方は初手から何にも知らん事だでな。」

おりんは泣いて臺所へ退つて來た。悲しさと恐しさと悔しさとでシミ〴〵胸が一杯になつて、最う何うなる體だらうと思つた。女部屋の障子際に突伏して、何時までも泣いて居た。乙吉が傍へ來て、

「りんさ、おい。」と肩を搖ぶる。「奧さん何を言はしたえ、那の事が知れたとかい。」

おりんはヒシと袂で顏を隱して居た。

「え、りんさ。」と言つても取合はうともしない。男は暫く其の顫へる鬢の毛をマジ〴〵と眺めて居たが、やがて耳元へ口を寄せて、

「好い話があるに些つと裏へお來で。藥を買つて來たに……」

女は濡れた靑い顏を上げて、何の藥と問ねる目で乙吉を見た。

「惡咀に一ち好いてつての、今惣さ許て買つて來た。些つと東へお來て。」と熱心に言ふ男の後に附いて力無い風で東裏へ出て行くと、先に出た乙吉は焚物小屋の入口から手招きする。おりんは其方へ行つた。泣いた目を眩しさうに晝の明い光に外向けながら、放れ毛が青い頰にハラ〳〵動いた。

入口から少し入つた所の堆い乾松葉の蔭に二人は立つた。

「今の、總さて聞いて見たら、是が一ち能う利くそなて、」と乙吉は懷から賣藥の紙袋を一つ出して、「是を飲んて見さつせ、新月丸ちふ藥だ。」

惣さは村て駄菓子屋と賣藥の取次とを爲てる家てある。おりんは默つて其袋を受取つたが、小學校も二三年しか行かないのだから、表の効能書がハッキリは讀めなかつた。

「何うして飲むだね。」と問く。

「其れ丈一度に飲んて了はつせ。普通なら三日分だけど、お前のは些と重いて――それに、高くて到底多とは買へんての。其れてお前廿五錢だぜ。」

女は輕く驚いた目を對手に向けた。

「それにの、」と聲を低くして、「事によると其れて何が墮りるそな。慥かな事は無論分らんけんど、大概効目があるてつて然う言はれたて、マア飲んで見さつせ。內密だぜ。」と抑へるやうな顏付をして見せる。

おりんは微かに口尻を顫はして、急いて其袋を帶の間へ藏ふと、コクリと喉が鳴つた。

「屹度內密にしとらにや可かんぜ。」と最う一度言つて、男はツイと小屋を出た。足音が向ふへ聞えなく

なつた時分に、おりんは外へ出て來たが、出口の所で帶の間の藥を出して、今度はシッカリと内懐へ入れた。

其晩、奥さんからの使で、乙吉の母のおだいとおりんの家のお杉婆さんとが壇那寺へ呼ばれて來た。中の間で一時間もヒソ／＼と話のあつた揚句、二人の女親は險い顏をして退つて來たが、旋てそれ／＼其不埓者を連れて歸つて行つた。お杉婆さんが丁度貰ひ風呂に來て居る隣の人の前を作つて、一言二言口を利いて居る内に、おだいはトットと乙吉を連れて先に出た。

彌七の家は寺の裏門を出ると、籔に附いて曲つて、つい二三丁の所にある。表に一畝程の邸畑を控へた、藁葺の庇だけ死にした型通りの百姓家で、表口の板戸の隙目から細い火光が幾筋も外へ漏れて居る。親子は其所まで一口も口を利かなかつたが、家の前で、

「何う爲れても、默つて唯お詫爲るだぞと。」と息子に耳打して、おだいは中に入つた。乙吉は顫へながら後につゞいた。

臺所の莚敷に死燒の手爐を圍んで、親子三人が對ひ合つた。乙吉一人成可く座を下つて、小さくなつて凝と首垂れて居る、油煙の眞黑に揚るカンテラの光を受けて、莚へ落ちた暗い三つの影が、炎の氣息でのべつに動く。彌七の顏は恁うして見ると隨分凸凹した面相であつた。眉の下の暗い中にギロリと二つ目が光つて、小鼻の側から頤へかけて深い溝の影、それから下脣の下、顳顬、高い頬骨の下にも明暗が斑に隈取つて居る。乙吉の顏立は父よりも母に似た事が分る。

おだいは成たけ穏かな調子で、親父の氣色を氣遣ひ〳〵、奥さんから聞いた一伍一什を話した。
「若い同士の事だし、それに最う出來了つた事なら、今更何てつても爲様無いて、マア成丈け穏便に末始の付くやうにてつてね、奥さんも然う言はしやるだて……」と終ひを取做すやうに言ふ。
「乙！」と彌七の聲は鋭かつた。不埒者の俯向いた額の上から睨付けて、「幾つだ、貴様。」
今にも拳骨が飛ぶか、火箸でも抛り付けられるかと思つて、乙吉は息も窒りさうに竦み上つて居る。
「十九や廿歳の端人足の癖に、子を拵えるたア何事だ。馬、馬鹿。」と凸凹した顔の隈が頻に動く。「最う今日限り貴様のやうな奴は子ぢや無え、勝手にしろげ。手前の拵えた孩兒だ、子を拵える位えの効性あるなら、手前にも其丈の了簡があるづら、勝手に處分付けるが可い。」
「乙、お詫せんか、何默つとるだ。」とおだいも外に言ひやうが無い。
「詫も絲瓜もあらすか。手前が其の了簡だて野郎が附上やがるだ、詫位えで濟む事か濟まねえ事か考へて見よ。恁ねな奴に係らつとた日にや、此家が滅茶々々に成つ了わア。女も無論引取やせん、子も知らん、況して金なんか三文だて出す事ぢや無え。さあ何所へでも失やがれ、忘れても親だと思ふな。」
乙吉の目からはポトリ〳〵涙が落ちた。詫で濟む事では無論無い。恥、悔みが痛いほど胸を壓して、後から後から涙が出て、ともすると聲の撥けさうな下唇を凝と咬んで俯向いて居る。
「失せんか。」と彌七は自分で自分の膝頭をグイ〳〵掴みながら、「子を作る程な奴親の世話ア要らん。出て失せう。失せんか。お寺の方へも俺がシッカリ断つ置く、糞、面ア見るも胸が惡い。」

親父は突と立つた。おだいも乙吉もハッとして浮腰になりながら其顔を見たが、別に手荒な事をするては無かつた。土間に脱捨てゝある破れ草履を片足持つて來ると、

「さあ、是が親の餞別だ。」と言つて乙吉の膝の上へ抛り付けて、「其奴を持つて何所でも失せろ。」

乙吉の膝には草履の土が一ぱい散つた。渠は耐らなくなつて、到頭兩手で顏を抑へて泣出して了つた。ヒツヒツと意氣地無く喉泣の聲を立てる。

「失せんか。最う用無え、失せんか。」と親父は傍に突立つたまゝだ。此上マゴ〳〵して居ると危いと見て、おだいは直ぐ息子の手を取つた。

「皆な主が惡いからだ。お父さんが那言はしやるも無理は無え。詫れつてお母アが何度言つても詫りも爲んだもん、何うならす。さあ出て行くだ、よ、乙」と顏だけ强い顏をしながら、悄々立つ奴を門口まで連出した。表へ出ると、

「最う遲いて直ぐとお寺へ行け。後でお母アが又鹽梅好う形の付くやうに爲てやるで。」と小聲で聞かせて、引込際に又振向いて、

「忘れても最う、那んな女に近寄るぢや無えぞよ。」と言ふ。

乙吉が寺へ歸ると、間も無くおりんも歸つて來たが、是も褪めた顏をして目蓋を赤く泣腫して居た。二人はジロリと顏を見合せたきりで、其まゝ默つて各自に寢て了つた。

四

捨てゝ置ける事ては無いから、早速雙方の家と家との間に交渉が始められた。乙吉の方は父の彌七と親類の安藏、おりんの側からも是も父の利助と、親類の喜兵衛が立合ふ事にした。交渉の要件は究り三つてある。生れる子の所置と、女の身の始末、今一つは給金の前借してあるお寺の方の後片付けてあつた。

野田は丁度間時てあるから、恁んな掛合事には何方かと云へば都合が好かつたが、それても中々百姓には暇が無い。小慾の深いて評判な彌七は、その狹い邸廻りの空地にまて鍬を入れて、麥だの菜種だのギッシリ培つて居るのでも知れる。一日でも野田に出ずに居られないのが病だ。畑の緣に蠶豆も蒔いてある、山畑には桑がある、杉苗も作つてある、利助の方でも然うだつた、他人の田地を高い年貢て預つて居る身上には、此の間作がホンの儲け時なのだ。掛合は其の雙方の都合を見てはグズ〳〵と運ばれたものだ。

彌七は家ては隨分癇癪も起したり呶鳴り付けたりするが、いざ他人に向ふとスッカリ態度が變る。言ふ丈人に言はして、自分は唯默つて難しい顏をして聞いて居る。それで居て、少しても不利な事だと、何んなにも頷くと云ふ事を爲ない。「俺は何にも分らん人間だて……」といふが口癖で、ネチ〳〵した、それは粘り強い男だ。利助の方は又小工面な顏をして、尤もらしい事を諄々と說立てるが、心に少しも油斷は無い、取れるものなら些とても餘計に取らうと云つた遣口。要するに隨分面倒な掛合てあつた。お互ひに顏を火にして爭合ふやうな、凄じい光景は無い代りに、何時迄しても同じ事を同じ樣に潛り合

つて居て、會合は一向に要領を得ない。

「マア、能う考へて見すて。」

「然うだ、何も今日に今日ちふ事でも無いて。」と云つた風て、毎も別れるのだ。

始め彌七は掛合の宿をば叔父の安藏の家にしたいと思つて、

「お前の所は家は廣いしせるて、」と話して見たが、一口に撥付けられて了つた。

「馬鹿吐くな、手前の息子が粗相したぢや無えか。そねな宿なんか到底御免だ。」安藏は究り信う云つた男だ。自分の迷惑の無い限りは左も右く、さも無ければ飽く迄人の事だといふ底括りがある。曲つた事が大嫌ひて、身に暗い事さへ無けりや誰に頭を抑へられる筈は無いと云ふので、小體に、頑固に、約しい一方て世間を通つて居る。慾も無い代りに思遣りなぞは更に無い。

で、毎も會合は彌七の家て、晩飯が濟むとボツ〱例の人達が集まるのだ。安藏と利助とが煙草を吸ふ、二人は手爐を間に挾んて、胡座を掻きながら、安煙草の荒い奴をバクバク燻して居る。

「そいて、子供は無論乙公が子だしせるて、お前の方て引取らしやるだらうの。」と利助が言ふ。

彌七は默つて居る。すると、傍からおだいが口を出して、

「ても何だてね、乙一人が子ちふぢや無し、二人寄つて出來たもんなら、兩方で育てるがマア順當のやうに私等ぢや思ふだがね。」

「然う言はしや、其んな物だが、女ちふ者は信ねな時にや何うしても罪が輕い。何故なら女が先に手を

出すちふ事出來んての。昔から子は男が背負ふと極つとるだ、背負ふが嫌なら其丈の手當ちふ物を出すとか、の、喜兵衛さ。」

「當り前の事ソ、昔も今もあらすか、そりや丁と裁判へ出ても分る事だ。」

「裁判ゑ。」と安藏は何より此言葉が嫌ひだ。「そりや何も成らん、裁判なんか出るやうなら俺ア最う御免だ。そねな、や、そりや何も成らん、俺は何處迄も人情て其の、筋道の分るやうに爲すと思ふだ。其れが出來にやお前等の勝手にさつせ、俺は最う中へ入る事御免だ。」

「なんの、何もそねな所へ出るちふぢや無いがの、唯早い話が然うだちふ事ソ。誰がお前表沙汰にまでして、我子の耻曝す奴があらすゑ。」と利助は尤もらしい顔て言ふ。

「俺等は何にも分らん人間だで、何だが……」と彌七は難しさうに例の口を切つた。「人情から言つて見や、男だて女だて何方が罪が輕いちふ事もあらめゑと思ふがの、何も無理無體な事爲たちふぢや無し、女だて矢張承知づくだもん。」

「だが、誰にてもマア聞いて見さつせ、是が開き直つて言や、餘所の娘に疵付けたちふもんだ。けんど、俺はそねな舊弊な事は言やせん、女にも無論咎はある、が、因はと云や男ソ。其男が生れた子引取るなア知れ切つた事て、裁判へ出んても何所へ行かんでも、其れが世間一般の法だアの。」と言つて、利助はトンと煙管を叩いて「まあ好う胸へ手を置いて考へて見さつせ、然うお前、手前に好い事ばつかて世間が通るもんぢや無えて。」

「何だ知らんが、怎う話が難しくちや何も成らんわいの。」と安藏は氣樂に人の顏を見て笑つた。

「然うせや、お前の方にや都合が好からすが……」と言つたが、彌七は辭に詰つた。「マア最う一度考へて見す。愈々是が然うとなると、俺が方でも中々大概な事ぢや無いての。」

「然うだとも、お互えに土藏の一本も持つとる身上だと何も言分は無えだが……」と喜兵衛は笑つた。

「だが、出來了つた事は不承せにや爲方無え。」

無論弱味は男の方にある。て、何と云つても、彌七は到頭對手の言條を立てずには居られなかつた。子供を引取る事は先づ纏つた。次は女の始末だが、是は左も右く彌七の家で產をさする事丈決めて、嫁に貰ふか、それとも後を緣切にするか、其邊は又其時と言ふて一時濟んだ。一番難しかつたのは寺の後始末てある。利助は隨分附込んだ難題を持掛けた。究り怎う云ふのだ。前借金はおりんが一年奉公するものとして貰受けたので、是何の間違も無ければ、當然此方の收得である。が、有つても其れは同じだ何んな間違が出來たか、お寺の方へ何んな差支を起さしたか、其れは此方の些とも知つた事ぢや無い。此方は矢張娘が無事に奉公して居る意りで居る。だから、若し寺へおりんの後釜を入れるとしても、總ての責任は彌七が持つべきものだ。元々お寺へ奉公に上げてある娘を、謂はば乙吉が横取したのだから、代りの女は當然給金を其方で拂つて、其方で探して、お寺の間を合せなければ成らん——と怎う。究り口では何と言つても、利助は二人の間違を全く男の罪に着せて居るのだ。

是には大分悶着があつた。隨分揉めた。始めから人の事にして煩がつて居た安藏までが、有繋に躍起

になつて、村の物識りと云はれる人を一人々々に聞いて廻つた。何所でも其れは少し酷いと云ふ者が多かつた。

「それ見され、誰でも無理だ言はん者はあやせん。是だけは俺が聞かん。」と言つて、彌七は其方除にして、一人て利助と爭つたものだ。「村の人に惡まれても詰らん。」といふ引氣から、利助も到頭一歩讓つて、結局半々に給金を持つと云ふ事になつて治つた。其代りおりんは産後、彌七の家で出した給金の月數しか、子供の傍には置かないと云ふ約定である。尤も、其時になつて別の談が纏まれば格別である。

五

新月丸の効目は無論無かつた。是があつたら、それこそ何んな新しい事件を誘發したか知れないが、無くて濟んだのは幸福だつた。然し、此れが爲めにおりんは餘程體を傷めて、輕度てはあるが貧血症を引起して、六月の末には到底最う寺の廣い臺所の立働きに堪えなかつた。この頃は腹も最う八月になるので、大きくなる丈大きくなつて居た。青い顏をして、何を爲るにも直ぐ息切がする、それに目縁や小鼻の脇に腫が來た。額にも頰にも澤氣といふものが全く褪めて、立居すら餘程苦しさうに見えた。

第一寺でも困つた。重い體で切なさうに飯時の仕度をしたり、後片付などする樣子を見て居ると、間にも合はないし、慘めでもある。殊に、大きな零れさうな腹を抱へた下女が、同行の前へ茶を酌んで來るのも、隨分體裁の好いもので無かつた。おりんの身になつても、何の位耻しく辛かつたか分らない。

一つは代りも容易に無かつたのだが、實を言ふと、姙婦が何程辛からうが管はない、ただ半月でも十

日でも長く寺に置きたいのが彌七の肚だ。が、到頭寺の方で持餘して、後は盆替りからで可いと云ふ事になつて、始めて彌七は女を連れて行つた。七月も最う半ば過ぎてある。所へ丁度、此の春頃東京とかへ逃げて行つて、持切れなくて歸つて來たと云ふ若い女が村に出來た。代りは其れを賴む事に決つて、半期の給金が十五圓、半分の七圓半は、彌七に取つて此の位業腹な話は無かつた。

此時分には、最う乙吉は寺にも家にも居なかつた。今度の事から、所詮役僧などに仕上がる奴では無いと見切つたので、彌七は直きに寺から引取つて、擧母といふ近い城下の町の或る足袋屋の小僧に遣つて了つた。

それは可いが、不自由な體を抱へて、一人きり他人の家へ引取られたおりんこそ慘めなものである。子は背負ふ、女は引取る、加之に代りの下女の給金まで半々に持たせられた、恁ういふ散々な目に遇つた彌七夫婦の怨は、何としても此の犧牲を無事には過されない譯だ。彌七は何時も冷かな、苦り切つた顏をして女を見た。おだいの辭には一口每に棘が包まれて居た。同じ屋根の下に一つお櫃の物を食べて、始終顏を見合せて居る人から恁うした爲向をされる位、若い纖弱い女の胸に切ない事は無い。おりんは食べる物すら一度だつて安々と喉を通した事が無かつた。

それでも、野田の手傳だけは休まされたが、其代り矢張家で機を織るのだ。汚れ物があれば洗濯もする。そして、飯時に上つて來る夫婦には、丁と三度の仕度を爲て置かなければ成らない。寺方から見ると百姓家の臺所は雜作が無いが、それでも飯を焚く、茶を沸かす、菜を煮る、漬物も出す、恁んな事が

一緒になる晩景は可也忙しかつた。
未だ可い意りて、存外手遲れになるやうな事は、時計の無い百姓家では有勝ちである。が、其の有勝ちがおりんにだけは有勝ちで濟まなかつた。若しか夫婦の上つて來た時に、飯が未だ出來ずに居るとか、或は漸う茶釜の下を焚付けた所なぞだと、それこそ大變である。
「一日家に居つて何爲とるだちや、マア。」と直ぐにおだいは口を歪める。大方晝寢ても爲とつただらす、其れて無くて何で恁ねに遲うなるもんだ。」
「お前さん、何ねにか腹が減つただらすね、今日は隨分と仕事がえらかつたで」
彌七は默つてジロリと顏を見るのだ。
「むゝ……」と例の苦り切つた顏だ。
「今日は本當にえらかつた。終ひにや私や最う腰骨が折れさうだつたがね。」と泥の脚袢や手甲を始末しながら、「然うかと思や、一日家に遊んどる人もあるし、」と無論聞えるやうに呟く。
おりんは痛い耳を耐へて、急いて膳立をする、茶碗を並べる。其内に漸と飯も出來て、夫婦が待ちかねて膳の前に坐つた所で、香々鉢を出して見ると漬物は一切も無い。
「やれ、香々も未だ出んどるだの。」とおだいが目敏く言ふ。
「今出すに、先き食べ掛け居つとくんな。」とおりんは倉皇土間へ下りる。
「俺が出さすか。」

「お前さんは然うし居いてな、一日田圃で働かしたゞもん。」とおだいは頤で女の背後を指つて見せた。

此頃のおりんには、此の押石の上下しも大抵ぢや無かつた。

飯の仕度が丁ど出來て居るやうな時には又、おだいは機の事を聞く。何か知ら捕へては、厭味が言ひたくて耐らないと言つた風である。

「最う那の機上るだらすの。」

「なんの、未だ……」おりんは答へない譯にも行かない。

「隨分と長う懸るだの。掛けてから最う五日にや能うなるに、一機にマア幾日懸るだぢや。並の者なら一日三反は樂だちふに。」と恁うだ。

「そりや其位織れん事も無いけどね、此節は何うか體の鹽梅が惡くて……」

「お前のやうに然う體、體言つとつちや限が無い。姙娠ぐらゐ。俺等が乙生んだ時なんか、明日生れる今日迄ちふもん田圃でウンウン働いとつたもんだ。」

恁んな事が毎日のやうに繰返された。一度、夕方からポツ〳〵小雨の降り出した晩なぞ、おりんは熟々身上が辛くなつて、寧そ死なうと思つた事さへある。干物を藏ひ忘れたのが因で、それからそれと例の痛い耳擦りが殊に其日は烈しかつた。

「着物雨曝しに爲るだか。」とおだいは頭から浴せかけた。「此の雨の降出いたに氣イ付かん事無からすに、何たら女だちや本當に、横着も無精も大概程のあつたもんだ。」親が親なら子も子だ。二人がゝりで俺が

家を踏たらげに爲やがる〇」

　おりんは急いで外へ出て、干物竿を軒下へ持込んだが、其まゝ袂を顔に當てゝ凝と其所に泣いて居た。家の中ではおだいが未だ頻に何か罵るのが聞える。シミ〴〵おりんは悲しかつた。暫くすると、窃と足音を忍ばせながら軒下を放れた。

　最う人顔の見えない位に外は暗くなつて、雨は大降にもならず、細かいのがポツ〳〵と顔に當る。途中て父か、弟か、親類の人かに逢はないかと思つて、何と無く心待ちに爲ながら、往合ふ人毎に顔を透して見たが、誰にも逢はなかつた。村の端れに上用水と云ふ川がある。川幅が六七間もあらう、丁度水の要る時て、常から見ると二倍も三倍にも増して居る水嵩が、薄闇に黒々と流れて居る。向ふの方の水面には仄と靄が罩めて、兩岸の暗い川楊の陰から底深い流の音が聞える。やがておりんは其の橋の上に立つた。其所から身を投げて死ぬ意りであつた。

　此用水ては時々人が死んだ。夏の始めから秋口へかけて、水嵩が人背の二倍にも深くなるので、此近邊て水て死ぬ人は皆此川へ來た。他所で死んだのが此方で揚るのもあつて、一年に一人は屹度新しい死骸が村を騷がせる。そして、何う云ふものか水て死ぬのは女が多い。去年は二つ死骸が揚つたが、一つは子供一つは女だつた。隣村で死んだのはズッと下流て揚げられたが、是も矢張女てある。其中の一つが此橋の畔に横へられて居た所を、おりんは通り懸りに見た。村の衆が一杯周りに集つて居た。巡査も來て居た。死骸は古莚の上に寢かして白布が被けてあつたが、其兩端から濡れた長い髮毛と、芥の付い

た細い足とが見えて居た。

おりんは橋の上に踞まつて、ボンヤリと怎んな事を思出して居た。と、微かに胎の兒が動く。ヒクヒクと其れが腰骨の邊に感ずる。おりんは水の面を眺めながら、肩から出るやうな深い溜息をした。

二三時間してからである。おりんは利助に連れられて彌七の家へ歸つて來た。

八月になると、間も無く産の紐を解いた。生れたのは男の子、形は並程の大きさあつたが、何所か肉置に締りの無い弱さうな兒であつた。初産てはあり、體を甚く傷めて居たので、死んだ母の例を引いて其ればかり心配して居たお杉婆さんは、産後の娘の無事な顏を見た時は涙を零して喜んだ。

然し、生兒の産聲を聞いて、喜んだ者は一人も無かつた。彌七は第一、其事を乙吉にも知らせずに置いたが、おだいが町へ行く次手の人に言傳をして、唯生れたと丈言つて遣つたのは十日も後の事である。

それでも、七夜の日に名は乙平と附けた。

六

日立ちは意外に好くて、産が濟むとおりんはメキ〳〵と色澤も出て來た。赤兒の方も別狀無く育つて行く。

所が、九月を越して十月になると、ボツ〳〵と又例の掛合が始められた。おりんの身の落付についてである。嫁にするか、それとも親元へ返すか、乳母として留めて置くなら、其丈の給金を貰はなくては成らんと云ふのだ。

「嫁に貰はす。」といふ彌七の言立を、利助は承知しなかつた。乳呑兒を置いて親元へ返す事は無論出來ない、と云つて給金とか何とか、此上一文だつて金を出すのは厭だから、爲方無し嫁に貰はうといふ彌七の腹は黒い。其を利助は見透して居た。「一旦貰つた嫁を、後になつて返す事は世間にも有勝の事だ。」是が彌七の奥深い考であつた。けれど、左に右く子も生んだ女の事ゆゑ、世間へ出せば疵物である、出來る事なら乙吉の家へ納めたいとは利助も思ふ。

て、「正式に仲人を立てゝ、籍も直ぐ引取るちふなら、其所は又俺から能う話して見す。」と喜兵衛の口から言はして見た。

「そりや無論然う爲る意りだけんど、何分にも今年はお前も知つとる通り物費が多くての、到底今に今ちふ譯にや行かんて、マア當分の所此儘て置いて、來年にてもなつたら改めて儀式上げるちふ事にしたいだ。」と彌七は言つた。

「ぢや、其迄の所給金を拂はしやるか。」

「然う爲んだても可からすがの。何うせお前此方へ貰ふ代物だもん、それとも強つて言はしやるなら、仕度金代りちふ事にしても可いがの。」

「けど、利助さの言ふにや元々そねな仕度付けちや遣れん、裸なら左も右く、俺が家なんかて到底そねな贅澤しちや居れんちふだて。そりや那切の家だての、其位が當り前だ。それに、おりんを那して奉公に出い置くも、究りちふと、總領に田地の一反も貢がせるやうにちふが初手の見込だ。それが恁ねな羽

目になつて、今餘所へ下れ了や、早い話が取れる給金も取らせずに了ふちふ譯だが、其所はマア此方でも不承せにや成らんての。」

「何にしても困つた事だ。此上給金出いとつちや、第一俺が方でも持切れやせん。マア能う見すて。」と彌七は例の繰延を持出す。

所詮話の纏りさうも無い事は利助も見拔いた。で、十月越せば、否應無しに娘を引取る意りで、内々口入なぞにも頼んで、格好な後口に最う心懸けて居た。すると、丁度其れがあつた。乳母の口である。村から七八里隔つた所の可也な物持の家で、素性の正しい體の丈夫なのが是非一人欲しいと云ふので、給金が四十圓、それに四季施は無論付く。

此話を聞くと、利助はホク〱して喜んだ、給金の四十圓が何よりも嬉しかつた。早速娘に逢つて其れを話すと、おりんも無論否やは無い。殊に乳母といふ口は少からず女の心を動かした。奥樣の次に坐つて、寢起は皆奥でして、そして爲事と云ふは子供の世話より外に何にも無い。旨い物も當合はれるし、側の人からも大事にされる。恁ういふ境涯を、毎日おだいの毒口に苛まれて居る今の身上に引比べて見て、おりんはそゞろに胸を跳らせた。乳呑兒に別れなくてはならん事なぞ正直然程にも思はなかつた。

月を越すと直ぐに家へ引取られて、先方へ目見えに行つたが、其れも無事に濟んだ。向ふでも一日も早くと云ふて、其日から二日目には間違無く上る事に約束して歸つた。次の日、買物に町へ行つた。今度は勤めが乳母といふ丈に、然う〱何も無しては行かれないから、下駄と傘、それに頭の物も二種三

種類へる意りであつた。

丁度店の前も通るし、おりんは次手に乙吉を呼出して、些つと暇乞を爲やうと思つた。折好く乙吉は店に居た。筒袖の着物に盲縞の帶を締めて、眞田紐の付いた仕事前垂を膝へバラリと擴げて居る形は、最うスッカリ足袋屋の丁稚に成り濟して居る。丸い鼻、しッぺ眉、其仔細らしい横顔を硝子戸越しに見た時は、おりんは吹出したいやうな氣がした。

店から二三軒離れた電柱の根元に立つて、二人は話をした。話と云つても實は何にも無かつた。

「私や奥郷（勤め先の村の名）へ今度乳母に行く事になつてね、明日那方へ立つて……」

「然うか、おや當分那方だの。」

「へ。けんど、正月にや又お客に來るわね。」

「子は何うしたえ。」

「健て居るがね。」

「然うか。」と、是丈だつた。おりんは最少し何か話さうと思つたが、別に是と云ふ話も思出さなかつた。

「それぢや又お來ての。」と言つて、乙吉は最う別れやうとする。

「お前さんも健てお居てな。」

是で二人は別れた。一丁程來て、曲り角でおりんは振返つて見たが、男の姿は無論最う往來には無かつた。

翌る日、出掛けに些つと彌七の家へ挨拶に寄つて、それでも子供の事を何かと頼んで、村を立つた。おだいは門口で悒々しさうに後姿を見送つて居た。村端れの橋の所で、荷物を持つた利助と落合つて、それから二人は遠い田舍道に掛つて行く。新しい蝙蝠傘を翳して新しい下駄を穿いて、おりんは利助の後に跗いた。

道々利助は何度と無し娘に向つて、

「大事に勤めにや可かんぞよ。第一は坊ちやんだ、坊ちやんさへ粗末に爲にや、無論皆のお氣に入る、可いか。四十圓ちふ給金は中々大儀な事だてな。」と繰返し其れを言つた。

おりんに行かれた後、爲方が無いから彌七は牛乳で赤兒を育てる事にした。一日に五勺と定めて、其れに幾らでも水を割つて、綿玉に含ませては口に當合つてやる。始めは泣いて何うしても吐出して了つたが、終には馴れて、默つてチユウ〳〵吸ふやうになつた。

（完）



新詩五篇

北原白秋

夢の奧

ほのかにもやはらかきにほひの園生。
あはれ、そのゆめの奧。日と夜のあはひ。
薄あかる空の色ひそかに顫ひ
暮れもゆくそのしばし、聲なく立てる
眞白なる大理石の男の像、
微妙じくもまたあてに瞑目りながら
清らなる面の色かすかにゆめむ。

ものなべてさは妙に女の眼ざし
あはれそがゆめふかき空色しつつ、
にほやかになやましの思はうるむ。
そがなかに埋もれたる素馨のなげき、
蒸し甘き沈丁のあるは刺せども、
なにほどの香の痛み身にしおぼえむ。
わかうどは聲もなし、清くかなしく。

薄暮にせきもあへぬ女の吐息
あはれその愁如し、しぶく噴水
そことなう節ゆるうゆらるなべに、
いつしかとほのめきぬ月の光も。
その空に、その苑に、ほのゝ青みに
靜なるすゝり泣き泣きもいでつゝ、
いづくにかさまだるゝ愛慕のなげき。

やはらかきほの熱る女の足音
あはれそのほめき如し、燃えも生れゆく

ゆめにほふ心音のうつゝなきかな。
大理石の身のしろみ、面もほのかに、
ひらきゆくその眼ざし、なかば閉ぢつゝ、
ゆめのごと空仰ぎいまぞ見惚るゝ。
色わかき夜の星、うるむ紅。

盲ひし沼

午後六時、血紅色の日の光
盲ひし沼にふりそゝぎ、濁の水の
聲もなく傷き眩む生おびえ。
鐵のにほひのひと冷み泌みは入れども、
影うつす煙草工場の煉瓦壁。
眼も痛ましき香のけぶり、機械とゞろく。

鳴きゝたる鵞鳥のうから
しらしらと水に飛び入る。

午後六時、また噴きなやむ管の湯氣、
壁に凭りたる素裸の力男ひとり
腕拭き鐵のにほひにうち噎ぶ。
はたあかあかと蒸氣鑵音なく叫び、
そこゝに咲きこぼれたる芹の花、
あなや、しとどにおしなべて日ぞ照りそゝぐ。

聲もなき鵞鳥のうから
色うつり水に消え入る。

午後六時、鵞鳥の見たる水底は
血潮したたる沼の面の負傷の光
かき濁る泥の深みに疲れつゝ、
水死の人の骨のごとちらぼふなかに、
もの鈍き鉛の魚のめくるめき、
はた浮かびくる妄念の赤きわなゝき。

逃げいづる鵞鳥のうから
鳴きさやぎ汀をはしる。

午後六時、あな水底より浮びくる
赤きわなゝき——妄念の猛るとみれば、
強き煙草に、鐵の香に、わかき男に、
顏いだす硝子の窓の少女らに血潮滴り、
歡樂の極の恐怖の管絃樂
顫ひ高まる曲節で朱にくづるゝ。

刹那、ふと太く、湯氣吐き
吼えいづる休息の笛。

聲なき國

聲もなき薄暮の國、
追憶のこなたなるほの暗き闇、
哀れさは冷なる世の沈默、恐怖の木かげ
何處より見ゆるともなく出て來し思の女
淸らなる眞素肌の身の獨ほのかに暮るる。

聲もなき國の白楊
列長う兩側に顫ひわななき、
色靑き蠟の火のほの暗みおびゆるごとく、
廣きより狹み暮れゆく其果の遠き切目に、
仄かなる噴水の香ぞひとり密かに泣ける。

聲もなき國のさかひに
すすり泣くそのゆめよ、水のひとすぢ
かすかにも色映り消えも入る吐息する時、
哀れさは光匂はぬ色もなく聲もなき野に、
ただ寒う涙垂れ熟視めぬる女の思。

聲もなき國のかなたは
あかあかと色わかき追憶の空。
歡樂の樂の音よ、惱み添ふ甘き悲哀よ、
猛り狂ふ戀慕の夢の此方には聞えこそ來ね、
雲はただ昨のごと紅の色にただるる。

聲もなき女の思
熟視めつつ、ややにまた暮れもいためど、
ただ密に頼みてし噴水のにほひとだえて、
存命し惱の夢の曲節も見るによしなみ、
眞素肌の身は悲し冷なる石になりゆく。

聲もなき薄暮の國。
かくていま、追憶の空はあかあか、
血のごとも雲顫ひ樂の音の慄くなかに、
閃めくは聖體盒の香の曇、骨も斑らに
白白と浮びちりあはれはや沈み暈めく。

眼ふたげば

眼ふたげば鳥は囀づる。
盲ひたる色赤き世界のなかに、
疲れたる鳥は囀づる。
盲ひたる色赤き世界のなかに、

また見るは肋のにほひ
光なく力なくさあれほのめく。
肋骨泣きかつ訴ふ。
『わが骨はわが骨は色あかき心の楯よ。
かくてはや終の墓碑。』

鳥は囀づる。
『婆羅門の婆羅門の鹽を宥めつつ
咎ゆゑに晝も夜もかくは啼くめる』
いづこにか、さはきりぎりす。
盲ひたる色赤き世界のなかに、
力なきうめきのやから
騷ぎ立ち、鳥はさへづる。
はた消えてふと見ゆる顔。

その顏はあゝに痩せたるかの少女。
少女のなげく。
『あはれ、君、われはもや倦みも死なまし。』
鳥は囀づる。
少女の顏はややありて白き手となり、
疲れたる、葡萄酒を注ぐ額して
『紅き酒、そはわが血潮、
ほどほどに吸ひて去ねかし。』
鳥は囀づる。
はと眼ひらけばわがまへに赤くちりかふ
光線の光の圜のめくるめき。
鳥は囀づる。
また眼とづれば泣きいづる骨の搖曳。
人の顏。はた、きりぎりす。
鳥は囀づる。

鑲工

靜やかに泣きつゝあれば、
わかこゝろ鑲工なしぬものとなく、——
正方形の鑲工のその壁をしも見まもれば
そはものにぶき顏の面、
面のなかばを、やはらかき莖のうねりや、
あかあかと蔽ひ燃ゆめる罌粟のゆめ
そのかげに、
そのかげに、
盲ひたる白き眼ふたつ。
あはれその
白き眼ふたつ、
なにか見る、

夕ぐれのものゝしじまに。

法樂

吉野臥城

一

法樂の日なり。——桃李の花散らひ、
　汗ばむほどの暖き日の
光に喘ぐ家根の草、
　　雲のただよひ、
ゆく春の空さだまらぬ。

ころろと鳴くや駒鳥の
　ちひさ影さす南椽、
緑の髪吹く風に
　　こぼるる匂ひ、
昔しのぶの若き眉。

『よし、日は曇れ嵐吹け、
　穂麥節立つ鎌倉の
千代の緑は、一時に
　　枯れよ、世のため。』
静、しばらく物おもふ。

『おもふも甲斐な、朝の風
　強う涙の人に吹け。
涙涸れても夫を戀ふる
　　生命は活きむ。』
刀自、なぐさめの優言葉。

『思へば憎し、高官の
　兄の情なき太刀の冷え、
罪なき愛の芽を裂きて、
　　あゝ樂やなと、
左右かへりみし薄わらひ。』

『人と思へは兄と呼べ、
　兄とは呼ばじ、人てなし。
わが歡樂の犧牲に、
　唯一つなる
汝の花を折らむとは。』

『今はた何か嘆つべき、
　紱冕の威武、權勢の
前に折られむ花ならば。——
　　さはさりながら、
舞うても見せむ、面當てに。』

日纏ふ雲のちぎれ飛び、
　晴やかになる空の額。——
何となく仰ぐ心に限なき
　感慨湛へて、
見かへりがちの家戸出や。

二

法樂の日なり。——桃李の花散らひ、
　汗ばむほどの暖き日の
光に集ふ武者達や、
　見物衆や、
ゆく春の胸さだまらぬ。

今日を花なる鶴が岡、
　樂手居並ぶ美しさ。
打つや鼓のたうたらり、
　吹くや篳篥、
靈こそ誘へ、もろびとの。

樂の舞臺に、新綠の
　風は柔らの香を送り、
見る人ならで舞ふ人の
　心和げ、

和げど、音なきほどの囁きや。
つと現れぬ。——そよ、靜
白拷小袖、唐綾に、
精好の袴ふみしだき、
　割菱縫ひの
水干著たる薄化粧。
心、心にささやきぬ。
『判官殿のためならで、
誰にか笑まむ、一瞬も。——
　さはさりながら、
今こそ舞はめ、面當てに。』
みどり黒髪振り分けて、
肩に二十重の波打たせ、
さとひるがへす紅扇、
　昔しのぶに

なほ餘りある聲、姿
艶に立ち舞ふ其のひまも
　心、心にささやきぬ。
『誰にか笑まむ、一瞬も。——
　あゝさりながら
笑まむ、不興の顔を見て。』
靜かに舞の了るとき、
　無言の兄の眼は裂けつ。——
新綠は弱き女の胸にしも、
　あゝ清凉の
氣を齎しぬ、さやさやと。

和歌　紫舟選

○　中野紫葉

眼をとぢて石のなかなる玉をとるかゝる不安にきみに文しぬ

弱き子等闇をおそれて足とくも家にのがるゝ夕暮の街

若き聲皐月の空の濃緑のゆるぎだにせぬそのま中より

見よ空は空のはてまて晴れてありもの秘め多き君よとく見よ

けふきえてつひに見得ざる影かとも思ひて晝の木立をぞゆく

○　白汀生

青き果はうすあか色となりて木にありわかおもひやゝに近づく

あれしときおぼつかなくも母を知ることとくに君のなつかしきかな

あゝこの日君が涙のまへにしていとひやゝけき胸を誇りぬ

わかこゝろわれと知らなくいつかまた同じ路をばかへりきたりぬ

うしろよりひそかに闇はせまりくる一すぢ路をうな低れてゆく

○　山村龍子

薄き日はをり／＼てりぬ悲しみの中より出づるよろこびの如

いたづらに我てふものを疑ひぬ心にあらぬことと云ひし時

あたひなき涙をもてる女てふ身なれば泣かじとがめたまふな

なほもこの冷えしみにくき器ものすて得ず日々の悲しみを盛る

今さらにかりそめ言と打ち消すは我君ならず似たる名の人

○　松本白衣

あな今日も昨日のまゝの日の光倦みつかたれる双の眸を射る

眞實てふ楯をかゝげてわれはゆく疑の矢はたつ

よしもなし
如何に世に生くべけむかを考へし昨日を忘れ死
をおもふかな
かすかなる脈の響をかぞへつゝあなそこひなき
闇にゆく夜や

○　篠原靜風

のちの世もこの世にありしかなしみのまた來と
思ひ君は泣けりや
胸の家おもかげのみを戸にのこしいにける人は
呼べどかへらず
花咲けばうつくしと云ふ執着の人あることを忘
れたまふな

○　井出八井

靜けさや人待ちをれば川風はその面影の幻を吹
く
白百合は鳩の羽色の霧の中に香りて立てり露に
濡れつつ
ゆふべわれ森にさすらひ樹々の葉のさゝやきあ
ひて沈むかげ見る

○　井淵三靈

かくしつゝ一日すぐして又一日はてのひと日は
あゝいかにせむ
傷つきて心よろめく悲しさを笑ひて過ぎし日の
いくばくぞ

○　大岡城南

死はむしろ吾がくるしみをいやすべき尊きもの
とおもひそめぬる

○　武田斐雄

昨日まで忘れてありし父母の愛の大さをこの日
覺ゆる

○　千葉高軒

青潮は遠き戀しき港より胸に迫りて夕べとなり
ぬ

○　西井金羽

わが若さ二なき生命の渇仰にこゝろ忙はしく朝
の日をみる

○　あをじほ

うたすゞめ若き女と男の子をもちて巣くひてあ
りぬさつきの家に

○　村田愛美

思ひわびまなこ閉づれば遠き世の人きて立ちぬ
神の姿に

○　太田生麥

君もなほ厭ひたまはぬ道ながらあまりに多き涙なるかな

あゝ時は絶えず時逐ひ時を呼ぶしたひ行く身の墓はるゝごと

○　眞々田薫

日輪と熱をきそはむ姿して大道を行くほこれる女

大なるなやみの前に我が若きにくき敵(かたき)は火を取りて行く

○　大津照水

小石らはいと涼しげに初夏を小川の水にあらはれてゐぬ

○　關本梁村

寂として波はうつなりくれてゆく湖のほとりに一人し立てば

金色の光に映ゆる遠方の海を見るときこゝろ笑まるゝ

ちひさなるひとりの君を得てしよりよみがへりたるわがこゝろかな

朝の月湖(うみ)にうつりて鐘の音のとよむがなかにたゞよひてあり

われひとり老いぬとおもふ束の間のおもひ涙となりにけるかな

かなしみのなきが如くにほほゑみて語りはすれどおもはゆきかな

○　角田都花

淋しうも暮れしひと日を顧みてまたうなだれぬいふ事もなく

熱風に波こそ起れ塵の海その底をしも人の子はゆく

さきの世に聞き倦じたる心地にも胸うちて來し雨の音かな

淋しさにわれ巷行く罵り叫ぶ其幾團のむれをよろこび

花ならず君ならずたゞやはらかき思ひ靜かに胸おそひ來ぬ

悲しかり淋しかりける過去といふ黒き衣(きぬ)いまぬぎ君による

懸賞和歌東京市小石川區原町百卅三尾上柴舟宛の事



金魚

この冬をたもちし金魚愛しけり　石鐘
金魚飼ふて店に用なき老後かな　同
金魚名に紅蘭女史もありぬべし　同
子を守りて日に行き馴ぬ金魚店　同
噴水に緋鯉に遠き金魚かな　同
太胴の日の丸染めし金魚かな　同
夜祭の柳明るし金魚賣　同
金魚飼ふて賣りもするなる花屋哉　同
朝晴に濁目だつや金魚鉢　同
窓の月金魚の球のうつりけり　同
伏す萩を起せば金魚すばしこき　同
蘭をさして清らに玻璃の金魚哉　同
晝寢さめて金魚に餌やる主かな　藍川

若君に金魚指さす御乳の人　葵雨城
金魚鉢おもちやの船を浮べけり　麥花
金魚飼ふて五尺の池も貧ならず　青波
金魚入れて鉢の石菖黴風あり　菁々
金魚飼ふ池を南に靑すだれ　飛十庵
金魚二尾ノヘたりや硝子鑵　秋灣
投げし麩に金魚皆浮く小池哉　賓水
金魚鉢午睡の窓に吊るしけり　刀川
水藝の金魚とり出す手箱哉　絲水
かけ茶屋やラムネに隣る金魚鉢　泉聲
金魚屋の二軒並びて夜市かな　銀波
妻を呼び子を呼び金魚買ひてけり　一空
一つ行けば皆隨いて行く金魚かな　紅鬼
麩をやればっゝと突いて金魚去る　阿羅漢
源氏讀む姫に飼はれし金魚哉　大哲
池古りて尺の金魚や神の庭　馬目
色町の晝淋しさや金魚賣　翠島
餌に飽かぬ鯉に交りて金魚かな　血達磨
飯ごとの姉と妹や金魚鉢　麥村
笹舟に風無き池や金魚浮く　星象
水あれば樹あれば甜ふ金魚賣　胡角

草の雨小池の金魚躍如たり　烏郷生
打水に打たれて沈む金魚かな　樟峰
金魚鉢椽三尺に日のあたる　不言
金魚池にいつから入りし蛙かな　小魚
藻の中にかくれ顔なる金魚かな　沐雨
學校の池に鮒尾の金魚かな　骨童
皆死んで淋しく在るや金魚鉢　朱郎
湯女と語る夕の椽や金魚鉢　百句拙
鯉の池金魚の池や薔薇の花　木瓜
金魚うれて草花殘る片荷かな　木蓮女
吹き通ほす二タ間の椽や金魚鉢　北窓
水の影金魚の影の障子かな　秋果
青桐にわたす日覆や金魚鉢　竹雨
水更へて鉢の金魚と我れ涼し　春日堂
尾をひいて一尺長き金魚かな　春陵
手枕に金魚見て居て寢入りけり　柿鵬
呉竹の蔭に置きけり金魚鉢　稻村
湯の宿に金魚買ょてぞながめける　栩村
喩ふれば金魚の如き京女　象骨
猫去つて金魚の天下靜かなり　濛雨
金魚鉢芭蕉の窓に置きにけり　ふさ子

絹網に掬ひ上げたる金魚かな　青城
瀬戸金魚和兒が行水盥かな　盤舟
水晶盤浮く藻涼しき金魚かな　同
金魚買ふて子なき夫婦の端居哉　火箭
梅雨寒く藻がくれ遊ぶ金魚かな　同
かしこまる盜人猫や金魚鉢　花舟
金魚賣野中の泉汲んで行く　同
投げし麩の藻にかゝりけり金魚池　槐山
仰けに倒さに尾振る金魚かな　同
傾城の金魚禿の螢かな　天睡郎
噴水の虹の根に浮く金魚哉　同
馬盥に少き金魚放ちけり　春濤
金魚見て榮華の昔語りけり　同
ビイドロの三つに見する金魚かな　剃鬼子
金魚鉢半ばを仕切り秤生ふる　同
金魚池賀茂の川水湛へけり　太郎
金魚も鶺鴒も倶して嫁ぎけり　同
床店の硝子簾や金魚玉　鳥
石一つ蘭一株や金魚鉢　同
庭池の狹きに金魚數多かな　玉
生殘る尾短か金魚憎みけり　雪

有無の尾を振つて居る金魚かな　盛花
金魚屋の水こぼし去る戸口かな　同
競ひ浮く金魚の口の淋しさよ　連雀
二つ買ふ金魚いろ／＼撰みけり　同
眉の上金魚吊らせて晝寝かな　豊川
五六本水を葦出て金魚池　同
金魚買ふて鉢にこぞりし頭かな　梁村
風鈴の下に置きけり金魚鉢　同
糸竹に遊ぶ娘や金魚飼ふ　同
貰ひたる金魚嬉しき日記かな　迂子路
金魚飼ふ池畔に遲きつゝじ哉　同
二つ飼ふ小さき太き金魚かな　同
石槽に不斷の水や金魚飼ふ　尺水
餌を追ふて沈む金魚の遲速かな　同
氷屋の泉水淺く金魚居る　同
二つ居て離れずも行く金魚かな　ろく水
藻の深み憂ひ心の金魚かな　同
藻の花の揺れ心なる金魚かな　同
この池の金魚や誰の飼ひすてし　鬼洗
手習の遂にあくびや金魚見る　同
金魚買はん鎮守祭の日となりぬ　同

赤追へば白をすくひし金魚かな　青葉郎
金魚賣浪華は橋の月涼し　同
金魚鉢花藻の露に朝日かな　同
稗の嵐如露の夕立金魚かな　同
前なる尾被る後なる金魚かな　霧堂
金魚吊て亡き兒の忌日靜かなり　同
ペッ／＼と麩を食ふ音の金魚かな　同
瘦せ／＼て出目倘出目の金魚哉　同
水更へるうちを茶碗の金魚哉　同
瑠璃盤に金魚追らず泳ぎけり　碧雲居
寺の池鮒も浮き居て金魚かな　同
針の先の様な金魚の子なりけり　同
刻印の机に鉢や金魚浮く　同
金魚鉢にならぶ端居の君涼し　同
石楠花の箸で餌をやる金魚かな　梅史
金魚鉢仰向けに見て病む身かな　同
金魚鉢茅渟の玉藻を配しけり　同
釣鐘の下の茶店や金魚鉢　同
金魚賣來ればと思ふ杜若　同
底に澄む月涼しけれ金魚鉢　同
降り晴れて日暑き町や金魚賣　同

古道や老木の宿の金魚池　同

本號應募者は總て百七名、句數二千三百五十一句の多きに及びしも餘りに秀逸せるものを見當らざりしは遺憾なりき、應募句數の多きものを擧ぐれば、石鐘、麥村、太郎、烏城、春陵、柿腸、盛花、濛雨、豐川九氏の五十句づゝ、ふさ子氏の四十九句、玉雪氏の四十七句、剃鬼子、仙山、春日堂三氏の四十五句づゝ、百句拙、霧堂兩氏の四十三句づゝ、碧雲居氏の四十二句、青葵郎氏の四十一句、象骨氏の四十句にして三十句以上投吟せられしは菁々、花舟、梅史、梁村、迂子路、泉聲、血達磨、吼天、小魚その他數氏なりき。

募集課題　二百十日　八月十三日締切
　　　　　紫苑　　　九月十五日締切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事。八月募集の句に限りて特に十三日を締切期日となしたれば遲着せざるやう御注意ありたし。

本號締切期日後に到着せるものゝうち左に

看護婦のもて來て呉れし金魚哉　へき生
金魚飼ふ美人久しき湯治かな　同
鯉の子は金魚に如かず呉れてやる　同
鉢も狹に五寸の尾ふる金魚かな　同



信ずべき新聞紙

野逸道人

今の新聞には嘘が多くて困る。所謂三面記事などは只々面白い事ばかりを主にして、事實を誇張したり揑造したりすることを平氣でやつて居る。僕等の知人や若くは知り拔いて居る事柄を書いたのを見ると飛んでもない嘘つぱしが出て居るから、僕等の知らない事を書いた時でも何處まで信じてよいのか疑はしくなる。又所謂論説を見ても書く當人が自分の思つてゐることを書いてゐるのが甚だ少ないやうである。其證據には論説家を訪問して話をしたり、若くは其人が署名し或

は匿名て他のものに書いたのを見たりすると、何時も新聞に書いて居ることゝは正反對の意見の事が度々ある。新聞がこういふ風になつた理由若くは辯解を求めたら、それはいくらもあらう。三面記事を面白くせなくては新聞が賣れない。賣れなければ商賣にならない。新聞も一面に於て商品であるから賣れない新聞を作る事は出來ない。賣れる新聞にするには面白い事が第一の要件で、面白くするには、少し位の誇張又は捏造をやらなくてはならぬといふ議論もあらうし、又新聞は政治上又は實業上に於て多く或黨或派或富豪との機關になつて居るか若くは特殊なる關係に立て居る。だから書く事に自ら制限がある。自分の信ずる所を正直に書けば其新聞が成立せぬ。且つ政事上の秘密などを餘り書けば誰れも秘密を洩らして與れるものがなくなるといふ所から、知つても知らぬ振りして別の事をいつてゐなければならぬといふやうな議論もあらうし、只一概に罵倒して了ふことは無論出來ない。けれども此風潮が餘り極端に進めば、讀者が非常に迷惑をするのは勿論の事、新聞そのものからいつても誰れも信ずるものがなくなつて、甚だ情けない事になりはしまいかと思ふ。新聞が面白くなければならぬ事、報導の機敏でなければならぬ事、今の時勢にあつては或特殊なる權力に接近しなければ、實際界の情勢に切なる議論をなし能はざる事等は僕等も充分之を認めてゐる。けれども成るべく噓や誤りを書かぬ事に注意して今少し信ずべき新聞を作られさうなものと思ふ。人間には誤りは免れない。又どうしても知れない事も世の中にはある。こういふ人間の力で出來ない事を誤つたり間違つたりする事は止むを得ないが、少くとも故意又は惡意から出た誤謬はやめて貰ひたい。

以上は一般の新聞紙に對しての希望であるが僕等は又更らに一つの希望を持て居る。それは世の權力から全く遠かつて、只一向に自分の見識と良心とによつて出來た新聞の起ることである。かゝる新聞は其實價を認めらるゝ迄賣れ行きも惡からうし、又時事問題の行きさつを知る事や、三面記事の機敏な事等にかけては

確かに普通の新聞よりも劣るであらう。然し自分の信じない事は斷然書かぬ、分らない事は斷然想像を加へない。信じた事、分つた事は正直に書く、正直に論ずる。誤りがあれば見識か足らなかつた爲めである。知らなかつた事があれば探究の至らなかつた爲めである。然し嘘、僞りは斷然書きも論じもしない。かういふ新聞は多く出ることを望むことが六つかしい。然し日本の中に一つや二つ位はあつてもよからうと思ふ。利益の考を以ては無論起すことの出來ない事業であるが、然し今日の如く殆んど總ての新聞が信ずべからざる時にあつては其反動として、かういふ新聞が大いに歡迎されないとも限らない。兎に角僕等は一般の新聞が今少し信用すべきものとなり、又一二の全然信ずべき事のみを書く新聞の出現せんことを望むのである。

「病牀錄」を讀む

櫻陰生

「病牀錄」とは眞山青果氏が國木田獨歩氏の病中の談話を書き綴つた本である。

凡そ僕の知て居る小說家中で獨歩氏程談話の面白い人はなかつた。實に元氣があつて、觀察も言葉使ひも共に奇拔て、成程かういふ人だからあの小說が書けるのだと何時も感ぜざるを得なかつた。

凡そ今の小說家中で青果氏程力ある文章を書く人はあるまい。時に破格の文をやり、生硬の語を用ふるが、短句勁節、剛健警拔の筆力に至ては蓋し何人も氏の右に出づるものがない。

獨歩氏は確かに詩人的思想家であつた。彼れの思想は思想として、直截に明快に創作以外別に傳へられなければならぬものであつた。彼れは發病以前には其思想を日記の中に書き止め茅ケ崎に行てから以後は青果氏をして之を筆記せしめた。日記は未だ見ないから知らないが、恐らくは死に近いてからの方が一層進んだ考も鋭い觀察も出たゞらうと思ふ。獨歩氏の思想を青果氏の筆を以て傳ふ。最も其人を得たり。

表紙を開けば中に茅ケ崎南湖院一帶の寫眞を刷り込みあり、嘗て氏を訪問したるの時感想が胸に浮んで來る。更らに二三枚をめぐれば満谷國四郎氏の獨歩氏死像—死後十八時間經過してからの寫生がある。死骸を見た人の話を聞くと、そつくり其儘てよくもこんなによく書けたものだと感心してゐるが、今春二月以後相見ざりし僕には餘りやつれて了つて別人のやうに思はれる。之をめぐると青果氏の序文があつて、此本の出來た由來を委しく書いてある。之を讀み畢ると小杉未醒氏の病室の寫生、及び茅ケ崎の海の畫がある。

本編は「死生觀」「人物觀」「戀愛觀」「藝術觀」「雜觀」と分れ、又添ふるに「獨歩手記」と青果氏の「國木田獨歩氏の病狀を報ずる書」とがある。

痛快な、奇拔な觀察をキビ〳〵した力ある筆で書いてあるので、何處をよんでも皆面白い。始めから終りまで殆んど閑文字駄文字なしといふも溢美てはない。中には餘り文章が旨いので如何に話上手の獨歩でもこんなに旨く言つたのかなと思はるゝのもある位である。自分の知己朋友作物戀愛に關する批評、觀察談話、追憶。彼れの僞らざる、欺かざる性格が其間に躍然としてあらはれてゐるので、此本其ものゝ價値はいふまでもないが一般の人が彼の作物を讀むに當ても極めて大いなる參考になるだらうと思ふ。

此本から上がる利益は總て獨歩氏の遺子、虎雄氏に送て氏成後の學資にするといふ計畫だと聞く。極めてよき事である。吾等は此點に於ても此本の大いに江湖に觀迎せられんことを欲するの念甚だ切なるものてある。

兎に角近時出版されたものゝ中て最も面白き最も注目すべき好讀物であることを堅く信ずる。



倫敦だより

オペラの二階觀……お轉婆の行列

六月十四日ハイドパークに於て

水無月生

中央公論記者足下

健全なる貴誌の發展は實に目醒しき至りに候、目下は自然主義の議論など盛なる模樣に見受けられ候、雨降りて地堅まる、隨分喧嘩に火花を散らすも面白かるべく候、それ文壇はなどと說き出しても、元來は一の門外漢に過ぎず候得ば、語るべき何等の事も之有に候はず、それよりは當地の通信でもする方が宜いかと思はれ候。

先月末よりは漸く麗かなる天氣と相成申候、ハイドパークの新緑殊によろしく候、鮮明なる彩色にて粧を凝せる婦女の木の間隱れにちらつくなど好個書中の者に候。

何がさて六ヶ月以上煙り返つた空が一時にパット明かになりたる昨今、ありとあらゆる者、陽氣立ちたるも無理からぬ事に候、殊に先月末には佛國大統領の正式訪問有之仲々の賑ひにて候ひし、これはルータ電報にて既に御承知なるべければ詳細は省略致し申候、大統領と國王とのオペラ見物の如きは其の盛大なる最も人目を聳動致し候。

五月廿七日（水曜日）はキングの特命によりオペラには佛の大統領を饗應せらるべく定められ候、前々よりの評判は素晴らしき迄に高く、これぞ一生の語り草見落すなと言ふ、聞けば場内を裝飾するバラの花代丈けても壹萬二千圓の豫算とか、他は推して知るべく候、それに準じて見料の高い事滅法にて吾人の寄り付き得べき範圍どころの騷にあらず、平日四十圓のボックス（これは一部屋にて日本の棧敷の稍々高等なる者）が當日は八百圓、平日一晩十圓の正面の椅子一ツが當夜限り九十圓と云ふ無法千萬（こつちから云ふて）の値上げ其れすら一ヶ月前に奇麗に賣り切つて僕等がこの催のあるを新聞で見た時分にはロアングリの始末、よし手に入つたにしても九十圓一晩に棄てらるべきにもあらず候得ば、古へより長松の定席と申す屋根裏の立見に行くことに決し候、立見と云ふても此の夜は一人前五圓の徴收なれば。仲々安からず、それに此處は前から席を取つて置くと云ふ上等の部と違ひ、早く詰め掛けたのが得になる譯なれば△△生と牒し合せ、開場（午後八時）前二時間位より辨當に椅子は元より中央公論迄持參して立ン坊となるべしとの作戰計書に候、處が其の日の午後一時他の所用にてオペラの附近に行きたるに余等と同じ目的の先生方既に長蛇の陣を張り居るとの警報を齎らし來り候、成程嘘にはあらず、此の日の夕刊新聞中午後一時頃出てし初版には其の模樣が既に記してあり、早きは午前二時半から戸口に待つて居る

とか、午前十時には最早長蛇の陣を形成せりとかにて其れを寫眞に迄して掲載致し居り候。

　これには流石の乃公も策の出づる所を知らず、去れど名に負ふ△△將軍こんな事でなんて凹み申さんや、それと忽ち馬車を飛ばして內外用達舍に行き申候、歸りての報告には支配人に相談して一人分だけは漸く都合を付けたとの事に候、其の手段と云ふは、仝舍の使歩きの小僧數名他の某々客の依賴によりて天明より長蛇陣中の人となり、愈々戶の明く時本人と入替る手筈なれば、其の小僧に言ひ含め胡麻化せば一人位はどうかなるとの話に候、小僧と入替りの段を首尾よく濟まして漸く入場仕候、聞きしに勝る裝飾の立派さ、舞臺より棧敷にかけて一面の花にて埋められ、電燈の眩ゆく照映する所全く壯觀に有之候、皇帝席の眞紅の幕殊に目立ちて覺えられ候、暫くは恍惚として醉るが如き心地致し候、時移りて英佛の國歌吹奏裡に主客入場皇后、皇太子妃以下の美しき衣、輝く寶石、此の瞬間の光景は實に色彩美の極致とや申すべき、肝腎のオペラの妙に至りては此處に言說し得べき限りに非ず候。

　一昨日は例の女子有權論者の大示威運動會有之候、會する者無慮一萬幾何と註せられ申候、上は皇族を除きたる貴族より下は裏店の山の神に至る有ゆる階級を含み居り候、中には牛津劍橋大學の學位を有する御女子樣も少からずこれらは其の學位に對する制服を着して列中に加はり申候、その演說會には現內閣は妾等を壓制せしとか何んとかと薄き唇を喋々と飜し申候、氣の弱き生の如きは喫驚徒らに眼をパチクリするのみに候、一般の男子は冷笑と嘲罵を以て迎へ申候、然し女の方でもこれに負けては居らず、行列の途中賣言葉に買言葉も大分有之し模樣に候、これは女子有權論者會が主になり、英國以外よりも加はれる團體あり、女子自立會、看護婦會、女子貧困者救濟會等之れに應援せる爲め、かくは一萬を超ゆるに到りたりとの事に候、皮肉の嘲罵中最も振つたのは貧困者孤獨者救助會が旗を押し立てゝ通りし折り柄、群集中より「もし、其所な家を持たせ給へる奧樣方、毎朝何時に御目醒め遊ばし

給ふや」。これにはどつと笑聲の波を立たしめ警護の査公さへ思はず吹き出したる由に候。

嚼氷狂語

曲肱山人

△斯う暑くなつては當前の談は中止。「何だそんな事は當前の事つたよ、止せ」。「何だと當前の事を言はねーて世が通るか、道理とは當前の事つたぞ」、斯う來るお客に掛り合つては飛んだ御難先づ々々謝した後でいちご水一杯四錢の損は確なものだ。夏の談話はお手輕に限る。

△白人種と言へば平等を愛し黃人種といへば專權を愛するかの樣でもあるが、少くも人相觀からすると丁度此反對に見えるのは變だ、黃人種は目でも鼻でも額でも顋でも兩頰でも、動もすれば相與立して何れ貴賤の則ちの無いのもあるに、白人種は鼻のみ獨裁君主的に敢て儼然として四海に君臨して御座る、目鼻額顋兩頰の一切惴々焉として唯これ逆鱗に觸れんかを恐れて居るかの觀がある。が鼻高きを以て尊からず、毛あるを以て尊しとする。

△屹と結んだ唇の合ひ目を見ると、西洋人のは一の字の兩端が上に撥れる、日本人のは下に向く、之て見ると彼は自ら向上的のところがある、此は自ら向下的のところがある、彼は進步の民族であるらしく我は退步の民族てあるらしい、と見ると如何にも殘念至極だ、がそれ然り豈それ然らんや、尺蠖の伸びんとするや先づその身を屈め、鷙鳥の擊たんとするや先づその翼を斂む、日本人のへの字口豈以て爾く滅入るべけんや。

△日本の鋸は上から下に引く西洋の鋸は下から上に押す日本人は低く床の上に寢る、西洋人は高く寢臺の上に横はる、日本人人を馬鹿にする時は多くお臀を叩き西洋人人を馬鹿にする時は多く爪を口にする、彼は兎角上を好み此は兎角下を好む如きも、又これ前項よりの推理て左迄に悲觀するに及ばぬ、獨り日本人の鼻端は往々にして天を仰ぎ西洋人の鼻端はお定まりに下に俯す、仰ぐものは將に俯せんとするなり、俯するものは將に仰がんとするなり。なしに…………………

△オート、ツー、ピーの學は眞平御免だ、差當り倫理なんぞはとは長谷川天渓さんあたりの氣炎だが、臆病もの丶我輩どうやら背後の闇が怖い樣て早速合槌も打ちかねる。が現行の倫理を無上のものとばし畏み畏みも申さる丶御連中にも曰くがある、早い談一例を引けば性慾問題なんぞ此頃連りに騷がれて居る、何故性慾問題ばかりが此樣にまで仰山にいぢめられるだろう。借問す性慾と衣食住の慾、乃至名譽權勢の慾と如何なる上下輕重の差があるだらうぞ、神の目からは諸慾無差別凡て同一の秤にかゝると信ずる、天下に凍餒の民なからしめ賤劣の民なからしめんとの神意ならば、又天下に性慾に飢うるの民なからしめんとも望まる丶てあろう、噫それ淫蕩に逸するべからず。それは言はずともの事、獨り性慾に限つて言ふべき事てはない。我輩は規矩に正さる丶を愛する、繩墨に

問はるゝか愛する、從つて倫理をも愛するが、此根本の諸慾一如觀の上に建設せられぬ限は、兎角片强ひのものに感つて亂民は絕えぬ事と思ふ。

△如何樣な品物でもお試用あつて萬々一偶等御座らば御返しあつて然るべしといふものを、此世は偶多き中人口で貰つた妻君をも、お試用あつて行けぬからとて返しは出來ぬ、返せば世間で彼是言ふが此社會的制裁も出來がまづい、啻に中人口ばかりでない、男女一つになる迄は互に舞臺の上の役者である。いざ樂屋へ入つて手を握ると飛んだ白ものでギャフンが多いのだ。如何しても御試用制度が必要だが、之は又他面から重大なる弊害が伴ふ、今妙案あるではないが問題とすべき一つである、それ然り此一二ヶ條のみでも現在の倫理は謳歌出來ぬ。

△女の利器は流眄に在りとは誰やらから聞いた、それの曰くさ、妻は自分の心底氣に入つた客の來た時には特更澄まし込み、何かの拍子に露も滴る樣な愛嬌の流眄をちよいと先づ良人に見舞ふ此時良人たるものうつかりやに下つて雁首を下に向くべからず、刹那を利用して妻は流眄を意中の人に移して姦淫するなりと、姦淫とはひどいが、心に姦淫を思ふものは云々というた基督的の筆法であらう。

△人を見るは眸子より善きはなしと孔子は曰つた、孔子の樣なぬからぬ奴を第三者に置き、基督をして司獄の吏たらしめたならば天下に免かるゝの變はないかも知れぬ。

△笑ひ轉げる時程全身の勢力を用いる事はない、此勢力を隨所に用ひれば天下恐らく成らざるの事業なからん、擽ぐられる時も左樣だが前者は積極的で後者は消極的だ。

新刊批評

▲小品十種

幸田露伴著　成功雜誌社發行

緣不緣以下の小品文十種に更に附錄として七碗歌、笑話六種それに小さな心、初霜、盤寶の三篇を添えたもの、世故に長け人情に精い著者が、その折々の心行く材を姿趣に富む輕快の筆でさら〱と書き流したもの、固より苦心など有ろう筈もなけれど、流石に一代の文豪單に文章を以て論ずれば斯樣な書き捨てものにもそつは無く、自ら備はる一種の氣品に讀んで淸高の情を長ぜしむる處は慥に現代の諸文品の上に超絕して居る。（定價金壹圓）

▲ちゞ屋の娘

渡邊麗水著　長明堂書店發行

不遇の少女玉枝といふを主人として極めてロマンチックの波瀾ある境遇を寫し、末は目出度し流に收まつて居る、結構ものと同樣に目の肥えぬ女、小供には、その變幻測られざる處にお目の止まるであろうが、眞面目な作品としては批評の限でない、著者の文章は小說と紀行文と選ぶ所はない、亦是れ一種の體であつて絢爛の美は即ち美だが、誇張に過ぎて實際と引き合はぬのが難だ。（定價金七十錢）

▲乞食

木下尚江著　昭文堂藏版

狩野といふ友の語として、「無神論だの何々主義だのといふ小智慧に縛られて、君は高慢といふ大馬鹿ものになつて居るのだ、乞食は可いよ、乞

食は善いよ、本當に素ッ裸になり給へ」といふのがある、之に動かされて聖書を借覽し、有らゆる一切のものを抛つて獨り神に從ふに至つた石山といふものが主人公である、此に濱子といふ幼な馴染やら狩野の一家の空氣やら、則けても狩野の姉君江の自分に絡む戀とを經緯して巧に人情の自然を描いたもの、著者の凡ての作に見えるが如く、此篇も尠からず讀者を感發すべき思想を含んで居る。(定價二拾五錢)

▲解說批評倫理學原論

中島德藏著
東亞堂書房發行

ファイト氏の原著An endustry study of ethics により、その著の各章に亘りて叮嚀なる解釋批評を試みたもの、初に緒論の部に於て倫理學の範圍並に研究法と倫理問題とを說き、以下諸學說を簡明に快樂說と唯心說との二大綱に約して更にその關涉を究め、最後に現實生活に於ける諸問題に對し徹底せる解釋を與へたもの、何人にも稗益あるべき活ける倫理書として江湖に薦める(定價金五拾五錢)

▲風葉集

小栗風葉著
新潮社發行

或は淸麗、或は濃艶、匂ひあり、濕ひあり、調子あつて其文章の妙殆んど人工を極めて天巧を奪はんとするの慨あるもの我風葉を措いて外にはないといふ事は僕の屢々論じた所で、本誌の讀者の中にも或は御承知の方があるだらうと思ふ。本書は氏が此二三年來の最も眞面目なる作を集めたもので「青春」「戀ざめ」「天才」の三長編以外の氏の價値ある作は悉く此中にある。嘗て本誌に出て好評を博した「ぐうたら女」を卷頭にして「女髮結」「うみの母」「わき道」「草わけの家」「好奇心」「青梅」「男者」「歪力」の九編がある。後の三篇は左程感服もされぬが初めの六編は幾度讀んで見てもよい。年若い文章の下手な作家などには少しお護符にして飲ませたい程よい。(哲生)(定價八十錢)

▲三人叢書

風葉、春葉、秋聲著
東京國民書院發行

菊版八百頁の大册子にして製本亦頗る美麗、一卷を三編に分て、上編には風葉氏の作五編、中編にには春葉氏の作九編、下編には秋聲氏の作五編を收む、風葉氏の「深川女房」「前後不覺」「うしろ姿」。春葉氏の「火事」。秋聲氏の「驕慢兒」「弱き郞」等皆見るに足る。揷畫は一條成美の筆に成れるもの三枚あり。此書を繙いて三人三樣の着想筆致を比較研究すれば小說好きの人には極めて興味ある業ならん。(定價一圓五十錢)

▲國木田獨步氏病牀錄

眞山青果編
新潮社發行

近時の出版界中最も注目すべきもの也。其稍々詳き批評は本號評論內にあれば玆に略す(定價八十錢)

▲三叉演說集

竹越與三郎著
二酉堂發行

我國に於ても雄辯家又は達辯家なきにあらざれども、其修辭の粗雜なるが爲めに、聞いて耳に快きものも、寫して文字にあらはせば、讀むに足るべきもの誠に少なし。竹越與三郎氏は此多くの演說家とは逈かに選を異にし趣味饒かなる言語を巧みに使用して、聽者の美感、情操に訴ふることを勉めらるゝ爲めか、其演說を寫して文字にあらはせば直ちに絕好

の讀物となる。此篇氏が議會又は學校集會等に於てなしたる演說を集め演說を稽古せんとするものは固より單に論文として讀まんとするものにも興味多し。（定價六十五錢）

▲血笑記

長谷川二葉亭譯
易風社發行

アンドレーフの作を飜譯したるもの也。二葉亭氏は固より飜譯界の老手譯文にソツのあらう筈なし。此篇全體象徵的神祕的にて稍々解し難き節なきにあらざれども歐洲文壇に於ける新傾向を見んとするものは是非共一讀するの要あるべし。精評は精讀の上に讓る。（定價八十五錢）

▲怪光

田口掬汀著
不振會發行

「毎日電報」紙上に掲げられて好評を博したるもの丶前篇也。事件極めて複雜にして後篇の方にて如何に發展すべきかを待遠しく思はしむ。（定價八十五錢）

▲自然主義

長谷川天溪著
博文館發行

天溪氏が太陽に出したる論文を集めたるもの也。「幻滅時代の藝術」「現實暴露の悲哀」等評壇の物議を醸したるもの極めて多く、今日の文藝を談し、自然派の議論を窺はんとするものには極めて都合よき本也。（定價五十錢）

▲御風詩集

相馬御風著
新潮社發行

相馬御風氏の新體詩及び短歌を集めたるもの也。流麗の調、清新の思緣蔭風冷やかなる處に於て誦するに適す（定價三十五錢）

▲よろづ短言

内村鑑三著
警醒社發行

明治三十三年より全三十六年に至るまで「萬朝」に掲げたる短文を集めたるもの也。時に余りにヒネクレてイヤになるものも少からねど、勁拔奇警、思はず快哉を叫ばしむるものもなきにあらず、明治の一奇才内村氏の面目躍如として此册子の中にあり（定價五十錢）

▲海の聲

若山牧水著
生命社發行

早稻田出身の歌人若山牧水氏の歌集也。概して熱烈の感情を優麗の詞藻を以てあらはせり（定價五十錢）

△日本昔噺

岩谷小波著
博文館發行

著者の獨壇場なる日本昔噺何て惡からう筈はなし、小供達に馴染の桃太郎から始めて猿蟹合戰、花咲爺、舌切雀、かち〱山、物臭太郎、文福茶釜と都合二十四編、各編孰れも單行本として、曾て一度太郎ちやんみーちやんの机上に飾られたものを、此度一つに纏めて發行したもので、更に細心なる推敲が加はられて居る、總クロースの赤表紙頗るの美本である。定價金八拾錢）

△成句雜句用例獨逸語註解

篠山治一、井上忻次著
東海堂書店發行

獨逸語の註釋書は、英語に比しては少いといふもの丶、而かも坊間に見ゆるもの多からずとはせぬ、が本著の如く單に成句雜句に適解を與ふるのみでなく、一々その組立を明かにし、各語の文法上に於ける關係、位置、性質等、更に文章としての如何、會話としての如何等と萬遍な

細心の顧慮を拂つたものはない、それに三百題盡く精選の余になつて、相互に類句若くは類例と見られるものなど有ることなく、左様に見らるべきものがあるなら、有る限りは關係ある題下に於て煩を厭はず拾ひ立てられて居るのである、それ故又六號の小文字でありながら註は往々にして一冊三頁に亘るものもある、語學は人の身體と同じく各部分、即ち譯解、文法、作文、會話の諸科相並んで進歩せなければ十分の効果を望むべからざるものだが、此著は誠に能く此點を目指して居るのだから、讀者にして輕々にページを送ることさへなくば、十分に獨逸語を手に入れ得ることゝ信ずる、加ふるに行文流暢語學者動もすれば文に短きの謗を免れ居る上、材料は獨逸書の各文體よく落なく取られ、ゲエテ、シルレルの文豪の筆よりその他現今の新聞雜誌果ては又小説戯曲雜著等の凡てに及んで居る、それ故一冊にしてあらゆる文體の如何をも併知することが出來る、(ソークロース上製七十五錢)

△滑稽小説奇蹟　　海賀變哲著　佐久良書房發行

筆のすべつこき事は蒟蒻の如く、ぬらりくらりする所はそれの更に一本橋を渡つたらはと思はるゝとても言はう、十二章二百五十頁のものながら、眉の凝る憂なしに讀みおほせらるべきもの(定價七十五錢)

△風月余情　　吉田勿軒著　文泉堂書房發行

文に甚しくむらがある、面白いものは頗る面白い、面白からぬものは頗る面白からぬ、濱離宮拜觀記から以下の五篇を見ては前評を下し、東寧游記や會津の東山等を見ては後評を下す、その他は未だ盡く讀むに至らぬから言へぬが、失は事を叙するに疎なるにあり、得は不用意の裡に異趣を寓するにありだ、(定價金四十八錢)

△小説自白　　宮崎湖處子著　如山堂書店發行

國民新聞で一寸御目に懸つたことある著者が偽らざる半生の經歴を、默つて居ても誰にもある煩悩の犬の、狂ひ、猛り、吼えたる後を菩提の鹿の漸く來れる昨今の心境より、敢て忌憚なく披瀝するに至つたもの、讀んで慨然たらざるものなく又以て自ら戒むに足りやう。(定價金六拾錢)

△實用商用文練習帖　　中野觀秀著　實業之日本社發行

商業に志すものをして商業文をば如何なる書體如何なる文章、如何なる形式を以てすべきかを敎えたもの。(正價六拾錢)

又も材料の多かりし爲紙數の都合附かず、已むを得ず本號に限り海内欄を省くこととしぬ、次號よりは暫つて各欄の完整を圖るべし。

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋尾張町	東海堂
仝　日本橋呉服町	北隆館
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋鎗屋町	良明堂
仝　日本橋住吉町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪備後町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

〇壹冊定價（郵税八錢）　金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外

冊數＼國別	内國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢

以上郵税共

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盗取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の内より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割増の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず濟まさるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年七月廿七日印刷
明治四十一年八月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野升一
東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(ヌ)コ八
振替口座七八〇七
營業品
概目
時計附屬品、指環、簪、
帶留、ブローチ、手釦
紀念品一式
最新の流行品目錄郵券
六錢封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價
金銀部